出久は最強の地球人

ティガ・レウス

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

無個性の少年緑谷出久。彼は幼馴染から１０年間虐められ憧れのヒーローには夢を否定された…ある日出久は突如現れた謎のゲートに吸い込まれてしまいドラゴンボール超の世界へ飛ばされてしまったのだ

ドラゴンボール超の世界で出久は悟空の弟子となり様々な技を習得した。そして仲間達と協力して地球を侵略して来た敵達と戦い別れや出会いを経験した。そして破壊神ビルスと付き人のウィスの協力により元の世界へ戻ったのだった

爆豪アンチとなりますのでファンの方は注意して下さい。不快になるような感想はすぐに報告とブロック、削除しますのでご了承の程お願いします

非ログインの方の名前を悪用して感想を書く人がいますのでログインのみに感謝を書けるようにしました

内容が薄い、描写がつたない等の要素があります。それでも読んでいいという方だけお読みください

誹謗中傷、心無いコメントは削除、報告します

目次

原作開始〜雄英入学編
ドラゴンボール超の世界から帰還 ―― 1
雄英高校受験に向けてトレーニング開始!!? ―― 5
雄英高校受験日 ―― 8
雄英入学!!? ―― 13
個性把握テスト ―― 17
戦闘訓練前編 ―― 21
戦闘訓練後編 ―― 24
委員長決めと迫る悪意 ―― 28
悪意襲来編
USJ（嘘の災害と事故ルーム）襲撃事件 ―― 31
遅れてすまねぇ…希望のヒーロー登場!!? ―― 37
出久VS脳無 ―― 40
「命をなんだと思ってるんだ!!?」出久VS対平和の象徴対策脳無!!? ―― 44
臨時休校 ―― 48
雄英体育祭編
雄英体育祭開幕！最初の競技は障害物競走!!? ―― 51
ポイントは一千万!!?狙われまくりの騎馬戦!!? ―― 54
オリエンテーション!!? ―― 57
最終競技開幕!!?出久対物間！ ―― 61
二回戦目出久vs飯田 ―― 64
準決勝！出久対轟 ―― 67
決勝戦！出久VS心操 ―― 70

番外編

原作世界へ ―― 74
パラレル組の自己紹介と出久対爆豪!!? ―― 78
ヴィラン侵入!!?出久の強さ「俺は悟空さんの弟子だ。覚悟しろヴィラン共!!?」 ―― 82

職場体験編

ヒーロー名考案 ―― 86
職場体験開始! ―― 89
ｖｓヒーロー殺しステイン ―― 92

期末試験編

迫る期末試験 ―― 101
実戦形式試験 ―― 106

二人の英雄編

出久は最強の地球人二人の英雄!!? ―― 112
出久は最強の地球人二人の英雄!!?後編 ―― 120

林間合宿編

林間合宿開始 ―― 133
地獄のトレーニング林間合宿 ―― 139
林間合宿襲撃事件!出久ＶＳマスキュラー!!?「身体もってくれ…５０倍界王拳!!?」 ―― 144
ＶＳ開闢行動隊 ―― 149
敗北と林間合宿の終わり ―― 160
ｖｓオールフォーワン戦
雄英謝罪会見、奪還作戦開始!!? ―― 165
変わり果てた姿!!?出久ｖｓ爆豪!前編 ―― 178

変わり果てた姿出久対爆豪！後編‼？「これが新たな姿…アルティメット界王拳だ‼？」 ―――― 183
これが最大の技…「俺に元気を分けてくれ‼？」その名は元気玉‼？ ―――― 187
復活のF編
F襲来前の穏やかな日々 ―――― 192

原作開始～雄英入学編
ドラゴンボール超の世界から帰還

とあるビルの屋上
ドオオオオオオオン!!?
光の柱が現れ三人の人影が現れた
「元の世界へ戻りましたよ出久さん」
「僕らに感謝するんだね」
「ありがとうございますビルス様にウィスさん」
「ほほほほほ♪どう致しまして♪」
彼の名前は緑谷出久…ドラゴンボール超の世界から帰還した少年である。連れて帰って来たのは破壊神ビルスとその付き人のウィスである
「この世界には美味しい物があるのかい?」
「勿論ありますよ。カツ丼はどうですか?俺の大好物ですし得意料理ですから」
「へぇ～是非食べたいね」
「残念ながらビルス様私達はこの世界に長くは居られないようです。また次の機会にすればいかがですか?」
「むぅ…そうするか。ではまたな出久」
「はい、ビルス様もウィスさんもお元気で」
「ではまた会いましょう」トントン
ドオオオオオオオン!!?
ウィスが杖を地面を数回叩くと再び光の柱が現れビルスとウィスは元の世界へ帰って行った。
「”あの日のまま”か…さて、家に帰るか。母さんが心配しているしな」
”空へ浮かんだ”出久は家に帰って行った
その途中煙が上がっている所があり出久は空から見ていた
「あれはヘドロヴィラン!!?捕まってるのは…爆豪君か」

爆豪がヘドロ敵に捕まっていたのだ
出久は耳を澄ませてヒーロー達が何をしているか聞いてみた
「私二車線以上じゃなきゃ無理〜！」
「お前ならなんとか出来るんだろ？」
「あの子の個性は俺とは相性が悪い！お前に譲るよ」
「おあいにく様！こっちは消火で精一杯だよ！」
「せめてオールマイトがいればなんとか出来るんだが」
「あの子には悪いが耐えてもらうしかない」
ヒーロー達がいたが押しつけあって助けようとはしない
「（この人達は本当にヒーローなの？）」
出久は助けようとしないヒーローに呆れていた
「（仕方がない…やるか。その前に正体を隠さないとね）」
出久は腕につけている腕時計型のデバイスを起動した
キュィィン
起動が完了すると顔をヘルメットで隠した人物が現れた。グレートサイヤマン３号（悟空の息子である悟飯命名）だ
そのままヘドロ敵とヒーローがいる場所まで降りた
シュタ
「何だ⁉？」
「新しいヒーローか⁉？」
「お前は誰だ⁉？」
「グレートサイヤマン３号！覚悟しろヴィラン⁉？」
グレートサイヤマン３号は一気にヘドロ敵に接近して
「だらららららら⁉？」
ドガガガガガガガ⁉？
ヘドロ敵に打撃を叩き込みヘドロを爆豪から引き剥がし
「太陽拳⁉？」
ピカァァ⁉？
「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁ⁉？目がぁぁぁぁぁぁぁぁぁ⁉？」
ヘドロ敵に太陽拳で目を眩ましてヘドロから爆豪を救った
「見ていて下さい…」

ヒーローに冷たく言うと再びヘドロ敵に向き直った
「よくも良い隠れ蓑を‼?」
「これで終わりだ‼?」
グレートサイヤマン3号は手をかざして後ろに構えた
「かー!」
「めー!」
「はー!」
「めー!」
すると構えた手の平にエネルギーが溜まった
「波ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ‼?」
放ったエネルギー波がヘドロ敵に直撃した
「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ‼?」
ドガァァァァァァァァァァァン‼?
「」チーン
ヘドロ敵は気絶した
「後は任せました”人任せのヒーロー”さん貴方達はヒーローを辞めたらどうですか?転職サイトで新しい仕事を探す事を勧めますよ」
「まっ、待ってくれ‼?」
ヒーローが何か言おうとしたがグレートサイヤマン3号は無視をして去って行った
ーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーー
ーーーーーー
ーー
無事に家へ帰た出久は心配をかけた母に謝り他の世界へ行って冒険した事を話した。
「そうなのね」
「力をつけたから見てくれる?」
そう言うと出久は舞空術と”気”を引子に見せた
「よかったね出久」
「うん!」

母に信じてもらえた出久は引子に個性として登録するか勧められたが
「いや、俺は無個性のままでヒーローを目指すよ。無個性の子供達の希望になりたいしね」
出久の能力はあくまでも「身体能力」個性では無いのは確かなのだ。出久は無個性で苦しんでいる人達の希望のヒーローになる為に無個性でヒーローを目指すのだった

雄英高校受験に向けてトレーニング開始!!?

ドラゴンボール超の世界から帰還後僕はいつも通り学校生活を送っていた…爆豪君?爆豪君なら爆破の暴力をしようとしたが俺は残像拳でかわして首元に手刀をして気絶させた。

「虐めを見てみぬ振りをしていた先生…おめぇは社会的に終わるからな」

「ど、どう言う事だ?緑谷」

「俺が爆豪君につけられた消えない爆破の痣と虐めを無視していた先生の事は校長先生に連絡済みです」

「な!!?」

「勿論君達もだよ」

「「「っ!!?」」」

出久はクラスメイトを睨んだ

「虐めを止めずにむしろ面白がってやっていたんだから君達の高校推薦は無しになりヒーローの高校や普通の高校に行けないだろうね」

「み、緑谷!悪かった!!?」

「虐めてごめん!!?」

「既に遅い…じゃあな」

出久は無視をして教室から去った

ーーーーー

ーー

ー

学校から帰宅した出久はとある場所へ向かった

「此処がゴミだらけになっている海浜公園か…」

出久は海浜公園に掃除とトレーニングをしに来ていた

「ゴミ掃除もできるし修行もできる!一石二鳥だな。そうと決まれば早速開始だ!!?」

出久は海浜公園に放置されていたり流れ着いたゴミの掃除を開始した。それから数週間後

「だいぶ終わったな…」

海浜公園のゴミは三分の一程少なくなっていた。
「まだまだ溜まってるからもうひと頑張りだ‼?」
再び出久は掃除をしてひと段落したらトレーニングもした。それから更に数週間後
「終わったぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ‼?綺麗になって良かったよ」
海浜公園にあったゴミは綺麗に無くなり出久はスッキリとした顔になっていた
「流石だ！少年‼?」
「このデカイ気は…」
「私が来た‼?」
「オールマイト…」
オールマイトが出久の前に現れた
「緑谷少年！この海浜公園を綺麗にしてくれてありがとう‼?」
「い、いえ」
「君はヘドロ事件の時に爆豪少年を救ったね」
「(話を合わせるか) はい、身体が勝手に動いたので」
「君なら私の力を受け継いでくれる！」
「力?」
「その名は”ワンフォオール”代々受け継がれてきた個性だ」
「受け継がれてきた個性…」
「君はヒーローになれる‼?」
「…せっかくだが断る‼?」
「な、何故だい⁉?緑谷少年‼?」
「貴様は俺になんて言ったか分かるか?”現実を見ろ”と言ったんだよ」
「それは…」
「否定したくせに”君はヒーローになれる”だと⁉?否定した貴様に言われても嬉しくねぇんだよ‼?貴様はヘドロ事件のクズヒーローと一緒だな」
「…」
オールマイトは出久に正論を言われて何も言えなかった

「じゃあな…クズヒーロー。俺は貴様が嫌いだ」

出久はそう言い舞空術で浮かんで放心しているオールマイトを無視をしてその場を去った

ーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーー

ーーー

ー

その夜再び海浜公園に来た出久は界王拳の限界を上げる為トレーニングをしたのだった

雄英高校受験日

出久が折寺の校長に今までの事を報告した後折寺中学は世間からバッシングを受けていたらしい…担任は無個性差別と虐めを無視、そして隠蔽していた事がバレて減給と再教育をさせられ虐めをしていたクラスメイトの高校内定は取り消されどのヒーロー専門高校も入学を拒否している事をニュースで話題になっていた。爆豪君の事だけど雄英高校を含むどのヒーロー高校も入学を拒否されたみたいだね

爆豪君のお母さん光己さんは何度も謝ってくれたから申し訳なかったな…光己さんは爆豪君を教育に厳しい高校へ入学させるみたいだ。僕はお母さんを説得したので光己さん夫妻は許して爆豪君は許さないみたいだ光己さんは喜んでいて良かったよ。

そして雄英入試日

「ここが雄英か・・・でかい（ベジータさんが嫌っているサタンって言う人のサタンスクールよりでかいな）」

出久はベジータが嫌っているホラ吹きヒーローサタンが住んでいるサタンスクールと比べていた

「時間もないし入るか」

出久は筆記試験をする為校舎へ向かった

筆記試験は問題なく終わり出久は実技試験の説明がある講堂へ向かった

「今日は俺のライヴにようこそー‼?エヴィバディセイヘイ!」

「（天下一武道会のアナウンサーさんみたいだ…）」

ーシーン・・・・ー

まぁ、そうなるだろうな。

「こいつぁシヴィー‼?受験生のリスナー!実技試験の概要をサクッとプレゼンするぜ!アーユーレディー⁉?イエーーーー‼?」

ーシーンー

とうとう自分でやり出したか・・・・プレゼントマイク・・・・あんたはプロだ・・・・あ、涙目になりながら説明を再開した

「入試要項通り！リスナーにはこの後！１０分間の模擬市街地演習を行ってもらうぜ！持ち込みは自由！プレゼン後は各自指定の演習会場に向かってくれよな！演習場には仮想ヴィランを三・種・多・数配置してありそれぞれ攻略難易度に応じてポイントを設けてある！各々なりの〝個性〟で〝仮想ヴィラン〟を戦・闘・不・能にし、ポイントを稼ぐのが君達リスナーの目的だ！もちろん、他人への攻撃等アンチヒーローな行為はご法度だぜ⁉？」

　なるほど、ポイント制なのか……

　そう考えていると一人の男子生徒が手を挙げる。

「質問よろしいでしょうか⁉？プリントには四・種・の敵が記載されています！誤載であれば日本最高峰の恥ずべき事態です！我々受験者は規範となるヒーローのご指導を求めてこの場に座しているのです！」

「（真面目そうだな…あの人）」

「受験番号７１１１くん。ナイスなお便りサンキューな！四種目の敵は０Ｐ！そいつはいわばお邪魔虫だ！各会場に一体所狭しと大暴れするギミックよ！マ〇オ〇ラザー〇やった事あるか？あれに出てくる敵キャラ〇ッス〇だ！戦わず逃げることをおすすめするぜ！」

　逃げることをおすすめ……　つまり倒してもいいってことなのか？

「俺からは以上だ‼？最後にリスナーへ我が校の校訓をプレゼントしよう。

　かの英雄ナポレオン＝ボナパルトは言った！『真の英雄とは、人生の不幸を乗り越えていく者』と！」

ー更に向こうへ！〝Ｐｌｕｓ　Ｕｌｔｒａ‼〟それではよい受難を‼？ー

ーーーーーーーーー

ーーーーーー

ーーー

ー

　実技試験会場

「ここが実技試験会場…？市街地じゃないか」

『はい、スタート!!?』
合図があった瞬間出久は戸惑う受験生達を置いて走り出した
『『標的発見ハイジョスル』』
「早速来たね…気円斬!!?」
ズバババァァァン!!?
出久は気円斬で仮装敵三体を破壊した
「クリリンさんから教わってて良かったよ」
『排除スル』
『排除スル』
『排除スル』
『排除スル』
『排除スル』
『排除スル』
『排除スル』
「集まってきたね…悟空さん程じゃないけどワクワクすっぞ!!?」
出久は集まって来た仮装敵を次々と破壊した
『どうした?どうしたぁ!!?実戦にはカウントダウンなんて無いぜ!!?あのリスナーは既に戦ってるぞ!賽は投げられてんぞ!!?』
プレゼント・マイクの放送で他の受験生達は慌てて走り出した
「ふぅ…だいぶ倒したね」
スクラップとなった仮装敵の残骸に出久は座っていた
「これ以上倒すのはやめとこう…」
これ以上仮装敵を倒す訳にもいかないので他の受験生の手助けに行こうとしたその時だった
ドォォォォォォォォォォォォォォォン!!?
「なんだあのでかいのは!!?あれが説明にあった”お邪魔虫の0ポイント”!!?」
巨大な仮装敵…いわゆるお邪魔虫の0ポイントが現れた
「あれがお邪魔虫の0ポイント!!?」
「いくらなんでもデカすぎだろ!!?」
「逃げろ!あんなの勝てるわけ無い!!?」

他の受験生達は次々と逃げて行った
「情け無いなこの人達は悟空さん達なら立ち向かうぞ」
出久は逃げ出した情け無い受験生に呆れていた
「なら僕がやるしかないね‼︎？」
出久は逃げ出している受験生達とは逆に巨大仮装敵（０ポイント）に向かって走り出した。そして舞空術で飛び上がった。メガネ男子に何か言われた気がしたが無視をした。
「悟空さんから伝授されたこの身体強化を試すか…はぁぁぁぁぁぁぁ！
【界王拳‼︎？】」
ギュイイイイイン‼︎？
出久に赤いオーラが現れた。
「だららららら‼︎？」
ボボボボボボボボボボボボボボボボボボボボボボボボ‼︎？
出久はありったけの気弾を撃ちまくった
「ソンナモンカァ？」
「な⁉︎？頑丈だな‼︎？なら…」
出久は手の平を合わせて後ろに構えた
「くらえ！ギャリックッ砲‼︎？」
ドガァァァァァァアン
「効カンナァ」
「な⁉︎？」
「シカエシダァ‼︎？」
巨大仮装敵はミサイルを発射した
「危ない！」
「逃げてぇ‼︎？」
「くっ…なら【界王拳】…」
ボガァァァァァァァァァン‼︎？
「ちょ、直撃したぞ⁉︎？」
「これって試験だよな？」
その頃のモニタールーム
「これは不味い！」

「今すぐ試験会場Ａは実技試験の中止を！」
「まて！これを見ろ‼？」
「４倍だぁぁぁぁぁぁぁぁぁ‼？　」
ギュイイイイイン‼？
　出久は界王拳を４倍に上げ赤いオーラが更に上がった
「これで終わりだぁぁ‼？　４倍界王拳！かめはめ…
波ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ‼？　」
　ボガァァァァァァァン　‼？
　４倍界王拳かめはめ波のエネルギー波を直撃した０ポイントは大爆発をした
　シュタ
「ふぅ…」
『終了ーーーーーーーー‼？』
　試験は終了した

雄英入学!!?

時間は少し遡り雄英高校会議室では実技試験の映像を教師達が視聴していた

「今年の受験生はいい生徒が入学したな」

「俺は此奴が良かったぜ！おもわずイェア!!?と叫んじまったぜ！」

モニターには仮装敵を次々と倒している出久の姿があった

「この少年は…」

「オールマイトこの受験生を知ってるのですか？」

「はい…彼は”無個性”です」

「「「「む、無個性!!?」」」」

「それは確かなのか!!?オールマイト!!?」

「はい、彼から聞きました」

”無個性でもヒーローになれますか!!?”

”現実を見なくてはな”

「でも彼は手からエネルギーを出してるのよ!!?」

「見つけました！受験番号１１０５番緑谷出久は確かに無個性です!!?」

「「「「な!!?」」」」

「無個性なのにあの強さ!!?」

そして根津校長が０ポイント敵（インフェルノ）を起動した

「やはり逃げ出してる人がいますか…」

インフェルノが現れたとき受験生達は逃げ出していた

「ん？この緑谷は立ち向かってるぞ!!?」

「良い判断だな」

と言っていた教師達は再び驚くことになる出久が空を飛んだのだ

「「「「空を飛んだぁぁぁぁぁぁぁぁ!!?」」」」

「彼は無個性よ!!?」

「どうなってんだ!!?」

『界王拳!!?』

「なんか赤いオーラが現れたぞ!!?」

『４倍界王拳！かめはめ…波ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ‼？』
０ポイント敵は破壊された
「どうします？校長」
「０ポイント敵に立ち向かい破壊したから不合格な訳ないのさ」
それから数週間後…緑谷家
「いいい出久！来ていたよ！雄英から‼？」
「ありがとう母さん部屋で見るね」
出久は引子から封筒を受け取り自分の部屋に入った
「さて、開けるか」
ビリッ
「（コイン？）押してみるか」
ポチ
『雄英で教師をしている相澤消太だ』
「（小汚いな…この教師）」
『筆記試験は満点だ。実技試験は敵ポイント９０ｐだ。だが俺達が見ていたのはそれだけじゃない』
「（何かあるだろうね）」
『それはヒーローなら人助けするだろ？それはレスキューポイントと呼ばれる』
「（やっぱりね）」
『敵ｐ９０、レスキューｐ７０で合計１６０ｐの一位首席だ』
「よしっ‼？」
『初日は遅刻しないようにしろよ』
「母さんに伝えるか」
この後出久は母引子に合格した事を伝えると引子は泣いて喜んだ
そして数ヶ月後…
雄英入学日
「雄英高校…本当に合格したんだ」
出久は憧れの雄英高校へ来ていた
「時間もないから入るか」
出久は校舎内へ入ったのはいいのだが

「教室って何処？」
　迷ったのだ
「大丈夫だ僕には気を感じられるしね」
　出久は意識を集中して気の探知をした
「（２階に上がって右側の教室からいくつかの気を感じられるな）見つけた！早速そこに行くか」
　出久は気を感じられた場所へ向かった
ーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーー
ーーー
ー
「見つけたけど…ドアでか！」
　ヒーロー科を見つけた出久だがドアがでかかった
「様々な個性持ちに対応してるのかな？まぁ入るか」
　ガララ
「ん？君は試験の時にいた人か‼？ぼ、俺は私立聡明の飯田天哉だ」
「緑谷出久だよろしくね」
「君はあの試験の構造を知っていたのか？」
「それは知らないよ？ヒーローは人助けが当たり前だからね」
「緑谷君僕は感動した‼？」
「あ、ありがと」（汗）
　出久が感動する飯田に引き気味になっていると
「お友達ごっこなら他所でやれ。此処は雄英だぞ？」
　振り向くと寝袋に包まった小汚い人物がいた
（（（（（な、なんかいるゥ‼？））））））
「はい、静かになるまで８秒掛かりました君達は合理的に欠けるね。俺は担任の相澤消太だよろしく」
（（（（担任だったんだ））））
「（こいつが担任？）」
「早速だがこれに着替えて外に出ろ」

寝袋から取り出したのは体操服だった

個性把握テスト

グラウンド

「それではこれから個性把握テストを行う」

グラウンドに到着した出久達にそう言う相澤…

「「「こ、個性把握テストォォ⁉？」」」

「入学式は⁉？ガイダンスは⁉？」

「雄英は自由な校風が売り文句だ。当然、それは先生側にも適用される。覚えておく事だな」

それから話される個性把握テストの内容…ソフトボール投げ、立ち幅跳び、５０ｍ走、持久走、握力、反復横飛び、上体起こし、長座体前屈この八種で個性ありきで測定していくという。

「まずは入試一位の緑谷」

「はい」

「中学の時ボール投げは何メートルだった？」

「８０メートルです」

「個性を使って全力で投げろ」

「僕は無個性ですけど？」

出久が無個性と聞いて他のクラスメイトはざわついていた

「それでも構わない」

「分かりました」

出久は円の中心に立ち

「はぁ‼？」

全力でボールを投げた。

ピピッ

「記録は…∞（無限）だな。大気圏を突破した」

「記録∞って凄すぎだろ⁉？」

「個性思いっきり使えるんだ‼？」

「何コレ面白そう！」

出久の実力を垣間見た一同は競技内容も含めてつい「面白そう！」と発言してしまう。それがまた相澤の逆鱗に触れることとも知らず

に……
「(”面白そう”…ね。もしベジータさんが聞いていたら激怒してるよ…)」
　出久だけは”面白そう”の発言に呆れていた。そして自分が滞在していた世界でベジータは激怒していそうだと思っていた
「面白い、か……これからの三年間でそんな腹づもりでいく気なら、そうだな。こうしようか。トータル成績最下位の生徒は見込みなしと判断して除籍処分にしてやろう」
『ッ!?』
　その発言に一同は一気に焦らされた理不尽にも程があるからだ。
「(やっぱりね)」
「理不尽というが、世の中さまざまな災害やヴィランの暴走といった唐突な事件が発生する。その度に迅速に対応できないと世の中やっていけねーぞ?それも踏まえて覆していくのがヒーローってもんだろ?放課後に遊びたいと思っているなら諦めろ。これから三年間、俺達教師陣はお前たちに様々な苦難を与えて行く。それを乗り越えてこそヒーローになれるってもんだ。”プルス・ウルトラ”の精神で頑張れよ。でないとすぐに振るい落としていくからな」
　それで気持ちが引き締まった一同はさっそく競技に入っていく
　５０メートル走
　イチニツイテヨーイ…ドン‼?
　ビュン‼?
「記録０．５秒」
「「速っ⁉?」」
「得意種目で負けた…」
　立ち幅跳び
「緑谷…それはいつまで出来る?」
「丸一日可能です」
「記録は∞だ」
「「また∞⁉?」」
　握力

「よっ！」
バキィ‼？
「すみません先生壊れました」
「これは３ｔまで測れる特注品なんだが？」
「手加減はしたんですけどね」
「「「「（（（（手加減しただけで破壊したのか‼？）））」」」」
握力計が壊れたので測定不能
反復横跳び
多重残像拳を使い１０００回以上の記録を出した
長座体前屈
これは普通の記録だった
上体起こし
修行して取得した新技四身の拳を使い∞の記録を出した
持久走
「緑谷速くね‼？」
「何回抜かれた？」
「分かんねえ」
１０周遅れをさせて一位となった
「じゃ、ぱぱっと結果発表だ」
１位出久
２位轟
３位八百万
・
・・・・・
２０位峰田
「オイラが最下位」
葡萄頭が絶望していた

「ちなみに除籍は嘘な？」
「「「「は？？？？」」」」
「お前達の実力を見る合理的処置だ」
　と相澤は悪戯っぽく笑った
「「「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ⁉？」」」
「あんなの嘘に決まってます。少し見れば分かりますわ」
　ポニーテールの少女はそう言っていたが
「（あの目は本気で除籍する目だったけど黙っとこう）」
　出久は相澤が本気で除籍しようとした事を見抜いていたがあえて黙っていた
　こうして個性把握テストは終了した

戦闘訓練前編

個性把握テストから翌日、出久達は普通の授業を受けた。
というのも、午前中は必須科目の英語や国語も勉強する。まあ内容は普通だけど・・・・
お昼はランチラッシュの美味しいお昼を食べたそして午後の授業、待ちに待ったヒーロー基礎学！
皆が今か今かと待ちわびていると廊下の方から走る音が聞こえてきた。
「わーたーしーがぁ！」
「(この大きい気と声は…)」
「普通にドアから来たぁ‼？」
猛々しい声が響いてくるとともにドアが開かれそこからオールマイトがシルバーエイジコスチュームを着て現れた。
「すげぇ！オールマイトだ！先生やってたって本当だったのか！」
「あれはシルバーエイジ時代のコスチューム・・・・！」
「画風違いすぎて鳥肌が・・・・」
他の人達はスゲェ！スゲェ！と言っているが出久は冷めた目でみていた。出久は既にオールマイトが憧れのヒーローではなく悟空達が憧れとなっていたからだ
「(オールマイト…俺は”無個性”のままでヒーローになる)」
「私の担当はヒーロー基礎学！ヒーローの素地を作る為に様々な訓練を行う科目だ！当然、単位は最も多い。そして今日の訓練は、これ‼？」
そう言うとオールマイトは何処からかプラカードを突き出す
「【戦闘訓練】！」
「「おお～‼？」」
ヒーローと言えば、ヴィラン退治。いきなり『個性』を存分に振るう事が出来る環境に放り込まれると知り、興奮しない筈が無い
「そしてそれに伴ってこちら！」
オールマイトの合図と共に壁の一角が突き出て出席番号を振った

ケースを入れた棚を露にする。
「入学前に送ってもらった個性届と要望に沿ってあつらえたコスチューム！着替えたら順次グラウンドβに集まる様に！格好から入る事も大事だぜ、少年少女！自覚するんだ！今日から君達はヒーローだと！」
『はい！』
皆はそれぞれのコスチュームケースを持ち、更衣室に向かった。
ーーーーーーーー
ーーーー
ーーー
ー
グラウンドβ
「ここがグラウンドβか…市街地だね」
悟空の道着を出久のイメージカラー緑色にした道着。背中には緑谷の”緑”となっている
「（師匠である悟空さんの道着にして良かった）」
「先生！　ここは試験の演習場ですが、今回も市街地演習を行うのですか？」
「（誰かと思ったら飯田君だったのか）」
「いや、２歩先を進む！真の賢しいヴィランは闇に潜む…という事で！これから、ヒーローチームとヴィランチームに別れてもらって２対２の実践訓練を行う！」
「基礎訓練も無しに？」
「その基礎を知るための訓練さ！ただし今回はぶっ壊せばＯＫのロボじゃないのがミソさ！」
「勝敗のシステムはどうなります？」
「どんな内容ですか？」
「また、相澤先生みたいに除籍処分とかあるんですか…？」
「チームとはどのように別けるのでしょうか？」
「このマントやばくない？」
「くぅぅ…聖徳太子ぃ…!?？」

質問が多いなか一人だけ全く違う事を言っていた。
「えーっと…」
おもむろに懐から何かを取り出し…
「(カンペ?…)
「いいかい?状況設定はこうだ!ヴィランチームが核を所有、これをヒーローチームが解体するという設定だ!?」
(((((設定がアメリカンだな!!?)))))
「ヴィランチームはこれを時間制限まで守るか、ヒーローを拘束することで勝利!ヒーローチームはヴィランを捕まえるか、ビルのどこかにある核を触ることで勝利だ!コンビ及び対戦相手はくじだ!」
「適当なのですか!!?」
「飯田君…プロは他事務所と急造チームを作るからそれだと思うよ?」
「なるほど…先を見据えた計らい!失礼いたしました!!?」
そしてクジの結果は…

戦闘訓練後編

クジの結果はこうなった
Ａチームヒーロー出久＆八百万
Ｈチームヴィラン轟＆障子
「Ａチームがヒーローで Ｈチームがヴィランだ‼？ヴィランチームは準備をしてくれ。ヒーローチームは５分間の作戦会議だ‼？
「八百万さんと同じチームか」
「よろしくお願いしますわ緑谷さん」
「うん、よろし…⁉？や、八百万さんそのコスチュームは？」
「個性の都合上でこうなりましたの」
八百万のコスチュームは完全にアウトなコスチュームだった
「八百万さん…僕のを来てくれる？目を合わせられない」
出久は上の服を脱いで八百万に渡した
「あ、ありがとうございます」
「喜ぶ奴がいるからね。それに轟君の個性対策だ」
「緑谷さんは大丈夫なのですか？」
「寒さには慣れてるから大丈夫だよ」
「個性をお互い教えましょう」
「分かった…僕は個性がないけど気と言う物を操れる。こんな風にね」
出久は小さな気弾を手の平に出した
「凄いですね。私は脂肪を消費して生物以外を創造できます」
「八百万さんの個性も凄いよ」
「ありがとうございます緑谷さん」
『準備はいいかい？２人共』
「はい」
「準備はできてます」
『それでは訓練スタートだ‼？』
「入りましょうか」
「（っ⁉？来る！）八百万さん待って‼？」

パキイイイイン‼︎？
　次の瞬間ビル全体が凍り間一髪で出久が気付いたので八百万は凍らずにすんだ
「危なかったです。緑谷さんは何故気づいたのですか？」
「轟君と障子君の〃気〃を感じたからね。轟君の気が大きくなったから何か行動を取ると感じたんだ」
「そんな事もできるんですね」
「まぁね。八百万さん中は寒いから防寒着を創造して着てくれる？八百万さんのだけでいいよ」
「分かりましたわ」
　八百万は防寒着を創造した後防寒着を来て出久とビル内へ入った
ーーーーーーーーー
ーーーーーー
ーーー
ー
「防寒着を着て良かったです」
「対策して良かったよ。さて、轟君が近づいてきてるから八百万さんは核の回収に行ってくれる？」
「分かりましたわ。緑谷さんもお気をつけて」
「頼んだよ」
　八百万は反対側の階段から核の回収に向かい出久は轟を待ち伏せする事にした
「来たね轟君」
「緑谷か」
　轟が現れ緑谷対轟の戦いが始まった
　モニター室
「緑谷の奴轟と対峙したぞ⁉︎？」
「チクショウ！緑谷の奴‼︎？ヤオロッパ［ベチン‼︎？］ぶべら⁉︎？」
「下品よ峰田ちゃん」
「でも緑谷は紳士だよ‼︎？」
「八百万にコスチュームの上を着させたんだからね‼︎？」

「そろそろ戦うみたいだな」
パキィィィィィン！
ガシャァン！
パキィィィィィン！
ガシャァン！
パキィィィィィン！
ガシャァン！
轟が氷を出して出久が破壊するその繰り返しだった
出久は余裕だったがある事に気づいていた。
「（氷ばかり使ってるから震えてる）」
轟は明らかに動きが鈍くなっていた
「震えてないか轟君左を使えば大丈夫だろ？」
「左は使わねぇ！右だけで戦う」
「それじゃあ体が耐えられないぞ！」
「なんとでもいいやがれ俺はクソ親父の個性なんぞ使わねぇ！」
クソ親父、確か轟君の父親はＮｏ．２ヒーローのエンデヴァー…轟は過去を話した個性婚によって産まれた故に幼少期からの父による虐待とも呼べる英才教育、壊れてしまった母。憎き父親への憎悪だと話した
「無個性の僕を馬鹿にしてるの⁉？轟君の個性は君だけの個性だ⁉？エンデヴァーの個性じゃねぇ！」
その時轟は母の言葉を思い出した
『なりたい自分になっていいんだよ』
ゴォォォォ！
轟の左側から炎が出た
「お前バカだろ？敵に塩を送りやがって」
「やっと本気を出せるね！」
「行くぞ！緑谷⁉？」
轟が氷で攻撃し出久が再び氷を破壊する
「やるね轟君」
「お前こそ」

轟は左右で負担を減らしているが体力が奪われていた
「そろそろ決めようか」
「ああ、これで決める！」
「といいたいけど」
「なんだ？」
『緑谷さん核を回収しました』
「僕達の勝ちだ」
「完敗だよ緑谷。さっきはすまん」
「気にしてないよ」
『ヒーローチームの勝利‼？』

委員長決めと迫る悪意

何処かのバー
「なぁ、これみてみな」
パサッ
新聞にはオールマイトが教師になった事が載っていた。
「私はこの体で動けないからドクターが作った脳無を使いなさい。」
「どうなるかなぁ？平和の象徴がヴィランに殺されたら」
入学から数週間ごオールマイトが教師になったのはマスコミの中でも大きな騒ぎになった。マスコミ…通称マスゴミがしつこく質問しようとしたが出久は無視をしてさっさと校内へ入った

「みんなおはよう」
「「「「おはよう御座います」」」」
「それはそうと急で悪いんだが君らには・・・・」
その瞬間、クラス全員は抜き打ちテストをするのではないかと思う
「クラス委員長を決めてもらう」
「「「学校っぽいのキターー‼？」」」
すると途端にみんなが手を上げ始める。
「委員長！俺やりたいです!!」
「僕がやる為にあるヤツ☆」
「オイラのマニフェストは膝上
３０せ［ゴスッ‼？］」
「リーダーやるやる!!」
「私もしたい」
「」チーン
「緑谷…何故峰田を気絶させた？」
「変態発言したので反射的にやりました」
「「「「(((緑谷／さん／君／ちゃん／ナイス‼？)))」」」」
「まぁ…よくやった」
「静粛にしたまえ!!」

すると飯田が声を荒げる
「多をけん引する責任重大な仕事ぞ!!やりたいものがやれるものではないだう!!周囲からの信頼があってこその務まる聖務！民主主義に則り、真のリーダーを決めるならここは投票で決めるべきだ!!」
「って言ってる飯田がそびえ立ってるんじゃねぇか!?」
飯田君・・・　やりたいんだね・・・
「日も浅いのに信頼もなにもないと思うわよ飯田ちゃん」
「だからこそ複数票を得たものが真にふさわしい人間たということだ!!」
「そんなんみんな自分に入れるぞ⁉?」
「どうでしょうか先生!!」
と飯田君は先生に話を振るが先生は寝袋に入っていた。
(寝る気ですか…)
「時間内に決まればそれでいい」
そうして急遽投票で決めることに・・・
その結果・・・
出久３票
八百万２票
となった
「僕⁉?」
「でも緑谷って結構強いしな」
「ヤオモモも講評の時、すごかったし」
「というわけで、Ａ組委員長は緑谷、副委員長は八百万で決まりな」
「ぼ、僕に一票・・・」
その時、飯田君は膝をついてＯＴＬ状態になっていた。
ーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーー
食堂

「カツ丼１０人前お願いします」
「はいよ！白米はやっぱり落ち着くよね‼？」
「僕に委員長が務まるのかな？」
「緑谷さんには適任でしたので」
「俺もだな」
「八百万さんは意外だったけど心操君がいれたのか…」
　出久は八百万、心操とお昼を食べていた
『セキュリティーシステム３発動‼？セキュリティーシステム３発動‼？』
「なんだ⁉？」
「セキュリティーシステム３って初めてだぞ‼？」
「早く避難を‼？」
「俺達も避難しよう」
「ごった返してスムーズに避難出来ないな」
「緑谷！外をみろ‼？」
「朝のマスゴミか‼？」
「侵入してきたのはあいつらなんだな。どうやって落ち着かせようか？」
バコン‼？
「皆さん！ダイジョーブ‼？ただのマスコミです！
「流石飯田君だね」
「非常口のポーズをしてるな」
　飯田のおかげで騒ぎはおさまった
「（一瞬だけど嫌な”気”を感じた…なんだったんだ？）」
　出久は騒ぎの中一瞬嫌な気を感じたのだった

悪意襲来編

ＵＳＪ（嘘の災害と事故ルーム）襲撃事件

「今日のヒーロー基礎学は俺とオールマイト、もう一人の三人で見ることになった」

（（なった？特例なのか？））

「はーい。何をするんですか」

「救助訓練だバスで移動するから急げよ？」

バスは市バスタイプだったのでそれぞれ皆は好きな場所に座った

ＵＳＪ内

「スッゲー！ＵＳＪかよ⁉？」

「ようこそ皆さん！嘘の災害や事故ルーム略してＵＳＪへ⁉？」

（（（本当にＵＳＪだったーー⁉？））））

「私の好きな１３号だ～！」

オールマイトは出勤中に事件に巻き込まれ、遅れると電話があったそうだ。

「え～始める前に話しを一つ、二つ、三つ・・・」

（（（（ふ、増えてる！））））

・・・・・・・・・・・・・・・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

「…以上！ご清聴ありがとうございました‼？」

説明を終えると拍手が響いた。

「ご苦労１３号生徒に説明を」

「（この嫌な気はまさか⁉？）相澤先生戦闘態勢を！」
「中央広場から気配がします！」
「何故だ？緑谷」
「今に分かります…」
　ズズッ
「来ました先生‼？」
「な⁉？　一塊りになって動くな‼？１３号は生徒を守れ‼？」
　黒いもやから多くのヴィランが出てきた。
「あれオールマイトはいなんだ～」
「そのようですね死柄木弔」
　黒いモヤの人物は手だらけの男死柄木と話していた。
「まぁいいや。じゃあ…
生徒を殺したら来るのかなぁ？」
「（間違いない！マスコミ騒動の主犯はこいつらだ‼？）」
「なんだ？入試みたいにもう始まっているパターンか？」
「動くな切島！奴らからは本物の悪意を感じる‼？」
「よく気づいたな緑谷。奴らは本物の敵（ヴィラン）だ‼？」
「ヴィランンン⁉？雄英に来るなんて馬鹿だろ⁉？」
「いや、奴らは馬鹿だがアホじゃねぇ…」
「轟と同意見だ。先週マスコミが押し入った時にここのセキュリティーを知られてしまったか、その場に奴らがいたんだ！」
「１３号先生侵入用センサーは？」
「もちろんありますが・・・」
「１３号学校に連絡を！上鳴お前も個性で通信を試せ！」
「は、はい！」
「ッス！」
　１３号は学校に連絡をし、上鳴は通信を試したがジャミングが発生

して通信不可能だった。
「俺は敵を無効化する」
「相澤先生の戦闘スタイルでは無理なんじゃ？」
「一芸だけじゃヒーローはつとまらねぇよ任せとけ！」
「相澤先生！」
ブン！
相澤は出久が投げたある物をキャッチした
パシッ
「緑谷…これはなんだ？」
「僕が豆に気を与えて栽培した特殊な豆です」
「感謝する…ありがたく使わせてもらうな」
相澤は出久から豆を受け取り１３号に生徒を託して敵の群れへ向かった。
「（今はこれくらいしか出来ません相澤先生ご武運を…）」
「射撃隊行くぞ！」
「見た事もないヒーローがいるが正面から来るなんて間抜けだぜ！」
１人の敵が個性を放とうとしたが
「あ、あれ？個性が出ねぇ」
敵の個性発動が止まり相澤の捕縛布で捕らえられた
「バカヤロウ！彼奴は見た者の個性を消すイレイザーヘッドだ‼？」
「メディアには出来るだけ出てないのにな」
「消すぅ？俺達の個性も消せるのか？」
６本腕の敵が殴りかかってきたが
「いや、無理だ」
すかさず捕縛布で捉えて振り回し他のヴィランにぶつけた
「さて、次だ‼？」
相澤は次々と敵を倒していった
「皆さん早く避難を‼？」
「させませんよ？」
「しまった⁉？１番厄介な奴が‼？」
加勢に行こうとした相澤だがヴィランに阻まれてしまった

「(くそっ13号頼んだぞ)」
「はじめまして私はヴィラン連合の黒霧と申します。ここに来た理由は平和の象徴オールマイトに息絶えてもらいに来ました」
「(何⁉?)」
「私　達　の　目　的は――――――――――――――――――――――――――――――――」
「おらぁ!」
「くらいやがれ‼?」
バキィ!
ドゴォ!
「その前に俺達にやられるとは思わなかったのか⁉?」
「切島!　砂藤!13号が個性を使えない離れろ‼?」
「危ない危ない流石はヒーローの金の卵達」
「危ない!どきなさい二人とも‼?」
「貴方達を散らしてなぶり殺す‼?」
黒い霧が出久達を包み込んだが
「そうは…させるか!はぁ‼?」
「うわ⁉?」
「なんだ⁉?」
出久は気合爆発で飯田達を霧の外へ吹き飛ばし出久だけ霧の中へ残った
「後は頼んだよ!飯田君‼?」
「み、緑谷君⁉?」
「「「「み、緑谷ぁぁぁぁぁぁぁぁ⁉?」」」」
出久は黒い霧の中へ消えていった
「彼だけ飛ばされましたか…まぁいいでしょう。飛ばした先にはヴィランが大量にいますからね」
「くっ‼?」
――――――――――
――――――
――――

ー

シュタ

「此処は…山岳ゾーンみたいだね」

出久は山岳ゾーンに飛ばされていた

「皆が心配だ…早く行きたいけど敵がいるみたいだね」

出久の周りには大量の敵達がいた

「なんだ…餓鬼1人だけか」

「嬲り殺しにしてやる‼?」

「僕を舐めないでよね?四身の拳‼?」

出久は4人に分身した

「「「「なぁ⁉?」」」」

「「「さぁ!覚悟しろヴィラン‼?」」」

四人に分身した出久はヴィラン達をフルボッコしてあっという間に倒した

「大した事はなかったね。この敵達はフリーザ軍より弱いな」

敵達を倒した出久は一息ついていた

「(っ⁉?気が小さくなった?)13号先生に何かあったに違いない‼?急がないと‼?」

出久は舞空術で浮かんだ後急いでゲート前に向かって飛んでいった

遅れてすまねぇ…希望のヒーロー登場!!?

ゲート前

此処には飛ばされなかったクラスメイト達がいた。

「今度こそ貴方達を飛ばします」

黒霧は黒いモヤを発生させようとした

「させない！ブラックホール!!?」

１３号は個性ブラックホールで黒霧の霧を吸い込み始めた。その時轟と心操は気づいた黒霧が１３号の背後にワープゲートを開いている事を

「１３号先生！」

「個性を止めてくれ!!?」

「え!?うわぁぁぁぁぁぁぁ!!?」

「「せ、先生ーーー!!?」」

轟と心操が止めたが既に遅く１３号は背後に現れたワープゲートで自身のコスチュームをチリにしてしまい重症となってしまった

「飯田！助けを呼びに行け!!?」

「しかし！皆を置いていくわけにはいかない!!?」

「飯田！緑谷に頼まれたんだろ!?」

「っ!!?」

『後は頼んだよ飯田君!!?』

「援護するから脱出しろ！」

「すまない!!?」ブォン

「させるｋ［フワッ］!?」

「実態があるなら危ないと言わない筈や!!?」

「行け！飯田!!?」

「うぉぉぉぉ!!?」

飯田は全速力でゲート前へ向かった

「（あのドアは蹴破れる厚さなのか!?）」

「生意気だぞめｇ［ボォォォン!!?］ぐはぁ!?」

「させるかってんだ（緑谷と修行したから取得できたぜ）」

心操が”気弾”を発射して黒霧を怯ませたのだ
ギィィ
「皆！待っててくれ‼？」
飯田は脱出して雄英本校へ向かった
「応援を呼ばれる…ですが切り札はありますからね」
黒霧はワープゲートを開き脳が剥き出しの男を出した
「脳無…奴らを殺しなさい」
脳無と呼ばれた男が心操達に襲いかかった
「させるか！砂藤！障子‼？」
「任せろ！シュガードープ‼？」
「手出しはさせないぞ！」
ドゴォ‼？
心操、砂藤、障子が脳無に立ち向かい打撃を与えたが
「…」
「な⁉？」
「効いてない…だと⁉？」
打撃が効かなかったのだ
「ショック吸収がありますからね打撃は効きませんよ」
「ガァァァァ‼？」
ドガァァァァァァン！
「「ぐぁぁぁぁぁ⁉？」」
「心操！砂藤！障子‼？」
「野郎っ‼？」
パキィィィィィン‼？
轟が脳無を凍らせたが
ガシャァァァン‼？
「な⁉？」
「なんてパワーだよ⁉？」
轟の氷はあっさりと砕けてしまった
「ガァァァァァ‼？」
ドゴォ！

「ぐぁぁぁぁぁ‼?」
「「轟‼?／さん‼?」」
その後も次々と倒れていく生徒達…
「(緑谷さん…早く来て下さい)」
「トドメをさしなさい脳無」
脳無がトドメをさそうと拳を振り下ろしたその時
ガシッ
「遅れてすまねぇ…大丈夫か?皆」
「「み、緑谷ぁぁぁぁぁぁぁぁ‼?」」
間一髪で希望のヒーローが駆けつけたのだった

出久VS脳無

ゲート前
「な⁉︎？お前はヴィランが大量にいる場所へ送った筈！何故此処に⁉︎？」
「そいつらなら既に倒したぜ？嫌な予感がしたから飛んできたんだ」
「飛んで？」
「八百万さん…皆にこれを」
戸惑っている黒霧を無視して出久は八百万に特殊な豆を渡した。
「これはなんですか？」
「僕が豆に気を与えて栽培した体力を回復する特殊な豆だよ。１３号先生に食べさせてくれる？一番重症みたいだからね。その後怪我をしている人達に渡して」
「分かりましたわ」
八百万は１３号と怪我をしているクラスメイトの方へ向かった
「さて、俺が相手だ剥き出し野郎と霧野郎」ゴゴゴゴ…
出久は静かに怒りを露わにしていた
「(この生徒只者じゃない‼︎？)やりなさい！脳無‼︎？」
黒霧に命令された脳無が向かってきた
「に、逃げろ…緑谷‼︎？」
「ラッシュをしたいらしいね…やってやるさ‼︎？」
ドガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガ‼︎？
出久と脳無はラッシュを開始した
「早いなぁ〜ならこれならどうだ？１０倍速だ‼︎？」
「⁉︎？」
ドガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガ‼︎？
「な⁉︎？脳無の吸収が追いついていない⁉︎？」
「そろそろ決めようか…　太陽拳‼︎？」
ピカァァ‼︎？

「く⁉？目が…」
「⁉？⁉？」
「瀬呂君！今のうちに黒霧を拘束してくれ‼？」
「任せな緑谷‼？さっきはサンキューな！」
　出久が渡した豆で回復した瀬呂が黒霧を拘束した
「な⁉？しまった‼？」
「かめはめ…　波あぁぁぁぁぁぁぁぁ‼？」
　ドガァァァァァァァァン‼？
「」ドサ
「脳無がやられた⁉？」
「ふぅ…（っ⁉？相澤先生の気が小さくなってる‼？）相澤先生の加勢に俺は行く」
「緑谷さん…」
「どうした？八百万さん」
「無事に帰って来て下さい」
「任せな…」
　ギュイイイン‼？
　出久は舞空術で浮かんだ後セントラル広場へ向かった
――――――――――――
――――――――――
――――
―
　相澤の放った捕縛布を躱し、その病的に痩せ細った肉体からは想像も出来ない程の優れた身体能力を発揮して、死柄木が猛然と迫る。
　だが、ヒーローは一芸だけじゃ務まらないと宣言しただけあって、自身の武器を躱されただけでは相澤は怯まない。
（本命か！）
　自身に迫る死柄木を本命だと予測した相澤は、彼に放った捕縛布を自身の元へと引き寄せながら、それを遥かに凌ぐ速度で肉薄し、彼の鳩尾に肘打ちを叩き込んだ。
　――いや、正確には叩き込めていなかった。鳩尾に命中する寸前、

死柄木の手が相澤の肘を鷲掴みにしていた。
やはりそう簡単にはいかないか、と相澤が忌々しげに口元を固く閉じる。それと同時に、相澤の天を衝くように逆立っていた髪が垂れ下がった。
それを見た死柄木は、してやったりとばかりに不敵な笑みを浮かべて相澤の耳元に囁く。
「動き回っているから分かりづらいが……必ず髪が垂れ下がるタイミングがあるな。1アクション終えるごとにそれが巡ってくる。これってさ、”個性”が解けてる証拠だろ？しかも、その間隔はだんだん短くなっている」
短時間で”抹消”が解けるタイミングを把握し、ドライアイであるが故に目が渇き、”個性”を維持出来る時間がみるみる短くなっていくことまで見抜いた観察力。その凄まじさに相澤は息を呑んだ。その気分はさながら、最初こそ無双を繰り広げていたが、体力の消耗でみるみる弱点を露出させてしまう老兵のようだった。
さて。死柄木の発言通り、相澤の髪が逆立つのは”抹消”を発動した合図。反対に、垂れ下がれば効果が切れた合図だ。”個性”を消されていたのは、死柄木も例外ではない。
相澤の”個性”の効果が切れたのならどうなるか。答えは単純。
――死柄木の”個性”が発動した。死柄木が触れている相澤の肘。そこが風化した石のように変色していき、亀裂が生じる。
「無理をするなよ、イレイザーヘッド」
死柄木が社会への憎しみに満ちた目を見開きながら言ったと同時に、相澤のコスチュームである黒い服諸共、肘が崩れ去ってしまった。
（肘が崩れたッ!?）
普段は皮膚に覆われているはずの肉が露出して空気に晒され、痛みが生じる。それと同時に悪寒を感じ、相澤は死柄木を咄嗟に負傷していない方の腕で殴りつけて後退した。
負傷したのは片腕。足も無事だし、もう片方の腕も無事だ。まだ戦うことは可能だが、相澤は後退を選んだ。
「あのまま触れられていれば、確実にヤバい」と本能が警鐘を鳴らし

ていたからだ。
殴られて地面を転がった死柄木は、体の痛みを訴えながらも起き上がり……またもや不敵に笑った。
相澤は疑問符を浮かべ、不敵に笑う死柄木を警戒しつつも、周りに集まってくる敵達を蹴散らす。そして、彼を囲う敵が悉く打ち倒されたところで、死柄木は口を開いた。
「ところでヒーロー、残念なお知らせだ。本命は俺じゃない」
その言葉を聞くと同時に身の毛がよだつ。死柄木の手で肘が崩れた時以上の悪寒が相澤を襲う。……咄嗟に振り返った時には遅かった。
視線の先には、オールマイト並みの体格をした藍色の肌の何か。その死んだ魚のような目がぎょろりと相澤に狙いをつけ――ＵＳＪのセントラル広場に鮮血が舞った。

「命をなんだと思ってるんだ‼？」出久ＶＳ対平和の象徴対策脳無‼？

セントラル広場に着いた出久はとんでもない光景を見た。

「あ、相澤先生⁉？もう一体脳無がいたのか‼？」

ゴキゴキゴキ！

「ぐぁぁぁ⁉？（個性は消した！これがこいつ自体のパワーか⁉？）」

「今助けます！気円斬‼？」

ズバァン‼？

気円斬で相澤の腕を掴んでいる脳無の腕を斬り飛ばした。その隙に脳無を蹴り飛ばして相澤を救い後退した

「すまん…緑谷かなりやばかった」

「僕が渡した特殊な豆はありますか？」

「ああ、まだ食べてないからな」

「それを食べて下さい。体力回復と怪我を治せます」

「分かった」

パクッ

相澤は出久から貰った豆を食べた。すると相澤の怪我があっという間に治った

「凄いな…体力も回復した」

「相澤先生は一旦後退してくれませんか？脳無の相手は俺がします」

「生徒に戦わせる訳にはいかないが仕方がないか…そいつは個性を消したがパワーが桁外れだ。おそらくそいつが元々持つ力だろう」

「情報提供感謝します」

相澤は出久に脳無の強さを教えると一旦撤退した

「なんだ？お前…脳無やれ」

手だらけに命令されて脳無が殴りかかった

「だらぁぁぁぁぁぁぁ‼？」

出久は拳を繰り出して脳無の拳とぶつけた

「ベジータさんの拳の方が早い！はぁ‼？」

ドゴォ‼?
強烈なキックをしたが
「効いてない?」
キックを受けても脳無はぴんぴんしていた
「そいつはショック吸収があるからいくら攻撃したって無駄さ」
「(要するにサンドバッグだな)」
その時黒霧が現れ13号は行動不能にしたが生徒を一人逃した事を伝えた。それを聞いた死柄木はイラついて”ゲームオーバーだから帰ろう”と言い出した
「(”ゲームオーバー?”此奴は遊び感覚で人を殺そうとしたのか⁉?)命をなんだと思ってるんだ‼?」
出久は遊び感覚で人を殺そうとした死柄木に怒りが爆発した
「お前じゃ勝てねえよ!脳無あの餓鬼を殺せ‼?」
「そっちがその気ならやってやる‼?」
再び出久は脳無と戦闘を開始した
「だららららららららららら‼?」
ドガガガガガガガガガガガガガ‼?
再び出久はラッシュをして
「かめはめ…波ぁぁぁぁぁぁぁぁ‼?」
得意とする水色に輝くエネルギー波を放ち脳無のその上半身を消し飛ばした。いくら相手がオールマイト対策の殺人兵器とは言えど、簡単に耐えられては困る。
だが……。
「くそっ!再生してる⁉?」
悟空やベジータから聞かされたセルや魔人ブウ(純粋悪)、合体ザマスを思い出していた。ベジータは嫌な思い出だったらしく嫌そうな顔をしながら出久に話していたのだ
「ならこれならどうだ?界王拳…　20倍だぁぁぁぁぁぁぁぁ‼?」
ギュィィィィィン‼?
出久に赤いオーラが現れた
「だらららららららららららららら‼?」

ドガガガガガガガガガガガガガガ‼?
「そこだっ‼?」
　出久は脳無の足首を掴み
「うぉぉぉぉぉぉぉぉ‼?」ブンブン！
　勢いよく振り回し
「おりゃぁぁぁぁぁぁぁぁ‼?」
　空高く投げ飛ばした
「２０倍界王拳！かめはめ…　波ぁぁぁぁぁぁぁぁぁ‼?」
　身体強化と技の威力を上げた赤い色のエネルギー波は狙いを定めた脳無に向けて一直線に突き進み天井付近のガラスを突き破って空の遙か彼方目掛けて脳無の肉体を押し出して吹き飛ばした。脳無は呆気なく出久に敗北し空の彼方に消えていってしまった。恐らく脳無を見つけることすらままならないだろう。
「死柄木！脳無がやられました‼?」
「そんな…脳無が」
「ヴィラン連合…　サイヤ人の弟子を舐めるな‼?」
　出久は威圧しながら死柄木達を睨んだ
「死柄木！撤退しますよ‼?脳無がやられた今切り札はないです！」
「（くっ！２０倍界王拳の反動が思ったより強い…早く撤退してくれ）」
　出久は２０倍界王拳の反動があるのか満身創痍だった
「脳無の仇だ！殺してやる‼?」
　その時
　バン！
「もう大丈夫…何故って？私が来た‼?」
　飯田が呼びに行ったオールマイトが駆けつけて来たのだ
「遅いぞ…オールマイト」
「緑谷少年大丈夫か⁉?」
「ご心配なく只…身体強化の反動で身体中が痛いだけです」
「死柄木！オールマイトが来た今我々は勝てません‼?」
「帰るぞ黒霧‼?」

「分かりました」
黒霧はワープゲートを開いた
「お前の顔は覚えたからな‼?」
そう吐き捨てた死柄木はワープゲートに消えていった
「終わっ…た…か」
ドサ
「緑谷少年⁉?しっかりするんだ‼?」
出久は２０倍界王拳の反動で気絶してしまったのだ。

臨時休校

　駆けつけた警察や雄英高校にいるヒーローのおかげで襲撃に来たヴィラン達は拘束された

「18、19、20。うん、彼以外は全員無事だね」

「彼以外って⁉?」

「緑谷君は大丈夫なんですか⁉?相澤先生と13号先生は⁉?」

「相澤先生と13号先生なら大丈夫だよ。緑谷君が渡した特殊な豆?のおかげで怪我は治ってるよ。緑谷君は身体強化の反動で気絶してるだけだから今は保健室で休んでるよ」

「良かったです…」

「ヤオモモは緑谷を心配していたからね~」

「塚内警部!此処から離れた森林で脳無らしい男を発見しました‼?」

「ご苦労…三茶。皆んなはもう教室に戻って良いよ

ーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーー

ーーーーー

ーーー

ー

　保健室

「此処は…保健室なのか?」

「おや?目が覚めたみたいだね」

「リカバリーガール」

「緑谷少年もう身体は大丈夫なのか⁉?」

「ご心配をおかけしました。回復したので大丈夫です」

「君が緑谷君だね」

「貴方は?」

「僕は塚内と言うよ」

「オールマイトその姿を見せても大丈夫なのですか?

　オールマイトはトゥールフォーム（本来の姿）となっていたのだ

「彼は私の親友だからね。正体を知ってるから安心してくれ」
「それを聞いて安心しました」
「塚内君生徒は大丈夫なのか⁉？相澤君と１３号は⁉？」
「彼等なら緑谷君が渡した特殊な豆のおかげで怪我は治ってるよ」
「そうなのか⁉？緑谷少年‼？」
「俺が豆に”気”を与えて栽培した特殊な豆ですからね」
「その豆を見せてくれるかい？」
「構いませんリカバリーガール」
　出久はリカバリーガールに栽培した特殊な豆を見せた
「見た目は普通の豆だね」
「そうですか？オールマイトも食べて下さい。もしかしたら後遺症が治る可能性があります」
「本当かい⁉？なら食べてみるよ」
　パクッ
　オールマイトは特殊な豆を食べた
「どれどれ？診察してみるよ」
　リカバリーガールはオールマイトの診断をした
「これは凄いね！古傷が綺麗に治ってるよ‼？」
「臓器の修復は流石に出来ませんでしたけど傷は治って良かったです」
「ありがとう！緑谷少年‼？」
　リカバリーガール達を一旦退出させた後出久は再びオールマイトと話していた
「緑谷少年皆を守ってくれて本当にありがとう」
「それくらいは当然ですよ」
「やはり私の後継者に君は相応しいよ」
「受け継ぐ気は無いですよ？」
「やはりそうか…」
「ですが貴方の”意志”は受け継ぎますよ。俺は”無個性でもヒーローになれる”と無個性で悲しんでいる子供達の”希望”となりたいですからね」

「君が言うなら仕方ないか…私の〝意志〟を受け継いでヒーローになってくれ」
「はい‼?」
出久は個性を受け継がないがオールマイトの意志を受け継いだのだった
――――――――――――――――
――――――――――
――――――
――――
――――
―
「さて、身体も休めたし修行をやるか心操君」
「ああ、よろしくな緑谷」
身体を休めた出久は修行をしたのだった

雄英体育祭編

雄英体育祭開幕！最初の競技は障害物競走‼？

臨時休校の翌日

「おはよう」

相澤先生が入って来ると皆は一斉に席に着いた。

「ヴィランとの戦いを生き延びてホッと一安心と言ったところだろうが、まだ終わってねぇ」

「戦い」

「まさか、またヴィランが⁉？」

「雄英体育祭が迫ってる」

『『『そっちかよ⁉？』』』

思わず全員が突っ込んでしまった。

それからは、みんなで体育祭の話題で持ちきりだった。みんなの体育祭に掛ける思いや、麗日さんのヒーローになるための目的……色々と知れた。負けられないな

授業も終わりさぁ帰ろうとした時教室の前に人だかりができていた。

「出れねぇじゃん！」

「相手にしないようにしよう。反対側から出られるぞ」

嫌み狸（出久命名）が宣戦布告したが出久は

「俺達は遊びでＵＳＪに行ったんじゃねぇ！一歩間違えば死んでいたんだぞ‼？」

と一喝して黙らせた

皆は体育祭開幕までそれぞれ力をつけて体育祭開催までトレーニングなどをしていた

そして体育祭当日

「いよいよだね～」

「力一杯頑張ろう！」

「「おーーーー‼?」」
プレゼントマイクの入場紹介があり、選手宣言が始まった。
「さあ雄英体育祭始めますよ！」
「１８禁ヒーローが雄英にいていいのか？」
「あの姿はまずいな」
「そこ静かに！それでは選手宣誓緑谷出久！」
「はい！」
「宣誓！俺達一年は正々堂々と戦う事を誓います‼?」
「さあ！最初の競技はこちら‼?」
スクリーンには『障害物競走』が映っていた。
「この校舎を一周して戻ってきてね。妨害行為はありよ‼?ただし怪我をさせないようにね！それではスタート‼?」
「悪いな！先行かせてもらう！」
轟が氷の個性を発動し、足止めをしようとした。だが、轟の事を知っている1―　Aのクラスや出久は飛び退いた。
「そうくると思ったよ」
「甘いです轟さん‼?」
『最初の難関は「ロボ・インフェルノ‼?」』
「あれヒーロー科が試験の時に戦ったロボ⁉?」
「でかすぎだろ⁉?」
「こんなのなんともねぇな」
素早く氷の個性を発動し、インフェルノ・ロボを凍らせた。
「今だ！凍った隙にロボの足元を通れ‼?」
「やめとけ不安定な時に凍らせたから崩れるぞ。」
インフェルノは倒れてきた
ドオオオオオオオン
『誰かが潰されたぁ‼?死んだのか？」
「「死ぬかぁ‼?」」
ボゴン！
「潰されたのは切島とB組の鉄哲だぁ‼?」
「轟の野郎！俺じゃなきゃ死んでたぞ！」

「全くだ‼?」
「個性だだ被りかよ⁉?ただでさえ地味なのに（泣）」ダダッ
「それ言うか⁉?」ダダッ
『次の障害物は落ちないように気よつけろ！ザ・フォール‼?』
「俺なら問題ないな」
　出久は舞空術で浮かんでクリアした
『最後は地雷地獄怒りのアフガンだぁ‼?』
「試してみるか…」
　出久は後ろ向きになり
「かめはめ…波ぁぁぁぁぁぁぁぁ‼?」
　かめはめ波をブーストのようにしてゲート前にきて一気に駆け抜けた
『最初に帰ってきたのはヒーロー科の緑谷出久だぁぁぁぁ‼?」
　出久は見事一位になったのだった

ポイントは一千万⁉？狙われまくりの騎馬戦‼？

「さぁ‼？次の競技は騎馬戦よ！予選で落ちた人もいるけれどまだまだアピールのチャンスはあるからね‼？」
「騎馬戦か…」
「苦手な競技だよ～」
「上位に成る程狙われるわよ‼？　順位が高ければ高いほど狙われるわよ！例えば４６位の人は６ｐよ！」
「（なら俺は１０００ぐらいか？）」
「一位の緑谷君は１千万‼？」
　全員が獣のような殺気の眼で出久を見たが
「（このくらいの殺気なら平気だね）」
　殺気を浴びても出久は無反応だった
「１０分以内に騎馬の相手を見つけてね！」
「じ、１０分⁉？」
「短すぎだろ‼？」
　次々と他の人達は騎馬を見つけているが出久は一千万を持っているので誰も近寄らなかったが
「緑谷俺と組んでくれるか？」
「俺も良いか？」
　心操と轟が声をかけてきたのだ
「良いの？狙われる可能性があるよ」
「お前には感謝してるからな」
「俺も修行をしてくれた礼がしたい」
「ならお願いするよ」
「後１人はどうするんだ？」
「心当たりがあるから任せて」
　そして
「轟！」
「おう」
「心操」

「行くか」
「常闇‼?」
「ああ」
「よろしくな」
「騎馬は組終わった?それではカウントダウンをするわよ!」
3!
「狙いは!」
2!
「一千万!」
1!
「騎馬戦スタートよ‼?」
「一千万寄越せ〜‼?」
「緑谷君一千万いっただくよ〜」
「追われしの定め!どうする?緑谷!」
「勿論逃げの一択!しっかり捕まって!」
出久は地面を蹴り飛び上がった
「逃すか!」
イヤホンジャックを伸ばした耳郎だが
「ダークシャドウ!」
「アイヨ!」
バシン!
「いいぞダークシャドウそのまま警戒を頼む」
「マカセトケ!」
「やるな常闇」
「選んだのはお前だ」
「攻撃と防御は任せろ」
「ハチマキを奪うのは俺に任せろ」
この後順調に一千万を出久達は死守していたが物間が出久を無個性と馬鹿にして怒らそうとしたが
「おい、嫌み狸…」
「誰が嫌み狸だ⁉?」

心操が洗脳で物間を黙らせ
「持っているポイントを全て寄越せ」
物間チームのポイントを全て奪った
「ついでに凍っとけ」
パキィィィィィン‼?
静かに怒っている轟が物間を凍らせた
「自業自得だな」
そのまま出久達は逃走した
「馬鹿物間！」
「物間のバカァァ！」
『カウントダウンをするぜ‼?』
3！
2！
1！
『タイムアップ！順位を発表するぜ！一位緑谷チーム！二位切島チーム！三位物間チーム！4位飯田チーム！以下のチームが最終決戦へ進出だぁぁぁ‼?』
「やったね2人共」
「そうだな。次の競技は負けないからな」
「俺もだ。緑谷」
「僕だって負けないよ」

オリエンテーション‼?

　オリエンテーション前の昼休み出久は飯田、切島、轟、八百万達と
お昼を食べていたのだが
　食堂
「身体を動かした後の飯は旨いなぁ」
「み、緑谷凄い量だな」
　出久のテーブルの上にはカツ丼など大盛りの料理が並んでいた
「これでも足りないくらいだな
「いやいや！それでも多いぞ‼?」
「何人前あるんだよ⁉?
「蕎麦美味い」モグモグ
「食べきれるんですか?」
「みてる俺達が胃もたれしそうだ」
「ヤオモモここにいたんだね」
「どうしたんですか?芦戸さん」
「相澤先生の伝言で私達はチアの格好で応援するみたいだよ」
「ちょっと待て芦戸。それは本当なのか?」
「あの二人の仕業とは思わないのか?」
「あ、確かに」
「相澤先生がそんな事言う訳ないですし…」
「どうしますの?」
「俺らに任せろ構わないよな?切島、瀬呂、轟?」
「構わないぜ！」
「俺もだ」
「あの二人と言えば上鳴と峰田しかいないからな」
　出久、切島、瀬呂、轟、心操は女子達を騙そうとした変態二人を制
裁しに向かった
　え?どんな制裁をしたのかはご想像に任せます
「「ギャアアアアアアアアアアアアアアアア」」
　そして制裁した後変態２人は瀬呂の個性で簀巻きにされて相澤先

生の元へ運ばれた（笑）出久達は八百万達に感謝された
ーーーーーーーーー
ーーーーーーー
ーーーー
ーー
ー
「いよいよ最後の競技が始まるわよ！最後の競技は一対一のバトルよ‼？」
「組合せはどうなるんだろうな」
「ワクワクしてきたぜ」
「トーナメントは此方よ‼？」
一回戦
出久対物間
切島対哲徹
飯田対発目
瀬呂対轟
八百万対常闇
拳藤対心操
塩崎対上鳴
芦戸対青山
「以上の組合せでトーナメント戦をするわ‼？準備ができるまではオリエンテーションを楽しんでね！」
「最初は奴か…」
「無個性と馬鹿にしたからな狸は…」
「オリエンテーションを楽しむか」
「ああ／そうだな」
玉転がし
「かめはめ…波ッ‼？」
威力を抑えたかめはめ波で大玉を吹き飛ばし
「転がすぜ‼？」
「行くぞ！」

怪力自慢の砂藤と障子が転がして勝利した
綱引き
出久がどちらに行くか揉めたが（力があるから人気だった）嫌な予感しかしないので出久は辞退した
借り物競走
走り出した出久はお題があるテーブルに置いてある封筒から紙を取り出した
［異性の人♡］
「（なんだ？このお題は…）」
『おい、あんなお題あったか？』
『俺は知らないＹＯ』
「緑谷君はラッキーね！それはスペシャルなお題よ‼？」
『『「あんたの／お前の仕業か‼？」』』
ミッドナイトが出したとんでもないお題に出久、相澤、マイクは叫んで呆れていた
「（はぁ、仕方ない…行くか）」
出久は八百万の方へ向かった
「八百万さん来てくれる？」
「…？ええ構いませんわ」
出久は八百万に協力を頼んでミッドナイトの方へ向かったが
「お姫様抱っこしてゴールよ‼？」
「…」
『…』
『…』
「ええ⁉？／／／」
またしても変な指示をしたので出久、放送席にいる相澤、マイクは更に呆れて八百万発顔を真っ赤にした
「（またか…）ごめんね？八百万さん」
ヒョイ
「ちょ‼？緑谷サン⁉？」
八百万をお姫様抱っこした後何かを言っているミッドナイトを無

視をしてゴールした

最終競技開幕‼？出久対物間！

「フィールドが完成したよ」
『サンキューセメントス！　いよいよ最終競技の開幕だ‼？この競技は一対一のガチンコバトル！ルールは簡単！相手を行動不能にするか場外に落とすと勝利だぜ‼？リカバリーガールもいるから安心しな！まずは一回戦‼？ヒーロー科Ａ組最強の男緑谷出久ｖｓ（バーサス）同じくヒーロー科Ｂ組コピーすれば最強？の狸物間寧人‼？』
「最強って訳じゃないけどなぁ」
「僕は狸じゃないよ⁉？」
『それではバトルスタート‼？』
「君って無個性なんだよね？」
「それがどうした？」
「君は両親の子じゃないんじゃないのかい？」
「どう言う意味だ？」
「君は捨てｇ［バキィ‼？］がはぁ⁉？」
　物間は出久のストレートで殴り飛ばされた
「その口を閉じやがれクソ狸…俺の親を馬鹿にするんじゃねぇよ今何を言おうとしたんだ？」ゴゴゴゴ…
　出久は両親を物間に馬鹿にされたので静かに怒っていた
『み、緑谷怒ってないか？』
『彼奴は緑谷の両親を馬鹿にしようとしたんだろうな…まぁ物間が怒らせたんだから自業自得だ』
「え、えっと…」（大汗）
「覚悟しろよ？手加減なしでてめぇをボッコボコにしてやる‼？　界王拳‼？」
ギュイイイイイン‼？
　出久は界王拳を発動して
「だらぁぁぁぁ‼？」
　一気に攻め込んだ
「速い⁉？」

「こっちだ!!?」
「な!?」
「だらららららら!!?」
ドガガガガガガガガ!!?
「がばべらさらぽへ!?」
「まだまだ終んねえぞ!!?」
「なら君の能力をコピーしてやる!」
物間は出久の手になんとか触れた
「やってみな?かめはめ…　波ぁぁぁぁぁぁぁぁ!!?」
出久は物間に必殺技のかめはめ波を放った
「かめはめ波ぁぁぁぁ!!?」
物間も対抗して同じ技を放とうとしたが
シーン
「あれ!?」
かめはめ波は放てなかった
そして
ドオオオオオオオン
「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁ!?」
物間は出久が放ったかめはめ波に飲み込まれ
「」チーン
場外に飛ばされて気絶していた
「も、物間君場外!勝者緑谷出久君!!?」
「狸野郎一つ誤算だったな?俺が放った技は俺の師匠から伝授された技だお前如きが使える訳ないんだよ…って言っても気絶してるから聞こえる訳ないか」
一回戦の勝者出久
ここからダイジェスト
轟対瀬呂
瀬呂がテープを使い場外に飛ばそうとしたが轟の氷で下半身を凍らされて行動不能となり轟の勝利となった。なお瀬呂にはドンマイコールが何度か響いた

切島対鉄哲
個性が粗同じの２人は殴り合いダブルノックアウトとなり引き分けとなり腕相撲対決で切島が勝利
飯田対発目
一言で言えば飯田は発目に発明品のプレゼンテーションに利用された
八百万対常闇
常闇が黒影で八百万に攻撃をし続けて勝利
拳藤対心操
格闘戦で２人は互角に戦えたが心操が気弾で目眩しをして背負い投げで場外へ飛ばして心操の勝利となった
塩崎対上鳴と芦戸対青山は原作通り
２回戦進出者
出久、轟、常闇、飯田、心操、切島、塩崎、芦戸

二回戦目出久ｖｓ飯田

セメントスが壊れたフィールドを修理した後た後対戦相手が決まった

２回戦目進出者の対戦相手

心操対塩崎

常闇対芦戸

轟対切島

出久対飯田

「対戦相手は飯田君か」

「緑谷君とかよろしくな」

「よろしくな飯田。まだ出番まで時間があるからイメージトレーニングしてくるぜ」

「そうなのか？なら僕は兄さんに電話してくるよ」

「そう言いやぁ兄がいると言っていたな」

「まだ仕事中かもしれないけどな」

「そうか」（兄さん…か兄弟子の悟飯さんを思い出すな）

出久は兄弟子である悟飯を思い出していた。そして出久は出番があるまでイメージトレーニングをしに屋根の上へ向かった

心操対塩崎の試合

塩崎は蔓で攻守したが心操は気弾と新技”太陽拳”で目眩しをした後蔓を掴んで塩崎を場外へ投げ飛ばして心操の勝利となった

常闇対芦戸

原作通りで常闇が芦戸に勝利

轟対切島

切島は最大硬化で轟が出す氷を砕き続けていたがスタミナが切れた隙をつかれ轟が背負い投げをして場外へ出して轟の勝利

そしていよいよ出久と飯田が対戦する出番がきた

ーーーーーーーーーーー

ーーーーーーー

ーーーーー

ーーー
ー
『待たせたな！二回戦最後の戦いの開始だぜ！無個性で最強のヒーロー科緑谷出久ｖｓ（バーサス）同じくヒーロー科最速の男出久天哉！』
「来たな飯田」
「お互い全力で勝負しよう」
「それでは試合スタート‼？　」
「先制させてもらう‼？」ブォン！
　飯田はエンジンで出久に向かってきて回し蹴りをしようとしたが
「甘いぞ飯田！」
　出久はあっさりと蹴りを避けた
「避けられたか！」
「飯田スピード勝負ならスピードで勝負だ。３倍界王拳‼？」
ギュィィィィィン‼？
「それが緑谷君の身体強化能力か！」
「決着は速めに決めようぜ長くは続かないからな」
「なら僕も全力でやろう！　トルクオーバー・レシプロバースト‼？」
　飯田も必殺のトルクオーバー・レシプロバーストを使い最大限に加速した
「行くぞ！」
「ああ‼？」
　二人は同時に駆け出し
ドガァン‼？
ボゴォォ‼？
「くっ！流石だな緑谷君‼？」
「飯田こそな！ならこれなら着いてこられないだろ？」
「まだ上があるのか⁉？」
「界王拳…　２０倍だぁぁぁぁぁぁぁぁぁ‼？」
ギュィィィィィン‼？
　出久が纏う赤いオーラが更に上がった
「行くぞ飯田‼？」

ギュン!!?
「は、速い!!?」
「こっちだ!!?」
「いつの間に背後へ!!?くっ！」
ドゴ！
出久の蹴りと飯田の蹴りがぶつかったが
「ぐぅ!!?力が強い!!?」
飯田は出久の蹴りで場外ギリギリまで飛ばされた。その時だった
ブスン…
「しまった！エンストか!!?」
「どうすんだ？飯田」
「これ以上動けないから降参するよ」
「飯田君降参！緑谷君準決勝進出!!?」
飯田がレシプロバーストの影響を受け降参して出久が勝利し準決勝へ進んだ

準決勝！出久対轟

心操対切島の戦いは心操の勝利となり俺は準決勝の準備をする為控え室に向かっている途中エンデヴァーに会った

「おーいたいた」

「なんの用ですか？エンデヴァー」

「無個性なのにかなりの強さだまるでオールマイトだ」

「ありがとうございます。もう行かないといけないので」

俺はそう言い去ろうとしたが

「うちの焦凍はオールマイトを超える義務があるテスト相手として頑張ってくれ」

俺はその言葉にイラッときた

「一つ言っておく俺はオールマイトじゃない」

「そんなのあたりｍ「当たり前だろ？轟君もあんたじゃない轟君は轟君だお前でもない」

俺はエンデヴァーをひと睨みするとその場を去った。

『いよいよ準決勝の開始だぜ！無個性でも最強のヒーロー科緑谷出久ＶＳ氷と炎を操るヒーロー科轟焦凍!!？』

「来たね轟君」

「お互い全力で勝負しよう緑谷」

「それでは準決勝スタートよ!!？」

「先手必勝！かめはめ…　波ぁぁぁぁぁぁ!!？」

「個性特訓して編み出した技を試すか…　アイスシールド!!？」

ドガァァァァァァァァァァン!!？

「やるなぁ轟君個性から編み出した防御技？」

「そんな所だ。今度はこっちの番だ！　バーニングショット!!？」

「炎の気弾!!？」

ボォォォン！

ドゴォォォォォ!!？

轟が手の平から炎のような気弾を放ったので出久は慌てて気弾を放ち相殺した

「炎の個性から編み出した技か…」
「特訓して編み出したんだ。お前のおかげさ」
「それは嬉しいな！ワクワクしてきたぞ‼？」
　その時だった
「焦凍ぉぉぉぉぉぉぉ‼？それでいい！お前が俺の野望を果ｔ」邪魔すんなクソ野郎‼？」ボォォォン
　ドガァァァァァァン
　エンデヴァーが何かを叫んでいたが出久がエンデヴァーがいる方向へ向かって気弾を放ち黙らせた
「緑谷…親父がすまねぇ」
「気にしてないから心配すんな！さて続きをやろうぜ」
「ああ‼？」
『あ～ららエンデヴァーさん緑谷を怒らせたみたいだな』
『勝負の邪魔をしたんだろ気の毒だが自業自得だな』
　エンデヴァーは気絶してサイドキックにより観客席から保健室に運ばれた
ーーー

「セメントス‼?・観客席の防御を！」
「任せてください‼?」
ミッドナイトがセメントスに観客席の防御を頼みセメントスは爆破の被害がないようにセメントの壁を作った
ドガァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァン‼?・
『どうなったんだ?』
『かなりの爆発だったな』
煙が晴れるとステージに立っていたのは…

ギリギリ場外までで踏みとどまっている出久と場外に飛ばされしまった轟の姿だった
『轟君場外！緑谷君決勝進出‼?』
「流石だな緑谷…負けたよ」
「いい戦いだったよ轟君」
「決勝…負けんなよ?」
「勿論」
轟と出久は拳をぶつけ合った

決勝戦！出久ＶＳ心操

「待たせたな！いよいよ決勝戦の開始だぜ！まずは無個性で最強の緑谷出久ＶＳ（バーサス）同じくここまで上がって来たヒーロー科心操人使‼？」
「ここまで来たんだね心操君」
「俺はお前の個人的な弟子だから当たり前だ」
「あ…そうだったね」（苦笑）
『え？心操は緑谷の個人的な弟子なの⁉？』
『俺は聞いていたから知ってだけどな』
『何それ⁉？俺は聞いてないＹＯ‼？』
『教える訳ないだろ山田』
『本名言うな‼？』
「山田先生～」
「そろそろ始めたいんですけど山田先生」
『緑谷と心操まで本名で呼ばないで‼？そ、それでは決勝戦スタート‼？』
「ギャリック…」
「かめはめ…」
「砲ッ‼？」
「波ぁぁぁぁ‼？」
ドゴオオオオオオオオオオオン‼？
「相殺されたか…」
「お前ならやると思ったからだ」
「なら接近戦だ！」
「俺も本気でやるからな」
　出久と心操は互いに接近し
ドガガガ

出久は空中に飛び上がった
「なら見せようか俺の新技…はぁぁぁぁぁぁ‼?」
心操は両手に気を溜め始めた
「魔空包囲弾‼?」
ババババババババ‼?
「何やってんだ彼奴…」
「外してるじゃねぇか」
「何が新技だよ」
『おい今心操を悪く言った奴は今すぐ帰って転職サイトでも見とけ』
「俺も聞こえたぜ…弟子を悪く言うなら今すぐ此処から帰れ(けえ)‼?」
心操の新技を悪く言ったヒーロー達は相澤と出久に怒鳴られた
「俺を庇ってくれたのはありたいけど周りを見てみな?緑谷」
「確かに俺は今大ピンチだな」
「あ、あれをみろ‼?」
出久の周りには大量の気弾があったからだ
「逃げ場はない…はぁぁぁぁぁぁ‼?」
ドガガガガ!ガァァァァァァァァン‼?
大量の気弾は出久へぶつかり大爆発をした
「どうなったんだ?」
「かなりの爆発だったよな」
「…やっぱり今の俺じゃダメージは与えられないか」
「今のはヤバかったぞ心操」
出久は気のバリアでなんとか防いでいた
シュタッ
「そろそろ終わらせようか」
「同意見だ俺も優勝したいからな」
「ファイナル…」
「かめはめ…」
「不味いわ!セメントス‼?」
「分かってます‼?」
「フラァァァァァァァァァッシュ!!」

「波ぁぁぁぁぁぁぁぁ‼?」
ドゴオオオオオオオオオオオオオン‼?
『ど、どうなったんだ?』
『かなりの爆発だったな』
煙が晴れるとフィールドにいたのは

立っていた出久と満身創痍の心操が片膝を地面につけていた姿だった。

「心操君立てる?」
「いえ…力を出しすぎて動けません」
「心操君行動不能!優勝は緑谷出久君‼?」
「負けたよ…緑谷」
「いや?俺も一瞬ヤベェと思ったからな油断していたら負けていたよ」
「そうか…またお前と修行したいんだけど良いか?」
「勿論だよ」
そして表彰式
「それでは表彰式よ!メダルを授与するのはこの方!」
「ハーッハッハッハ!ハー‼?わーたーしーがーメダルを持って「我らがヒーローオールマイトオオオオオ‼?」きた?」
(((((かぶった)))))
ミッドナイトが申し訳なさそうに誤りオールマイトはちょっぴり落ち込んでいるいた
「まずは3位の轟少年おめでとう」銅メダルを首にかける
「ありがとうございますオールマイト」
「2位となった心操少年惜しかったね」銀メダルを首にかける

「緑谷には負けたが悔いはないです」
　そして見事に一位となった緑谷少年おめでとう‼?」金メダルを首にかける
「ありがとうございますオールマイト」
「この体育祭みんなも良く頑張った！だがしかしまだまだ皆も上を目指せるぞ！それでは締めの挨拶せーの！」
（あれだな）
（あれだね）
「「「「プルスウルお疲れ様でした‼?とら」」」」
「って⁉?」
「ええ⁉?」
「「「「そこはプルスウルトラでしょ⁉?オールマイトオオオオ‼?」」」」
「いやぁ～皆疲れたかなぁと思って」
「グダグダになったな」
「オールマイトらしいけど」
　体育祭はグダグダのまま終了した

番外編
原作世界へ

ある日の休日
「だらららー・でりゃあ‼?・」
出久は1人で修行をしていた
「(瞬間移動をしてみるか。気を高めて…)はぁ‼?・」
ピシュン‼?
だが…
ドンガラ!・ガッシャーン‼?
「痛たた…失敗したか」
瞬間移動の修行もしていたが失敗していたのだ
「まあ地道にに頑張るか」
その後も出久は限界まで修行をした
ーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーー
ーーーーー
ーーー
ー
「ふぅ…少し休むか」
修行もひと段落したので出久は休憩していた
「瞬間移動は難しいな…コツが掴めないや」
悟空も居ないのでアドバイスが聞けなかった。最も悟空は上手く説明が出来るか不明だが(笑)
その時だった
「ん?・なんだ…この気配」
出久は変な気配を感じて空を見上げた
ブゥゥゥン
「ワープゲート?・あそこから気配がするな…行ってみるか」
突如現れた謎のワープゲートから気配がした出久は行ってみる事

にしてワープゲートに入った
ーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーー
ーーー
ー
　雄英高校ヒーロー科1年A組は、1週間後に控えたヒーロー仮免修得試験に向けて〝必殺技〟の特訓に励んでいた。セメントス（以降CM）、ミッドナイト（以下MN）、エクトプラズム（以下EP）相澤、そしてオールマイト（トゥルーフォーム）が監修を務めていた。
　各々必殺技のイメージが見え始め、特訓に精が出てきたある日、上空にリング状のゲートが出現した。
「おい、あれなんだよ⁉?」
「また敵が攻めてきたのか⁉?」
　瀬呂や上鳴が動揺しているなか、教師陣は生徒の安全を守るために迅速に行動を取り始めた。

「全員訓練中止！1ヶ所に集まれ‼?」
「全員私が作った壁の後ろへ、オールマイトも。」
「すまない。」
「貴方が謝ることではないわ。」
「貴方ハ今マデ我々ノ分マデ戦ッテキタ。今度ハ我々ガ貴方ノ分マデ戦イマス。」
　プロヒーローである教師陣は先の戦いで力を使い果たしたオールマイトを労いながらも、ゲートへの警戒を怠っていなかった。
「大丈夫ですオールマイト。今度は僕達が守ります。」
「アンタはしっかり隠れていてくれ。」
「クソデクと半分野郎はすっこんでろ！俺が1人でぶっ殺す‼?」
　1—Aもまた、オールマイトを守ろうと全員戦闘態勢を整えていた。そして、ゲートから何かが、いや誰かが落ちてきた
　シュタ…
「此処は雄英か…」

「ぼ、僕が出てきた⁉？」
「どうなってんだ⁉？」
「なんで緑谷がいるんだよ⁉？」
　1―Aの生徒達は、クラスメイトである緑谷出久の出現に動揺し始めた。
「あり？俺がもう1人いるなコスチュームも全く違うし…いや、まさかねぇ」
　ゲートから出てきた緑谷？はは、早くも状況を理解した。
　そんな中、教師陣が彼らを取り囲む形になった。
「変な行動はするなよ。お前らは何者だ？」
　教師陣を代表して相澤が出久達に話し掛けた。返答次第ではいつでも拘束できるように、セメントス達も身構えている。
「そんなに警戒しなくても大丈夫ですよ、相澤先生。って言っても無理か…」
「なぜ俺の名前を知っている？」
「新手の敵か？」
「そう考えても不思議ではないですが、それは違いますセメントス先生」
「では貴方は何者なの？」
「俺はここと は別の世界の住人、〝パラレルワールド〟から来たんです。おそらく辿ったルートと違う時間軸だと思いますけど」
「べ、別の世界の僕？」
　パラレルワールドから来たと言われて俄に信じがたいが、彼が嘘を付いているようには見えない。なので、
「ならお前が学級委員になった時に何が起きて、その後何があった？」
　緑谷に関わる質問をしてみた。
「確かあの日はマスコミが侵入してきて飯田が周りを静めたんだ。数日後救助訓練の時にヴィランがＵＳＪに侵入してきた。と、こんな感じですかね」
　「意外と冷静だな」
「これでも委員長なので」

「「「緑谷が委員長⁉？」」」
「そんなに驚く事か？」
「性格が正反対だな」
「「「うんうん」」」
「そんなに僕ぶつぶつ言ってるの⁉？」
緑谷だけ驚愕していたが。なんとかパラレルワールドから来たことを証明できた。

パラレル組の自己紹介と出久対爆豪‼?

状況も分かり敵ではないと分かったので出久は原作組へ自己紹介する事になった。

「改めて自己紹介するぞ俺はヒーロー科A組の緑谷出久。分からなくなるからヒーロー名で呼んでくれヒーロー名はカカロットだ」

「よろしくカカロット」

「なんでその名前なんだ?」

「俺が尊敬している人の名前を借りてこの名前にしたんだ」

「尊敬している人って?」

「孫悟空さんで俺の師匠だ」

「孫悟空ってあの伝説と呼ばれている妖怪ですか?」

「違うぞ此処とは別の世界に居るドラゴンボールと呼ばれている世界にいる孫悟空さんだ」

八百万が妖怪の孫悟空かと聞いたが出久は違うと言いドラゴンボールと呼ばれている世界の悟空だと言った

「俺はある日その世界へ飛ばされて悟空さんの弟子になり”舞空術”と”気”を習得したんだ」

「「「「”舞空術”と”気”????」」」」

「見た方が早いか」

出久は空中に浮かび手の平からエネルギー弾を出してセメントスが作ったセメントの壁にぶつけた

ボオオオン!

ドゴオオ‼?

「「「「空中に浮かんで手からエネルギーを出したぁぁぁぁぁぁぁ‼?」」」」

「それは”個性”なのか?」

「いや、これは俺が持つ特殊能力だ。そもそも個性は無い無個性だしね」

「「「「む、無個性‼?」」」」

「強さはどれくらいなんだ?」

「強さかそうだな…ＵＳＪで脳無を倒したし雄英体育祭で優勝したな」
「脳無を倒して雄英体育祭で優勝⁉？スゲェな‼？」
「俺にとってはまだまだ…悟空さんにはまだ追いつけないよ」
　出久は苦笑しながら尊敬している悟空には追いつけないと話した。
そんな雰囲気をぶち壊す奴が居た
「おい、クソデク」
「なんだよ爆豪」
「俺と戦いやがれ！お前は俺より下で弱いんだよ‼？！道端の石ころで無個性の雑魚が！」
「待てって爆豪‼？」
「止めろ爆豪！」
「なんで喧嘩を売るんだよ⁉？」
　爆豪が出久に喧嘩を売ったので切島、瀬呂、上鳴通称爆豪派遣が必死に止めていた
「変わらねぇな爆豪…散々俺を虐めていた〟犯罪者野郎〟」
「「「「い、虐めていた⁉？」」」」
「犯罪者ってどう言う意味だ？」
「言ってなかったな此奴は雄英には入学してない。ヒーロー科Ａ組に居るのは心操だ」
「心操君がＡ組に居るの⁉？」
「居るぞ俺と組手をしてるからほぼ互角に戦える。此奴の事だがどのヒーロー専門高校も入学を拒否されて教育が厳しい高校に居るみたいだけどな爆豪…戦いたいのならやってやるよ」
　こうして出久対爆豪の模擬戦が決まったのだった
ーーー

「フィールドが完成したよ」
「悪いな。セメントス先生」
「気にしないで下さい出久君」
「ご苦労セメントス。ソレデハ模擬戦ヲ始メルミッドナイト審判ヲ頼ムナ」
「分かったわ。どちらかが戦闘不能になったら終了するからね」
「分かりました」
「…っけ」
「それでは模擬スタート!!?」
「死ねぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ!!?」
　爆豪はいつもの癖である右手の大振りで爆破をしようとしたが
「遅いね」ヒョイ
　出久はあっさりと避けて
「だらぁ!!?」
　ドゴォ!!?」
「がはぁ!?」
　爆豪の背中を蹴り飛ばした
「爆豪の攻撃を避けた!?」
「スゲェ!!?」
「避けんじゃねぇぇ!!?」
　再び爆豪は爆破をしようとしたが
「太陽拳!!?」
ピカァァ!!?
「がぁぁ!?目があ!!?」
　太陽拳で目眩しをした後
「界王拳!!?」
ギュィィィィィン!!?
「み、緑谷に赤いオーラが現れた!?」
「これは”界王拳”パワーとスピードを上げる身体強化だ」
「(僕のワンフォオールフルカウルと似ている)」
「でもな…この身体強化にはある”欠点がある”」

「「「欠点???」」」
「界王拳の倍数を上げれば上げる程パワーもスピードも上がるけど身体に負担が掛かりやすい諸刃の身体強化なんだ。やりすぎたら最悪行動不能になる」
「それを使うのは弱いｓ「うるせぇ４倍界王拳」ギュン‼?
「何処行きやがっ「こっちだウスノロ」な⁉?」
「散々暴言を言いやがって貴様はこれで終わりだ‼?」
　出久は爆豪の一瞬で背後に移動し
「かめはめ…　波ぁぁぁぁぁぁぁ‼?」
　威力を抑えたかめはめ波を放った
「がぁぁぁぁぁぁぁぁぁ⁉?」
　ドガァァァァァァァァァァン‼?
　爆豪はかめはめ波を至近距離でくらってしまいセメントスが作ったセメントの壁に叩きつけられ気絶した
「爆豪君気絶！勝者出久君‼?」
　出久の圧勝で終わった

ヴィラン侵入⁉？出久の強さ「俺は悟空さんの弟子だ。覚悟しろヴィラン共‼？」

「モガモガモガモガァ～‼？（納得できるかぁ～！勝負しろやゴラァー‼？）」
「落ち着けって爆豪‼？」
「負けたんだろ⁉？テープが切れちまう‼？」
「やばい！抑えきれない」
「どうなってるの？」
　「カカロットに負けたのが気に入らないからもう一回勝負しろと言ってるんだ。それを切島達が必死に止めてるんだ」
「これからどうするんだ？カカロット…」
「帰る方法考えてなかったなぁ…」
　出久はどうやって帰るか考えていその時だった
ドガァァァァァァァァァァァン‼？
「なんだ⁉？」
　突如爆発が発生して壊れたドアから多くのヴィランが出てきた。
「ヴィラン⁉？」
「シュウゲキニキタノカ⁉？」
「カリキュラムは漏れてないはずなのに‼？」
「ここが雄英か。暴れやすそうな所だぜ」
「あれはＡ級ヴィランのナイトフィアー‼？」
「奴の個性は？」
「ドリームペインという、生物に発狂死させる程の幻覚を見せたり他人の精神に洗脳し操り人形として操ったり、自らに他人の精神に潜り込んで精神・肉体的ダメージを与える事が出来る強力な催眠系個性を持つんだ！」
「いつも数十人を操り、操り人形＆犯罪者として犯罪を起こさせて自分は傍観者の振りにし他人を陥れて罪を被せるという実にタチ悪いヴィランなのよ！」

「それなら俺に任せてくれ」
「カカロット1人じゃ危険だ!!?」
「大丈夫だ俺は強いからな。オールマイト達は生徒達を守ってくれ」
「危険だと判断したら加勢する」
「それはありがてぇな。じゃあ行ってくるぜ!!?」
　出久はナイトフィアー　率いるヴィラン達に向かって走り出した
「なんだ?あのガキは」
「ガキじゃ俺らには勝てねぇよ!」
「やっちまえーーー!!?」
「太陽拳!!?」
ピカァ!!?
「「「「目がぁぁぁぁぁぁぁぁ!!?」」」」
「四しんの拳!!?」
　出久は4人に分身した
「「「「分身したぁぁぁぁぁぁぁぁ!!?」」」」
「私ノ個性ニ似テイルナ」
「お前らは雑魚敵達を頼む」
「「任せろ」」
「俺達は奴ナイトフィアーだ」
「おう!!?」
　分身1と2は雑魚敵達の相手をする事になり出久と分身3はナイトフィアーの相手をする事にした
「かめはめ…波ぁぁぁぁぁぁぁぁ!!?」
「ファイナル…フラァァァァァァッシュ!!?」
「「「「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁ!!?」」」」
　ドガァァァァァァァァァァァァン
「どうしたもう降参か?」
「まだ準備運動にもなってないぞ」
「強すぎる!!?」
「なんなんだよ!!?こいつら!!?」
「そっちが来ないなら」

「こっちから行くぜ‼?」
分身達は未だに残っているヴィラン達に向かって走り出した
その頃出久と分身3はナイトフィアー達と戦っていた
「いい加減に諦めやがれ！ナイトフィアー‼?」
「勝てねぇのは分かってんだろ‼?」
「こ、こうなったら…俺の個性をk「無駄だ！　太陽拳‼?」
ピカァ‼?
「目がぁぁぁぁぁ‼?」
「１０倍界王拳‼?」
ギュィィィィィン‼?
「おめぇはオラ達に勝てねぇ１０倍界王拳か・め・は・め…」
「波ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ‼?」
「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁ‼?」
ドガァァァァァァァァァァァン‼?
「」チーン
ナイトフィアーは気絶して出久の分身達は消えた
「ふぅ…１０倍界王拳はきついな」
その後ナイトフィアーは駆けつけた警察により逮捕された
「助かったよカカロット」
「ヒーローなら当たり前さ」
「どうやら終わったようですね」
「何者だ⁉?」
「新しいヴィラン⁉?」
「あ、ウィスさんお久しぶりです」
「久しぶりですね出久さん」
「カカロットこの人は?」
「この人はウィスさん第七宇宙の破壊神ビルスさまの付き人です」
「「破壊神ビルス??」」
「呼び捨てしてはいけませんよ?ビルス様に破壊されますよ。この場に居ないのが幸いですけど」
「ウィスさん何か用事があるんじゃないですか?」

「あ、そうそう出久さん私は貴方を迎えに来たのですよ。元の世界に帰れなかったんですよね？」
「そうなんでしたか？わざわざありがとうございます」
「いえいえ私も出久さんにお世話になりましたしお互い様です」
「それでは俺は帰りますので」
「ヴィランを倒してくれて感謝するよ」
「じゃあな皆‼？」
「では行きますよ」
カン！
ウィスが杖を叩くと光の柱が現れ出久は元の世界へ帰って行った
ーーー

職場体験編
ヒーロー名考案

二日間の休みも終わり出久と心操は学校に登校していた。
「超声かけられたよ来る途中!!」
「私もジロジロ見られて何か恥ずかしかった!」
「俺も!」
「俺なんか小学生にいきなりドンマイコールされたぜ」
「ドンマイ」
「ドンマイ…瀬呂」
「それを言わないでくれよ緑谷に心操」(泣)
みんなそれぞれ、注目されていたようだ
「おはよう」
「「「おはようございます!!」」」
「今日の〝ヒーロー情報学〟、ちょっと特別だぞ」
先生の言葉に、教室が緊張に包まれる。あれ?何かこういう状況に既視感を感じる気が…
『コードネーム』ヒーロー名の考案だ」
「「「胸ふくらむヤツきたあああああ!!!!」」」
あ、こういうパターンか。納得だ
ざわめく教室を、相澤先生が個性を使いながら一睨みして静まらせる。
「……というのも、先日話した『プロからのドラフト指名』に関係してくる」
そこから続く先生の話では指名が本格化するのは経験を積んで即戦力となる二、三年生からで、一年の今来た指名は将来性への期待や興味のようなもの。
それが卒業までに削がれた場合、一方的なキャンセルなんて事もよくあるとか。大人は勝手だなんて峰田が溢していたが、俺からすれば当たり前だと思うな

そうは居ないだろうけど、貰った指名に満足して胡座をかく人も居るかもしれない。
指名をハードルとして捉えられず、プルスウルトラ精神を忘れて成長を続けないようなヒーローの卵など、羽化出来る筈もないのだから。
青山、芦戸のヒーロー名が大喜利みたいになり気まずくなったが梅雨ちゃんのヒーロー名により皆は次々と発表して行った。
ちなみに指名数は
轟１５０００
心操６０００
瀬呂３８００
飯田２５００
出久５０
だそうだ
「なんで2位と3位の轟と心操が逆転してんだ？」
「緑谷の指名が５０ってなんだよ⁉？」
「俺は気にしてないぜ？指名をしたヒーローは見る目があってそれ以外は無いって事だろ…無個性だから仕方がないけどな」
「そう言う事だ指名をしたヒーローは緑谷の強さを分かってる」
そしてヒーロー名を発表していったが飯田は自分の名前である「テンヤ」轟は「ショート」となった
「俺のヒーロー名は『カカロット』だ」
「カカロット？由来を教えてくれる？」
「俺が尊敬している人で師匠でもある人の名前をヒーロー名にしました」
「緑谷君らしいヒーロー名ね！」
「俺のヒーロー名は『ドラゴンスピリット』だ」
「カッコいい名前ね！」
こうして出久のヒーロー名は『カカロット』心操のヒーロー名は『ドラゴンスピリット』に決まった
昼休憩

「緑谷君は決まったの？」
「まだだねぇ５０と少ないけど色々あって悩むよ」
「私はガンヘッドの所だよ」
「ごりごりの武道家のヒーローだったよな」
「轟は？」
「俺は親父の事務所にする」
「そうなのか？」
「まだ親父がした事は許さねぇが強くなりたいからな」
「あ…よく見たら俺もエンデヴァーから指名が来てる」
「俺もだな」
「後ラビットヒーローミルコとナイトアイ事務所からだ」
「ミルコは分かるけどナイトアイってオールマイトの元サイドキックだよな？」
「悩むなぁ…」
「行く所が無かったら雄英のトレーニングルームを借りて心操と組手も良いな」
「俺も行く所が無かったらお前と組手をしたいぜ」
　果たして出久と心操の職場体験先は？

職場体験開始！

そして職場体験当日

「コスチュームは全員持ったか？それじゃあ体験先に迷惑かけるなよ？」

「はーい」

「伸ばすな芦戸「はい」だ」

「はい…」

「飯田君何かあったら相談しろよ？」

「ああ」

「飯田の目…前の俺と似ている」

「嫌な予感が当たらなければいいな」

「そう言えば緑谷と心操はミルコに指名されていたよな？」

「いや…あの人はもうすぐ来るな」

「気がどんどん近づいてる」

シュタ!!？

「お前らがカカロットにドラゴンスピリットか！俺はラビットヒーローミルコだ。よろしくな!!？」

「よろしくお願いしますミルコさん」

「早速ヴィラン退治をするぞ！着いてきな!!？」

ミルコは跳躍するとあっという間に見えなくなった

「速!!？急いで追いかけよう心操君！」

「ああ!!？」

出久と心操は舞空術でミルコを追いかけて行った

ーーー

「回し蹴りで倒したぜ」
「仕事が速いですね」
「まだヴィランが暴れてるみたいだから行くぞ‼?」
「待って下さいミルコさん！事情聴取を‼?」
「そんなのは後回しだ‼?」
　再びミルコは跳躍すると見えなくなった
「俺達も追いかけるか」
「そうだな」
　２人は舞空術でミルコを追いかけて行った

　到着するとミルコは複数のヴィランと戦っていた
「ミルコさん！加勢します‼?」
「ありがてぇな！やるぞ‼?ドラゴンスピリット！カカロット！」
「了解‼?」
「かめはめ…波あぁぁぁぁぁぁぁぁぁ‼?」
「ファイナル…フラァァァァァァァァァァッシュ‼?」
「「「ギャァァァァァァ⁉?」
　ミルコとカカロット（出久）ドラゴンスピリット（心操）の活躍によりヴィランは全て倒された
「やるじゃねぇか！カカロットにドラゴンスピリット‼?」
「ありがとうございます」
「毎日トレーニングしてますから」
「あれってラビットヒーローミルコに体育祭で優勝した人と２位の人⁉?」
「確かミルコがカカロットとドラゴンスピリットと呼んでいたぞ」
「めっちゃカッコいい名前じゃん‼?」
「サインくれ～‼?」
「握手して～！」
「体育祭の影響か」

「なんか恥ずかしいな…」
「大人気じゃねぇか！恥ずかしがる必要はないぞ！さて、次に行くぞ‼？」
「それはいいのですがミルコさん…」
「ヒーローなら事情聴取を受けないと…」
「そうだな！今までやってなかったし」
「「((何やってんだよ…))」」
　初日から大活躍した出久と心操はあっという間に人気者になりファンクラブができたとか。余談だがミルコが事務所を持ってないと知った2人はミルコとホテルに泊まったとさ

ｖｓヒーロー殺しステイン

職場体験を始めてから数日が過ぎた…出久と心操はミルコと共に各地に現れたヴィランを倒す活躍をしていていつの間にか大人気となりファンクラブ等もできていた。そんなある日の事だった

「カカロットにドラゴンスピリット今日は保須市でヴィラン退治をするぞ」

「急ですね」

「保須市にヒーロー殺しステインが現れるとの情報があったからな」

「ヒーロー殺しステインですか…」

「(確か飯田の兄がそいつにやられたとニュースで聞いたな)」

「(飯田の目が復讐者の目だったから嫌な予感が当たらなければ良いな)」

「今から出発するぞ！到着は夜になるけどな」

「分かりました」

こうして出久と心操、ミルコは保須市へ向かったのだった

ーーー

「あれは何だ？カカロットにドラゴンスピリット」
「あれは”脳無”ＵＳＪに現れた改造された人間です」
「成る程な！蹴っ飛ばしてやる‼？」
　ミルコは跳躍し
「くらいやがれ‼？」
　ドゴォォォォ‼？
　脳無に踵落としをしたが
「…」
「効いてないのかよ⁉？」
「ミルコさん！ＵＳＪに現れた脳無はショック吸収と超再生の個性を持っていたんです！そいつも同じなのかも知れません‼？」
「それはやべぇな」
「ミルコさん！俺がやります‼？」
「任せたぜ‼？」
　ミルコと入れ替わるように出久が脳無と対峙した
「限界まで叩き込んで無効化する　１０倍界王拳‼？」
　ギュィィィィィン‼？
「だららららららららららら‼？」
　ドガガガガガガガガガガガ‼？
「１０倍界王拳かめはめ…波ぁぁぁぁ‼？」
　ドォォォォォォォン‼？
「」ドサ
「ふぅ…」
「流石だなカカロット」
「ありがとうございます。しかしこの脳無はＵＳＪに現れた脳無よりは強い」
「そうなのか？」
「少しだけだが苦戦したんだ」
ドガァァァァァァァン‼？ドゴォォォォォォォォォォォォ‼？
「あちこちで爆発音が聞こえるな…カカロットにドラゴンスピリット個性の使用を許可するからヴィランを吹っ飛ばしてこい‼？俺も

蹴っ飛ばしてくるからな」
「分かりました!!?」
出久と心操はミルコと分かれて保須に大量に現れた脳無を倒しに向かった

ミルコと分かれた出久と心操は大量に現れた脳無と戦っていた
「こいつらどんだけいるんだ!!?」
「とにかく倒して無効化するしかないな」
「一気に殲滅するならこれだな… ビッグバン・アタァァァック!!」
「なら俺は… ファイナル…フラァァァァァァァァァァァッシュ!!
ドガァァァァァァァァァァァァァァァン!!?
脳無達は二人の必殺技により全滅した
「「ガァァァァァァァァァァァ!!?」」
「まだいるのか!!?」
「キリがないな…」
「天哉くーん!」
「ん?あれはヒーローマニュアル」
「どうしたんですか?」
「あ、君達は確かカカロットにドラゴンスピリット体育祭見たよ」
「ありがとうございますマニュアルさん。所で誰かを探してるんですか?」
「ああ、俺の所へ職場体験に来ていた飯田天哉君がいなくなったんだ!何処を探してもいないんだ」
「確か飯田の兄インゲニウムがヒーロー殺しにより再起不能にされたとニュースになっていたな…そして保須市に現れた脳無…まさかヒーロー殺しを見つけた!!?」
「そ、それは大変だ!!?でも場所が分からない…」

「安心して下さいマニュアルさん俺が”気”を探知して探します」
「ありがとう」
「少し待ってて下さい」
　出久は飯田を探す為気の探知をした
「(大量にいる脳無とヒーローの気が混じっているから気が多すぎる…ん？路地裏辺りに3つの気…その内2つの気は不安定だまさか飯田ともう一人の気か！そしてその一つの気はヒーロー殺し‼？)見つけました‼？」
「ほ、本当か⁉？」
「はい、ですが飯田の気に加えてもう一つの気もあります。恐らくヒーロー殺しに殺されそうなヒーローと一緒に居ると思います」
「なんだって⁉？」
「どうすんだ？」
「ぶっつけ本番だが新技の瞬間移動で飯田ともう一人のヒーローを連れてくる」
「俺も向かいたいがヒーロー達の手助けをしないとな」
「マニュアルさん俺も手伝います」
「ありがとうドラゴンスピリット」
「任せたぞ緑谷…いや、カカロット」
「任せろ」
　出久は指二本を額に当ててピシュン‼？
　飯田達が居ると思われる路地裏へ瞬間移動した
ーーー

飯田は兄を再起不能にしたヒーロー殺しステインと戦闘を開始したが
「くそぉ・・・」ギリッ
飯田の頭を踏みつけ、腕を刺しているヒーロー殺し
「あ゛あ゛ぁ‼?」
「おまえも、おまえの兄も弱い・・・ 偽物だからだ」
「黙れ悪党・・・ !」
飯田はヒーロー殺しを睨んだ
「殺してやる‼?」
「あいつをまず助けろよ」
2人の近くには怪我をしているヒーローがいた
今の飯田は私怨に囚われ、ヒーローとは言えないものだった
「自らを顧みず他を救い出せ。己のために力を振るうな。目先の憎しみに囚われ私欲を満たそうなど、ヒーローから最も遠い行いだ・・・ハァ・・・ だから、死ぬんだ」
刀に付いた血を舐めると、飯田の身体が動かなくなった
「じゃあな、正しき社会への供物」
「黙れ・・・ 黙れぇ‼?」
ピシュン!
「そうはさせっかよ!ヒーロー殺しステイン‼?」
「何⁉?」
ステインと飯田の間に出久が現れ
「おらぁ‼?」
「くっ‼?」
回し蹴りをしたがステインは出久から距離を取り離れた
「助けに来たぜ飯田!」
「み、緑谷君何故此処に⁉?」
「お前の気とそこに倒れているヒーローの気を探知して新技瞬間移動で来たんだ。負傷してるみたいだが立てるか?」
「いや、奴の個性のせいか動けないんだ」
「助けに来たか…お前は本物か?」

「そう言うのは戦ってから判断しろよな」
「良い…お前は本物だ」
「緑谷君これは僕の戦いだ！手を出さないでｋ「黙ってくれる？」⁉？」
　飯田は出久に手を出さないように頼もうとしたが静かに怒っている出久に遮られた
「お前には言いたい事があるけど後にする（飯田には切り傷があって血も出ていた奴は刀を持っている…刀？そうか奴は血を摂取して行動不能にするのか）やるかステイン」
「来い」
　出久とステインは飛び上がり出久はステインの刀を回避しながら気弾を放ちステインは刀で気弾を弾いては刀で攻撃をしていた
「（くそっ！今は夜で此処は路地裏…太陽拳が使えねぇ⁉？此処から出たら光があるから使えるがステインには隙がない）」
「考え事か？」
「しまっ⁉？」
　ステインが出久に刀を振り下ろそうとしたその時
パキィィィィィィィィィィィン⁉？
「緑谷！無事か⁉？」
「轟⁉？助かったぜ」
「轟君まで…」
「轟…奴に血を見せるな推測だがステインは血を摂取する事で相手を行動不能にする。そして摂取は血液型によって異なる」
「正解だ」
「だから刀を使うのかなら…」
　轟は氷の個性で動けなくなっているヒーローネイティブと飯田を後方へ下がらせた
「遠距離攻撃で戦うしかないな」
「ああ！二人で守るぞ⁉？」
　出久と轟はステインと戦闘を開始した。戦っている二人を見ている飯田は涙を流していた

「君たちは関係ないんだ・・・！」
「止めて欲しけりゃ・・・立て‼?なりてえもんちゃんと見ろ!!」
涙を流している飯田を轟が叱責した
「(だが・・・それでも、今ここで立たなきゃ二度と!!もう二度と彼らに、兄さんに追いつけなくなってしまう！)」
飯田は二度と後悔しないために立ち上がった
「ぐっ」
「はぁ、はぁ」
「レシプロ…バースト‼?」
ドゴォォォォ‼?
「ぐぁぁぁぁ⁉?」
「飯田！」
「個性が解けたんだな」
「すまなかった2人とも・・・」
「偽物・・・！」
「俺が折れればインゲニウムは死んでしまうんだ!!お前には負けない!!」
「論外!!」
「轟！炎を出してくれ‼?」
「分かった‼?」
ゴォォォォォ‼?
「(炎も光と似たようなもんだ) 太陽拳‼?」
ピカァァ‼?
「くっ！目が…」
「決めろ飯田‼?」
「レシプロ・エクステンド‼?」
ドゴォォ‼?
「グハァ⁉?」
ドサ
「はぁ、はぁ…終わったな」
「此奴が持っている武器を全て取ろう…轟縛る物はあるか?」

「縛る物？ちょっと待ってろ」
ーーー

ステインの圧により誰もが動けなかった。その後ステインはたったまま気絶していたどうやら肋骨が肺に刺さっていたらしい…こうして保須市の事件は終了した

期末試験編

迫る期末試験

職場体験の翌日になって久しぶりである雄英高校への登校。
教室では様々な体験をしたのか悲喜交々な光景が見られた。
他の場所では芦戸が耳郎と蛙吹と話していてヴィラン退治とかもやったとかで興奮していた。
「お茶子ちゃんはどうだったの？　この一週間」
「とても……有意義だったよ」コォォ
蛙吹の質問にお茶子は構えをしながら静かに息を吐いていた。
それはさながら今から格闘技でも始めるのではないかと言う雰囲気である。
スクリューナックルを何度も放っているのはさすがである。
「目覚めたのね、お茶子ちゃん」
それを見ていた上鳴が言う。
「一週間で変化がすげーよな」
「いや、上鳴。女ってのは本性を隠し持ってるもんなんだぜ？」
爪をかじりながらそんな事を言っている峰田は果たしてＭｔ．レディのところで何を見たのか……？上鳴はさすがに見ていて怖いから爪を噛むのを止めさせながらも、
「それより一番変化があったのはお前ら三人だよな」
見た先には出久、轟、飯田、心操の三人が話し合っていた。話題はもうヒーロー殺しの事で一色になっていく。だが、そこで上鳴が不用意な発言をしてしまう。
そう、「ヒーロー殺しってかっこよくね？」と。
「おい…上鳴‼？」
そこで出久がどこか止めてと言っているような声を上げる。
「す、すまねぇ飯田」
上鳴もそれで飯田が襲われた事を思い出して反省している感じであった。

だが、とうの飯田は普段通りにしていて腕を何度も振って
「確かに信念が通っている男だった。だが、俺はやはりヒーロー殺しの事は認められない……だからもう俺のようなものを出さないためにも改めてヒーローを目指すのだ！」
「いつもの飯田に戻ったな」
「ああ」
出久と心操はいつも通りの飯田に安心した
……時は六月最終週。
期末試験まですでに一週間を切っていた。
それでクラスのみんなはと言うと、
「まったく、勉強してねー」
「あっはっはっはー！」（涙目）
上鳴電気……２０／２０位。
芦戸三奈……１９／２０位。
二人はまったく勉強の時間が取れてなかった事に非常に追い込まれている感じであった。
「体育祭とか職場体験とかが重なって勉強どころじゃなかったんだよー!!?」
「確かに……」（汗）
上鳴の叫びに、
常闇踏陰……１４／２０位。
思わず頷きながら常闇も汗を垂らす。
「中間はそれはなー……入学したてでなんとかなった感じだけどなー行事が重なりまくったからな……」
「（コクコク……）」
口田甲司……１１／２０位。
砂藤力道……１２／２０位。
砂藤の言葉に口田が無言ながらも頷いていた。普段なかなか大声を出さない口田と会話が成立している辺り、これはもう慣れであろう。
「期末は中間と違って――――……演習試験が辛いところだよなー」

峰田実……９／２０位。
峰田が余裕そうに頬杖を付きながら話す。こいつ、普段はエロイ事ばかり言っている割に成績はそんなに悪くはないのだ。
中学時代にモテたい……モテて周りを見返してやりたいという感じで努力した結果が今の峰田を着実に成長させていると言ったところか。
だが、そんな事情など知る由もない上鳴と芦戸が叫ぶ。
「あんたは同族だと思ってたのにー‼?」
「お前みたいなやつはバカで初めて愛嬌が出るってもんだろ!? どこ層にお前みたいなやつが需要があるんだよ!?」
なかなかに酷い罵倒である。
だが、それでも峰田は余裕を崩さずに一言、
「〝世界〟、かな……?」
そう言いきる。
こいつ、改めて言うが意外と油断ならないぞ
「「(変態が何言ってんだよ…)」」
出久と心操だけは峰田に呆れていた
「芦戸さん、上鳴。が、頑張ろう?みんなで林間合宿行こう!」
「うむ!」
「普通に授業を受けていれば赤点なんて取る事なんてないだろ……?」
緑谷出久……３／２０位。
飯田天哉……２／２０位。
轟焦凍……５／２０位。
励ます出久に飯田と轟も続く。
順位を見れば分かるだろうが、特に三人は真面目な層なので点数は悪くないのだ。
だが、今の上鳴にはそんな三人の言葉はあまりにも酷であったために、
「言葉には気を付けろー‼?お前らと同じ頭脳だったら苦労してねーんだよー‼?」

嘆きのレベルが半端なかった。
そこに静かにある生徒が言葉を発した。
八百万百……１／２０位。
「お二人とも……座学であるのでしたら、わたくしがお力添えできるかもしれません」
「ヤオモモーーー!!」
「演習の方は……その、からっきしでしょうけども……」
「上鳴と芦戸じゃないけど、ウチもちょっと二次関数で詰まってるところがあるんだけど、いいかな……？」
「俺もいいか？古文がちょっと厳しいんだ」
「俺もお願いできるかな……」
耳郎響香……７／２０位。
瀬呂範太……１７／２０位。
尾白猿夫……８／２０位。
三人がそう言って頼ってきたので八百万も頼られている事に嬉しさを感じて、
「良いですとも‼？」
と、絶賛フィーバー状態であった。それを見ていた切島は、
「これが人徳の差よ……」
「そうか？」
「まぁ、お前ら二人とも頭いいもんなー。頼むわ」
切島鋭児郎……１５／２０位。
心操……４／２０位。
ちなみに障子目蔵と青山優雅の二人はと言うと、
障子目蔵……１０／２０位。
青山優雅……１８／２０位。
「まぁ、なんとかなるか……」
「（誰かに教わりたいけど、そこは僕！自身で乗り越えないとね☆）」
と、一人で頑張るつもりであった。
「（筆記試験は大丈夫そうだが問題は実技試験だ…嫌な予感がするな）」

「(奇遇だな緑谷…俺もだ)」
出久と心操は実技試験は変更があると密かに感じていたのだった
試験当日八百万のおかげもあり筆記試験は無事に終わり上鳴と芦戸は八百万に感謝していたとか

実戦形式試験

そして期末試験当日
生徒全員はコスチュームに着替えて駐車場広場へと集まっていた。
暫くすると期末試験担当の教師たちがやってきた。耳郎はやってきた先生の数を見て思わず「多い……」と呟く。そう、見える限りでは相澤と、他には13号、プレゼント・マイク、エクトプラズム、ミッドナイト、スナイプ、セメントス、パワーローダーの姿があったのだ。
「よーし……お前らよく集まったな。それじゃさっそくだが演習試験を始めて行く。この試験でも筆記試験同様にしっかりと赤点もあるんだ。だからよ……林間合宿に全員揃って行きたかったら死に物狂いで合格を目指してくるんだな」
もうすでに相澤は眼を鋭くさせて生徒達を威嚇している。
そして続けざまに話す。
「お前らも情報を事前に仕入れてきてんだからどんな内容かは把握できていると思う……」
そう話す相澤。だが、そんな場で試験内容をまだ把握できていない上鳴と芦戸が、
「聞いてますよ！ロボ無双！これに尽きるってね！だから成長した俺らで倒してやりますよ！」
「そうだそうだー！そしてみんなで楽しい林間合宿ー♪」
一学期で成長した力を見せようと二人はすでに楽観的思考に入っていた。
だが、そこで相澤の布の中から校長が顔を出してきた。
「ふっふっふー……残念だったね。諸事情あって今回から試験内容を変更しちゃうのさ！」
「「……」」
それで言葉を失う上鳴と芦戸。
先生達の人数を見れば想像できるというものだが、ロボを倒して楽にクリアしようという算段は脆くも崩れさった。
「その、校長先生……変更って？」

「それはね……」
校長がそれで説明を開始する。
内容としてはやはりヴィラン連合の雄英侵入から始まるヴィランの活性化に伴い、試験内容も単調なロボ相手をするより、より実戦的な対人戦を考慮した試験内容に変更するという事。
「そういうわけさ。だから諸君にはこれから二人一組チームアップを組んで、今ここに集まっている教師の皆さんとそれぞれ戦ってほしい」
「先生方と……ッ⁉?」
それで一同は驚愕する。どう見てもあちらはこちらより格上…手加減でもしてもらわないと勝ち目は薄いだろうという事で、
「対ペアの組み合わせと対戦する教師はすでにこちらから独断で決めさせてもらっている。似た個性、傾向、成績、親密度……それらを吟味してすでにこちらで決めてあるから今からその組み合わせを説明していく。どんな組み合わせになっても文句は言うなよ?ヒーローになるって事は、知らない誰かと組む事も想定しないといけない。よってそういう意味でも事前に話すより直前で話した方が効果的ではある。合理的だろう……?」
そういう相澤の言葉に「合理的だろうか……?」と疑問に思いつつも、確かに事前に組み合わせなどできない事などヒーロー社会に出れば嫌と言うほど痛感し、分かるというものだろう。
どんなヴィランに対してどんな人と組めば対応できるのか即座の判断が要求されていく。
相性最悪なヴィランと遭遇してしまう可能性もゼロではない。
そう言った意味もこめての今回の対人戦である。
そこまで考えた一同。
そしてペアの組み合わせが公開されていく。
一回戦目
セメントス　ＶＳ　切島鋭児郎・砂藤力道ペア
二回戦目
エクトプラズム　ＶＳ　蛙吹梅雨・常闇踏陰ペア

三回戦目
パワーローダー　ＶＳ　飯田天哉・尾白猿夫ペア
四回戦目
１３号　ＶＳ　麗日お茶子・青山優雅ペア
五回戦目
校長　ＶＳ　上鳴電気・芦戸三奈ペア
六回戦目
プレゼント・マイク　ＶＳ　耳郎響香・口田甲司ペア
七回戦目
スナイプ　ＶＳ　葉隠透・障子目蔵ペア。
八回戦目
ミッドナイト　ＶＳ　瀬呂範太・峰田実ペア。
九回戦目
相澤対轟、八百万ペア
十回戦目
オールマイト対出久、心操ペア
１回戦目～９回戦目までは原作通り、そしていよいよ１０回戦目が始まる
ーーー

「そうか…オールマイトの相手は任せる。俺はその間に脱出する」
「任せとけ」
『試験スタートだよ』
「行くか」
「ああ」
　二人は試験会場に入った
　試験会場に入ってから二人は警戒しながら進んでいたその時だった
「っ！来るぞ‼？」
「来たか…！」
「スマアアア

「…やっぱり効いてないか」
　界王拳を発動して威力を上げたかめはめ波を直撃してもオールマイトはピンピンしていた
「なら！界王拳…　２０倍だぁぁぁぁぁぁぁ‼？」
ギュイイイイイン
　出久は界王拳を２０倍まで上げた
「だらぁぁぁぁ‼？」
「速い⁉？」
　ドゴォ！
「ぐ⁉？今のは効いたね！」
　ドゴォオオオオ‼？
「ぐぁぁぁぁ⁉？２０倍でも駄目なのかよ‼？」
　オールマイトに一撃を与えたが対して効かず出久は反撃を受けてしまった
「仕方がねぇ…身体がぶっ壊れるかもしれないがもってくれよ？界王拳…３０倍だぁぁぁぁぁぁぁ‼？」
ギュイイイイイン
　赤いオーラが更に上がった
「更に上げた⁉？」
「行くぞぉぉぉ‼？」
　シュン‼？
「な⁉？何処に行っ［ドゴォオオオ］ぐぁぁぁぁ⁉？」
　オールマイトは姿が消えた出久を探したが気づいた時は蹴り飛ばされていた
「だらららららららら‼？」
　ドガガガガガガガガガ‼？
「ガードが追いつかない⁉？」
「これで終わ…ぐぅ⁉？」ガクッ
　必殺技を放とうとした出久だが界王拳の反動がきたのか片膝をついてしまった
「隙ができたよ緑谷ｓ『緑谷、心操ペア条件達成だよ』あれ⁉？」

「俺一人に時間をかけ過ぎましたねオールマイト」
「やられたよ緑谷少年」
こうして出久と心操は無事に実戦形式の試験は合格したのだった

二人の英雄編
出久は最強の地球人二人の英雄‼?

飛行機内

「ｚｚｚ」

「緑谷少年そろそろ着くよ」

「ん?あ、オールマイト」

「ぐっすりと寝てたね。外を見てごらん」

「あれがＩ・アイランドですか」

数週間前

「Ｉ・アイランドに来てほしい?」

「私の友人が君に会いたいと言ってるからねチケットも二枚あるし」

「オールマイトの友人ですか・・・分かりました。用事も無いですし行きましょう」

「すまないね」

入国審査

「Ｉ・アイランドがこのような構造になっているのは何故か知っているかい?」

「知ってますよ世界中の有能な科学者を集めて個性の研究やヒーローアイテムの開発を行ったり移動式なのは特定の場所だとヴィランとか、特に大きな組織から狙われると聞きますけどここの警備システムはタルタロスに匹敵するほど強固なんですよね?」

「詳しいね」

「事前に調べましたからね」

空港の外

「賑やかですね」

「ようこそ、Ｉアイランドへ・・・ オールマイト!?」

「え、マジ!?オールマイト!?」

「凄え!!本物だ!・・・ って、横の緑色の髪のやつは・・・ 体育祭の優勝者!?」

「保須で大活躍したヒーロー名カカロットが⁉？何で２人が！」
「ひとまず激レアの光景だ!!写真とサインを!!」
　人々が出久とオールマイトに押し寄せてくる
「押し寄せてきたぁ⁉？」
「こういうのを対応するのもヒーローだよ！さあくるよ!!」
「「「キャァァァァ!!!!」」」
「ＨＡＨＡＨＡ！サインは順番にね!!」
「落ち着いてぇ‼？」
　出久とオールマイトはサインや写真撮影会をした。
「つ、疲れた」ゲッソリ
「流石の緑谷少年も疲れたか」
「まさかファンがいるとは思ってもみなかったですよ」
「まさかここまでとは・・・ 待ち合わせに遅れてしまうところだった・・・」
「待ち合わせ？」
「ああ、古くからの友人がいてね」
「おじさま～」
「おお！来た！」
　少女はオールマイトに飛さび込んだ
「おっと！大きくなったな！メリッサ！しかし見違えたな、もうすっかり大人の女性だ」
「１７歳になりました、昔と違って重いでしょう？」
「なんのなんの！」
「マイトおじさまは相変わらずお元気そうでよかった。」
「(この人がオールマイトの知り合い？いや…〟おじさま〟と言ったから知り合いの娘さんか…」
「それでデイヴは？」
「ふふっ・・・ 研究所にいるわ。長年やって来た研究が一段落したらしくって、それでお祝いとサプライズを兼ねてマイトおじさまをこの島に招待したってわけ。」
「そう言うことか。ちなみに今回デイヴはどんな研究を？」

「それが、守秘義務があるからって私にも教えてくれないの」
「科学者も大変だな・・・」
「あのオールマイト・・・ 彼女は？」
「ああ、すまない。彼女は私の親友の娘の・・・」
「メリッサ・シールドです。メリッサって呼んでください」
「僕は緑谷出久です。」
「緑谷君て確か体育祭で優勝したんですよね？すごいですね」
「ゴホン・・・ メリッサそろそろ」
「あっ！そうでしたね！じゃあ行きましょう！」
　メリッサはホッピングのボタンを押すと、紐のようになった
「形状記憶！凄いな…この子も天才だね（ベジータさんの奥さんであるブルマさんと気が合いそうだ）」
　研究施設
「デイヴィット博士。こちらの片付けも終わりました」
「そうか。ご苦労様、サム」
「たまにはお嬢さんとランチに行ってはどうですか？」
「今日も学校に行ってるよ」
「I・エキスポ中は休校では？」
「自主的に研究しているんだよ」
「だってパパの娘ですもの」
「メリッサ」
「こんにちは、メリッサさん」
「こんにちは、サムさん。いつも研究に明け暮れるパパの面倒を見てくれてありがとう」
「まいったまいった。それよりどうしてここに？」
　するとメリッサは悪戯らな笑みを浮かべる
「私ね、パパの研究が一段落したお祝いにある人に招待状を送ったの」
「ある人？」
「パパの大好きな人」
「私がぁぁぁ、再会の感動に震えながら来た!!」
　突然現れポーズを決めるオールマイトに二人は驚きのあまり固

まってしまった
「トシ・・・ オールマイト・・・ !?」
「ほ、本物!?」
「ＨＡＨＡＨＡ！わざわざ会いに来てやったぞデイヴ！」
「どう、驚いた？」
「あ、ああ・・・ 驚いたとも・・・」
デイヴィッドは笑みを浮かべた
「お互い、メリッサに感謝だな。しかし何年ぶりだ？」
デ「やめてくれ、お互い考えたくないだろ。年齢のことは」
「ＨＡＨＡＨＡ、同感だ！」
「・・・ 会えて嬉しいよ、デイヴ」
「私もだよ、オールマイト」
そしてオールマイトは出久の方を向き
「緑谷少年、彼は」
「私はデイヴィッド・シールドだ個性研究のトップランナーでオールマイトのアメリカ時代からのコスチュームの開発をしてたんだ君にも会いたかったよ」
「僕もですよデイブさん」
「・・・ すまないが、トシと少し話をしたいんだ。メリッサ、彼の案内お願いできるかい？サムも休んで良いから」
「ええ、じゃあ行きましょうか」
「では博士、失礼します」
３人が出て行った
「・・・ どうなんだ今は・・・」
「問題ないよ緑谷少年のおかげで古傷は治ったんだ」
「!?・・・ そうか・・・ でも一応検査しよう」
エキスポ会場
「人口の島とは思えない構造だね」
「大都市にあるものは一通りにあるからね。できないのは旅行くらい」
「メリッサさんは個性があるんですか？」

「私はね…個性がないんだ」
「そうですか。辛かったですか？」
「個性が無くても研究が私の生き甲斐なの」
「まぁ俺も個性がないけど修行したから力を得たけどね」
「そうなんだ」
　エキスポを見回っているとクラスメイト達に出会った
「緑谷君も来ていたんだな」
「（流石にオールマイトに誘われて来た事は言えないからね）プライベートで来たからな」
　歩いていると装置みたいなのが見えてきた
「これはなんですか？メリッサさん」
「これはヴィラン・アタックよ。どれだけ早く仮想ヴィランを全て倒せるか競うものよ」
「面白そうだな…ヴィラン　アタックやります」
「分かりましたって貴方は⁉？」
「いっちょやるかぁ！　界王拳‼？」
　ギュィィィィィン‼？
　出久は界王拳を発動した
「かめはめ…波ぁぁぁぁぁぁぁぁ‼？」
ドガァァァァァァァァァァン‼？
「記録は…０．５秒⁉？仮装敵が一瞬で破壊されました‼？」
「次は俺がやる」
『ヴィラン・アタックスタート』
「はぁぁぁぁぁぁ‼？」
　ドガガガガガガガガガガガ‼？
　心操は一気に加速して仮装敵と距離を詰めて打撃を叩き込み空へ打ち上げた
「魔空包囲弾‼？」
　ババババババ‼？
　大量の気弾を放ち仮装敵を取り囲んだ
「くらえぇぇぇぇ‼？」

ボボボボボボボボ！ボォォォォォォォォン‼？
「記録は8秒！第2位です」
そしてパーティ開催前
「あれ…切島と瀬呂は？」
「本当だ！一体何処にいるんだ？」
その頃の切島達
「此処は何処だ？」
「切島…まさか？」
「迷ったぁぁぁぁ‼？」
「迷ったのかよぉぉぉぉぉ‼？」（大汗）
迷子になっていた
「仕方がないパーティ会場に向かうか」
「お待たせ！みんなごめんね」
「これで集まったな！皆行こう」
「そうだね。じゃあ会場に［ウゥー！］っ!?」
突然、ロビーのシャッターが閉まり始めた
「これは?!」
「ドアが開かない⁉？」
「エレベーターも動かないぞ！」
「どう思いますか緑谷さん」
「そうだな…考えると何者かに乗っ取られた可能性があるね」
「まじかよ」
「メリッサさん、ここには防犯システムとかありますか？」
「ええ、メインコンピュータで制御を」
「じゃあそこをやられたとしか」
「しかしヒーローもいる中で、どうやってそこに」
「とりあえず向かうか。非常階段なら大丈夫だしな」
ーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーー
ーーーーーー
ーーー

ー

パーティ会場に一足早く着いた出久は意識を集中して気の探知をしてパーティ会場の中の話しを聞き始めた。

「(どうやら乗っ取ったのはウォルフラムと言うヴィランらしいな…ん?何か聞こえるな」

「デイヴィッド博士、我々と来てもらおう。あと、そこにいるサム博士も」

「目的は何だ!」

するとウォルフラムはデイヴの耳の近くで囁いた

「お前がよく知っているはずだ…」

「なっ!?(何故だ!?あの計画は中止にして連絡した筈…!それに入れる筈も…誰かがこの計画を続行させた…これを知っているのは…)サム!?お前が!」

「…すいません…博士。でも貴方が悪いんです。黙って従ってもらいますよ」

「くっ…!」

ーーー

出久達は脱出する事が不可能なので制御室を取り戻す為に最上階に向かった

「(オールマイト俺達に任せて下さい)」

「(頼むぞ！緑谷少年‼？)」

奪還作戦の開始だ

出久は最強の地球人二人の英雄!!?後編

出久達は順調に階段を登っていた
「メリッサさん今居る階は３０階ですが最上階は？」
「はぁ、はぁ。に、２００階よ」
「ま、まじかよ一気に行くのか!?？」
「ヴィランと出会すよりましだからな」
「メリッサさん辛そうですが大丈夫ですか？」
「大丈夫よ」
その後も一行は６０階、７０階と順調に登っていった。だが、８０階に差し掛かった時……。
ガシャアン！
「し、シャッターが！」
「やっぱり最低限の防御は固めているね」
「じゃあこっから行けば良いじゃん」
「ダメ!!」
しかし峰田は開けてしまった
「バカ！」
「へ!?」
「敵に居場所がバレた可能性があるな。仕方がない危険だけど進むしかない」
「ここは・・・ 庭？」
「ここは植物プラント、個性の影響を受けたもののね」
「っ!?みんな隠れて！エレベーターで誰か来る！」
全員、草むらに隠れた
エレベーターからは４人の男が出てきた。数は小さい男×２、大きい男×２で合計四人だ
「見つけたぞ、ガキども！」
「っ!?？」
「へ!?俺らなんかしました!?」
「何でここに・・・？」

そこには遅れて合流できなかった、切島、瀬呂がいた
「お前らここで何してる！」
「あのぉ・・・　俺たちに道に迷って、レセプション会場はどこに行けばいいですか？」
「（おい、そいつは明らかに敵だぞ⁉？切島⁉？）」
「迷子になったのか」
「迷ったのは切島だけどな」
「方向音痴は切島だったのか」
「あんたら招待客やスタッフじゃねぇな⁉？」
「今の状況を考えればそうに決まってんだろ！嘘ついてんじゃねぇ!!」ブンッ！
「させるか⁉？」
　ボォォォン⁉？
　ドガァン
「グハァ⁉？」
　ドサ
　出久が気弾を放ち切島達を守った
「緑谷⁉？」
「お前ら⁉？何で！」
「話は後だ！ヴィランに占領されたんだ！」
「ヴィラン⁉？」
「ぞろぞろ出てきやがって!!全員ここでぶっ潰してやる！」
「ウォォォォォォ!!!」
　大きいヴィランは個性でさらに大きくなった
「ここは私達が！緑谷ちゃんやメリッサさんは上へ！」
「ここは俺らが・・・　！」
「イクゼ！」
「障子君！君の個性は先に必要だ！僕たちと来て！」
「ああ！」
　ここに残るのは蛙吹、常闇、芦戸、葉隠、尾白、切島、瀬呂。
「・・・　ありがとう、先に行こう。轟君、氷柱を出せるよね？それで上に

いこう！」
「ああ！上に行く組は俺の近くに！」
　轟は氷柱を出し上に向かう
「任せたぞ！」
「無理はするなよ！」
「行かせるか！」
「おっと！行かせるかよ」
　敵が追いかけようとしたが瀬呂のテープで足を巻かれ
「おりゃぁぁぁぁ⁉？」ブン！ブン！
「なぁぁぁぁ⁉？」
　ドガァァァァァン
「ガハァ⁉？」
　ドサ
「どんなもんだい！」
「おらおらぁ⁉？」
「ぐっガァ⁉？」
「尾白今だ！」
「任せろ！はぁ⁉？」
　尻尾で敵２の脇腹に叩き込んだ
「ガァ⁉？」
　ドサ
「ダークシャドウ!!」
「アイヨ!!キメルゼ!!」
「させるかぁ!!」
「とりゃあ!!」
　芦戸は敵３の足に酸をぶちまけた
「い、いてぇ！足が！」
「梅雨ちゃん決めて！」
「ケロォ！」
「ぐはぁ！」
「俺以外全滅⁉？」

「後はお前だけだ！」
「行け！ダークシャドウ‼？」
「アイヨ！」
「ぐはぁ！」
　ドサ
「これで全部か。瀬呂此奴らの拘束を」
「おう」シュルシュル
　瀬呂は敵達をテープで拘束した
ーーー

障子
「レシプロバースト!!」
「近づくんじゃねぇぇぇ!!!」
八百万は大砲と玉を作り、耳郎は発射していた
「えい☆」
「人数が結構いる分、何とか…」
「しかし俺たちのスタミナが… お前もエンジンが」
「まだいけるさ！緑谷君達が進んでいるんだ、負けてはいけない！」
「解除… ！まだ集まってくるんか！」
「お前らどけ!!」一気に決めるぜ！」
「バカ！やめろ！」
「１３０万Ｖ!!!」
バリバリバリバリバリ‼?
上鳴は最大出力の放電をしたが、警備ロボットは防いでしまった
「ウェーイ!?」
「アホ!!」
ーーーーーーーーー
ーーー
ー
「大分進んだけど… これは」
出久達は１８０階の風力発電システムに来ていた
「このままだと警備ロボットに捕まるから非常階段で」
「なら舞空術で行くしかないな…メリッサさんつかまってくれ」
出久は舞空術で１８０階の非常階段まで飛んだ
「よし着いた。行こう！」
「こっちよ！」
出久達は階段を登っていると、腕をナイフに変えたヴィランが襲いかかってきた
「キャ！」
「させるか‼?」
ガキィィン‼?

轟は個性氷の盾を出して塞ぎ
「おらぁ‼?」
「ガハァ⁉?」
ドサ
心操が一撃を入れ気絶させた
出久達は敵をなぎ払い２００階に到達した
「よし！メリッサさん制御室は？」
「こっち！」
「緑谷！あっちから声が！」
「・・・ 博士の声が・・・ ！行こう！」
４人は声の聞こえる方に走った
「あそこは保管室！」
「保管室？」
「発明品や資料を保管しているわ」
「じゃあ、ヴィランはそれらを盗むために！」
出久はその部屋の中を覗いた
「これでいいだろ！この場所を解放しろ！」
「これが個性を増幅させる・・・ ！さすが博士だな」
「おい！」
「お前にはまだやる事がある。おい」
「言うことを聞いてください」
サムはデイヴに銃を向ける
「パパ！」
「メリッサ⁉」
「メリッサさん！くそっ!!」
「任せろ！界王拳２倍‼?」
界王拳２倍を発動して高速で動き下っ端とサムを倒した
「大丈夫ですか？」
「す、すまない緑谷君」
「役立たずが・・・ まあいい」
「お前の目的はなんだ！」

「頼まれたんだよ。そこのデイヴィッド博士にな！」
「パパが・・・ !?」
「・・・」
「いや、元依頼人だな。今の依頼人はそこに倒れてるサムってやつだ」
「だから簡単にここを・・・ ！」
「どういうことなの!?パパ、どうして！」
「この発明品を手にれるためだ・・・」
「え!?」
「これはまだ試作段階だが、この装置を使えば薬品などとは違い、人体に影響を与えずに個性を増幅させることが出来るんだ」
「個性を⁉？」
「しかしこの発明と研究データはスポンサーによって没収。研究そのものを凍結された。このことが世界に公表されれば、超人社会の構造は激変する。それを恐れた各国政府が圧力を掛けて来た・・・ だから・・・」
「でもどうして！」
「オールマイトの為だ・・・ ！彼はどんどん衰えていっている・・・ このままじゃ平和の象徴が消えてしまうと思って・・・ でも、まだ希望はある！」
「・・・・・」
「だからこんな事をやめた！だがサムは裏切ってこいつらに指示していた・・・ ！」
「そういう事だ!!」
　ウォルフラムは個性で床を動かした
「キャァ!!」
「うわ⁉？」
「な⁉？足場が⁉？」
「くっ⁉？」
　床が動きバランスを崩したデイヴィットはウォフラムの所まで行ってしまった
「やめろ！ウォルフラム⁉？」

出久はウォルフラムに近づこうとしたが
「あのままだとあの女が危ないぞ！」
「な⁉？くそっ!!」
「さて、きてもらうぞ博士」
ウォルフラムはデイヴを連れて、逃走した
「くそ！逃げられたか！メリッサさん俺が追うのでコントロールルームへ！博士は必ず連れ戻す‼？轟君と心操君は一緒に着いて行ってくれ…まだヴィランがいる可能性があるからな」
「わ、分かったわ！」
「分かった」
「無理はすんなよ？」
轟、心操とメリッサはコントロールルームへ向かい出久はウォルフラムを追った
「やった！これで！」
メリッサはシステムを元に戻すことに成功した
「成功したな」
「そうみたいだな」

「動かなくなった！」
「やった・・・ううっやり過ぎてお腹が！…」
「助かったぁぁぁ!!」
「でもまだヴィランが捕まってません！」
「おーい！」
「皆んな～」
「無事だったか！お前ら‼？」
「皆！もう少しだ行くぞ‼？」
「「「おおーーー‼？」」」
「拘束が解けた・・・ !?」
会場のヒーロー達の拘束が解け、ヒーロー達がその場のヴィランを倒していく
「そうだ、デイヴを!!［ブッー！ブッー！］電話？」

『マイトおじ様！』
「メリッサ!?まさか君が!?」
『私だけじゃないです！A組の全員で！』
「彼らが・・・！」
『それでヴィランにパパが連れ去られて！今、緑谷君が！』
「分かった・・・！私が行く!!」
　屋上
「ヘリでさっさと行くぞ」
「はっ！」
「離せ・・・！」
「諦めろ」
「博士!!」
「来たか・・・」
「博士を返してもらうぞ‼?」
「ならあの方から貰ったこれを使うか」
　ウォルフラムは豆のような物を数粒地面に落としたすると地面が盛り上がり黄緑色のモンスターが現れた
「さ、栽培マン⁉?」
「「「クケェェェ‼?」」」
「時間稼ぎをしろ出せ!!」
　ヘリが飛んでいく
「邪魔をするな！かめはめ…波ぁぁぁぁぁぁぁ‼?」
　ドオオオオオオン
「「「ぎ、ギィィィィ」」」
　栽培マンは全滅した
「パパ!!」
「メリッサ・・・！」
「あの女がシステムを」
　ウォルフラムはメリッサに個性で攻撃を仕掛けた
「やめろぉぉ!!」
「させるかぁ！3倍界王拳‼?」

ドガァァァァァァァン
「くたばったか」
「間一髪だった…」
なんとか出久が間に合いメリッサを救い再び出久はヘリを追いかけた
「そのまま近づくと撃つぞ」
「それはどうかな？」
ゴオオオオオオ
「親友を返して貰うぞ！敵よ‼？」
オールマイトが現れヘリを攻撃して墜落する寸前にオールマイトがデイブを救った
「パパ！良かった…！」
「オールマイト…」
「もう大丈夫さ。… 緑谷少［ガッシャーン!!!］ぐっ!?なんだ!?」
「ぐぁぁぁ!!!」
「パパ、キャァ！」
「あぶねぇ‼？」
「デイヴ!!」
デイヴは金属の塊に取り込まれた
「金属の塊!?じゃああのヴィランが！」
「これがデイヴィッド・シールドの発明品か!!」
ウォルフラムはデイヴの発明品を使い、個性を発動していた
「これがパパの… !?」
出久はメリッサを遠い場所に連れて行った
「ここにいて!!俺とオールマイトで！」
金属の塊がオールマイトを襲う
「テキサス… スマァァッシュ!!!」
オールマイトが技を繰り出したが、壊れなかった
「オールマイトが力負け!?」
「何!?［ガンッ！］ぐっ!?」
オールマイトに金属の柱が次々に襲いかかる

「気円斬‼?」
　出久は気円斬で金属の柱を切った
「オールマイト！今のうちに相手の懐に！ヴィランに攻撃を！」
「ああ！行くぞ!!」
　出久に援護されたオールマイトはウォルフラムに近づいて行った
「覚悟しろ！ヴィランよ!!」
　オールマイトはウォルフラムに攻撃を決めようとしたが
　バシッ!!
「な⁉?」
　オールマイトは紐のようなもので止められてしまった
「オールマイト！［ギュン！］くそっ！金属だらけのこの場所じゃ数が・・・　！」
「ふんっ！」
　ウォルフラムはオールマイトの首を絞めつけた
「ぐぐっ・・・　！筋力増強・・・　!?複数の個性！」
「ああ、あのお方は今回の事を協力してくれたのだ」
「あのお方だと・・・　!?」
「ふっ・・・」
　オールマイトの頭には憎っくき者の姿が浮かんだ。個性の譲渡・・・奴にしか出来ない芸当・・・
「オール・フォー・ワン・・・　!!!」
「オールマイト‼?」
　出久は紐を切りオールマイトを救った
「すまないね緑谷少年」
「必ず奴を倒しましょう‼?」
「勿論だ‼?」
「緑谷‼?」
「轟君！いい所に来たね」
「援護するぞ」
「サンキュー」
　加勢に来た轟と出久、オールマイトはウォルフラムに向かって走り

出した
「無駄な事を」
ウォルフラムは個性で攻撃しようとしたが
「轟君!!?」
「任せろ!!?」
ボォォォ!!?
轟が個性で炎を出し
「くらえ!太陽拳!!?」
ピカァァ!!?
「ぐぁぁぁ!?目が!」
ウォルフラムに太陽拳で目眩しをして
「はぁぁぁぁぁぁ!魔貫光殺砲!!?」
出久が魔貫光殺砲でウォルフラムが付けている装置を破壊した
「な!?そ、装置が!!?」
装置を破壊されウォルフラムは通常の力しか発揮出来なかった。
そしてオールマイトも出久に援護されながらウォルフラムにダメージを与えていた
「お前らは何者だ!?」
「何者?」
「俺達はヒーローだ!!?」
そして飯田達も屋上に到着した
「緑谷!」
「オールマイトと一緒に闘っているぞ!!?」
「「「「いっけぇぇぇぇぇぇぇ!!!!」」」」
「更に向こうへ!!?」
「「プルスウルトラァァァァ!!?」」
「ぐぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!?」
二人の技が決まりウォルフラムは落下した
デイブが壊れた金属から出て目を開けると朝日に照らされた出久の姿がありデイヴには昔のオールマイトに見えた。数日後ウォルフラムは駆けつけたヒーローと警察に逮捕されデイブ博士も短期間の

間だけ刑務所に入る事になった。

こうして出久達はＩ・アイランドを救ったのだった

林間合宿編

林間合宿開始

　無事に期末試験は終わったが落ちたのは、芦戸、上鳴、切島、砂藤、瀬呂、物間だった。
「これじゃ林間合宿行けねぇな……。」
「みんな……私たちの分まで楽しんできてね……お土産話、楽しみにしてるから……。」
「ハッハッハ！こおれだからA組はぁ！B組は僕以外、誰一人として落ちて無ｉ［ガッ！］へぶっ！」カクン
　独特なポーズでA組を見下す（？）物間。それを拳藤が手刀で気絶させるいつものパターンだ。
「まったく、本当にアンタは……落ちたの自分だけとかよく言えるわ……。」
「堂々と言えるあたり、お前のメンタルの強さを尊敬するわ」
　ガラガラッ
「おし、全員いるな。ブラド。」
「ああ……では、合同ＨＲを始める。」
　今回、一年のヒーロー科は合同ＨＲより、ミーティングルームに来ていた。
「えー、今回の期末試験だが、筆記の方に赤点はいなかった。しかし……残念なことに、実演の方で何名か赤点が出てしまったようだ。よって……。」
　相澤の次の言葉に生徒たちの緊張が高まった。
「林間合宿には全員で行くことになった。」
「「まさかのどんでん返しキターーー!!」」
　赤点を食らった生徒たちが泣いて喜んだ。
「ただし、今回の試験で赤点を取った者は毎晩補習地獄だ……今のうちに覚悟しとけ……！」
　相澤が凄みを効かせて警告した。

「まぁ……。」
「そうなるよな……。」
「いいじゃんいいじゃん！行けるだけまだいいよ！精一杯楽しもー！」
「……そうだな！」
「林間合宿！絶対に思い出作るぞー！」
「「「おおーーーーーー!!!!」」」

このときの彼らは、楽しい思い出となるはずの林間合宿が忘れられない悪夢になるだなんて、思いもしなかった……。
とうとう林間合宿初日がやってきた。
物間が煽ってきたが
「いい加減にしろよ？クソ狸」（威圧）
「ひぃ⁉？」
出久がベジータ譲りの威圧を出して強制的に黙らせた
「ごめんな」
「いや、いいって」
「相変わらずだな～物間」
謝ったのはB組の姉御、拳藤一佳。A組とB組が集まると、大抵挑発する物間だが、毎度毎度拳藤に黙らせられていた。A組のメンバーもすっかり慣れたものだ。
残りのA組B組がそれぞれ分かれてバスに乗ると、学生らしく早速ワイワイガヤガヤ賑やかとなる。
「一時間後に一回止まる。その後はしばらく……」
「音楽流そうぜ！　夏っぽいの！　チューブだチューブ！」

「バッカ夏といや、キャロルの夏の終わりだぜ！」
「ポッキー頂戴」
「席は立つべからず！　べからずなんだ皆!!」
「しりとりのり！」
「りそな銀行！う！」
「ウン十万円」
「終わるのかよ⁉？」
　ヒーロー科とは思えない、実に賑やかな光景だ。その光景に相澤先生は呆れるが、騒げるのは今のうちだけだと見逃す。どうせ、この林間合宿の間は休まる間も無いのだ。
　一時間後、到着したのは山中のとある広場。パーキングと言うよりも単なる空き地である。
「休憩だ――……」
「おしっこおしっこ……」
　それぞれ体をほぐす中、峰田だけがトイレを探し回るが、何処にもない。
「つか何ここ。パーキングじゃなくね？」
「ねぇアレ？Ｂ組は？」
「お……おしっこ……トトトトイレは……」
　戸惑う皆に、マイペースな相澤先生。
「よ～～～う、イレイザー!!」
「ご無沙汰してます」
　そこへ現れたのは、４人のヒーローと、一人の少年。
「煌めく眼でロックオン！」
「キュートにキュートにスティンガー！」
『ワイルド・ワイルド・プッシーキャッツ！』
　決めポーズを取るのは、プッシーキャッツ四人である。
「今回お世話になるプロヒーロー「プッシーキャッツ」の皆さんだ」
「連名事務所を構える四名一チームのヒーロー集団！山岳救助を得意とするベテランチームだキャリアは１２年になるな」
「心は１８‼？」

「事実だろうが」
　ピクシーボブが攻撃しようとしたが出久はあっさりと避けた
「ここら一体は私らの所有地なんだけどね。あんたらの宿泊施設はあの山の麓ね」
『遠ッ!!』
　と、クソ遠い山を示すマンダレイ。
「え……？じゃあ何でこんな半端な所に……」
「いやいや……」
「バス……戻ろうか……な？早く……」
　嫌な予感がするクラスメイト達。だが、もう遅い
「今は９時３０分。早ければぁ……１２時前後かしらん」
「ダメだ……おい……」
「戻ろう！」
「バスにもどれ!!　早く!!」
「１２時３０分までにたどり着けなかったキティはお昼抜きね」
「わるいね諸君。合宿はもう、始まっている」
　と、ピクシーボブが個性を使う。大量の土砂に、クラスメイト全員が吹き飛ばされた…が
「危なかった」
「ギリギリだったな」
「習得しといて正解だった」
　出久、心操、轟は舞空術で避けていたので土砂に吹き飛ばされなかったのだ
「え⁉？」
「嘘⁉？」
「な⁉？」
「空を飛んでる⁉？」
　プッシーキャッツ達は避けられた事じゃなく空中に浮かんでいる出久達に驚いていた
「緑谷、心操、轟避けるな…」
「仕方がないじゃないですか…危険を察知したんですから」

「飛んで行くのはありですか？」
「駄目に決まってるだろ。早く行け」
　出久達は飛んで行こうとしたが相澤からは却下され飯田達の後を追った
ーーーーーーーーーーー
ーーーーーー
ーーー
　午前１１時３０分。くたくたになった１―Ａ一同は、ようやく山の麓の合宿施設についた。
「おお～速いね～」
　ニャハハと笑っているピクシーボブにマンダレイ。しかし、想像以上の速さに驚いていた。
「や、やっと……着いた」
「腹減った……死ぬ」
　ぐったり恨めしそうな瀬呂に、スタミナを消費しまくった切島がクラスを代表して感情を表現するが、プッシーキャッツの二人は悪びれない。
「悪いね。私達ならって意味。アレ」
「実力差自慢の為か……」
「やらしいな！」
「ねこねこねこ……でも正直、日が沈む頃になると思ってた。あなた達、本当に凄い」
　本当に驚いて、称賛するピクシーボブにマンダレイ。プロヒーローでも手こずる道だと言うのに、２０人いるとは言えよくこの速さでたどり着けたものだ。
「私の土魔獣が思ったより簡単に攻略されちゃった。いいよ君ら……特に、そこの３人。新聞も賑わせてたし、躊躇の無さはその経験によるものよね」
　と、緑谷・飯田・轟・を見るピクシーボブ
「三年後が楽しみ！ツバつけとこ――ー‼？」
「な⁉？」

「っ⁉？」
「唾かけんな⁉？　汚ねぇ！」
「いい年した人が何を言ってんだよ」
　出久、心操は避けて正論を言ったが轟、飯田に被害がきた
「ピクシーボブ……あんな感じだったか？」
「彼女焦ってるの。適齢期的なアレで」
「言っときますが俺は年増には興味ないんで」
「同感だ」
「誰が年増よ⁉？」（激怒）
「うるせぇよキャリア１２年が」
「適齢期と言えば・・・・・その帽子被ってる彼はどなたのお子さんですか？」
　マンダレイから少し離れた所で一年Ａ組の方を侮蔑と嫌悪の入り混じった視線を隠す気も無くぶつけている少年へ目を向けた。
「ああ、違う違う。この子は出水洸汰。従弟の子なのよ。ほら、挨拶しなさい、一週間一緒に過ごすんだから」
「洸汰君だっけ？よろしくな」
　片膝をついて目線を合わせると、手を差し出した。
　しかし洸汰は出久の手を払い除け
「ヒーローになりたい連中なんかとつるむ気はねえよ」
「つるむ⁉？いくつだ君⁉？」
　飯田が洸汰の態度に怒っていたが洸汰は黙って去った
「初期の轟みたいだな」
「俺はあんな感じだったのか？」
「（初期のベジータさんみたいだなぁ）」
　洸汰の態度に心操は初期の轟みたいだと言い轟はそれに戸惑っていて出久は師匠（悟空）のライバルであるベジータに似ていると感じていたのだった
　その後疲れを癒す為露天風呂に入り峰田が女湯の壁を登ろうとしたが心操が峰田を洗脳して覗きを防いだ

地獄のトレーニング林間合宿

「本日から本格的に強化合宿を始める。合宿の目的は全員の強化及びそれによる仮免の取得。具体的になりつつある敵意に立ち向かうための準備だ。心して望むように。という訳で・・・ 緑谷こいつを飛ばしてみろ」

「これは、……体力テストの……」

　出久が受け取ったのは体力テスト時の測定用ソフトボール。前回の飛距離を改めて全員に聞かせ、どれほど伸びているかを確認するためだ

「おお！成長具合か！」

「この三ヶ月色々濃かったからな！かなり伸びてんじゃねえの!?」

「んじゃあ…界王拳」

　ギュイイイイイン

　出久は界王拳を発動し

「うおらぁぁぁぁぁぁ‼?」

　ブン！

　おもいっきり投げた

「２ｋｍか…このように、約三ヶ月間様々な経験を経て確かに君らは著しく成長している。だがそれはあくまでも精神面や技術面、あとは多少の体力的な成長がメインで個性そのものは今見た通りでそこまで成長していない。だから・・・ 今日から君らの個性そのものを伸ばす。死ぬほどキツイがくれぐれも死なないように・・・ ！」

　Ａ組の特訓が始まった

　峰田はひたすらモギモギ、八百万と砂藤は甘い物を食べながら個性を発動、轟はドラム缶風呂に入り冷やしと温めを繰り返すｅｘｔｒａ…正直言って地獄であった

「来たね、Ｂ組！」

「「「「へ？」」」」

「煌く眼でロックオン！」

「猫の手、手助けやってくる！」

「どこからともなくやってくる・・・！」
「キュートにキャットにスティンガー!!」
「「「ワイルド・ワイルド・プッシーキャッツ!!」」」
プッシーキャッツが場所を作り、アドバイスし、Ａ組を見ていて虎だけ殴る蹴るの暴行と言っていたため、Ｂ組は引いていた・・・
心操と出久は組手をしていて心操は出久に話しかけながら個性を発動、出久はそれを防ぎながらやっていた
「流石だな心操…」
「お前に鍛えられたおかげさ」
「心操…我とも組手をやるぞ」
「分かりました。後でな緑谷」
「おう」
心操は虎とトレーニングをする為その場を離れた
「限界まで上げるか…３０倍界王拳!!?」
ギュイイイイィン!!?
出久は界王拳の限界を上げる為トレーニングを開始した
ーーー

〝肝試し〟という言葉に生徒のテンションは
さきほどよりかは上がった。
「こういうイベントみたいなのもしてくれるんだな……。」
「でもウチ、こういうの苦手……。」
「まぁ、合宿なんてそうそう無いしな！楽しもうぜ！皆ァ！」
「というわけだから、今は全力で訓練に励むのだぁ！」
「「イエッサァァ!!」」
その頃出久は洸汰と出会っていて自分が無個性だと話だが冷たくあしらわれてしまった
その日の特訓が終了後夕食を作って食べ、後片付けをした後は……
「腹も膨れた！皿も洗った！次はいよいよー!?」
「肝を試す時間だー！イェーイ！」
肝試しが行われるということで芦戸たちのテンションは一気にＭＡＸまで上がった。
「ゴホン、大変心苦しいが、残念な知らせがある。」
相澤が咳払いをしながら近づいてきた。
「補習組は……これから宿舎に戻って俺の補習を受けてもらう……！」
「「え……。」」バッ！
補習組の生徒たちが流れるような動きで捕縛布に巻き取られる。
「「嫌だぁ～!!」」ズルズルズル
すぐさま補習のある生徒は捕縛され、宿舎の方角へと連行されて行った。
「……ま、まぁ、楽しんでいこー！」
「「お、おー!!!」」
ザァァァ……！
森の木々が風によりざわめく……。
森林の見晴らしのいい場所で、そこには１０人の謎の集団がいた。
「おまたせ～♡準備に手間取っちゃたわぁ～♡」
「全然待ってねぇよ！遅ぇよマグ姉！」
「これ嫌です。全然可愛くないです……。」

「血が騒ぐ……！早く行こうぜ！」
「まだだよ……。一旦落ち着けよ新入り。」
「だる……。」
「全てはステインの意志の下に……！」
「仕事……仕事……！」
「さぁて、ショータイムと行こうか。」
「そこら辺のチンピラごときを集めたところでリスクが増えるだけ……。やるんだとしたら、経験豊富な少数精鋭……開闢行動隊……！」
　ボス格の死柄木弔が大きな掌の下で、顔を歪めながら笑う。
「今回はあくまで狼煙（のろし）だ……雄英の信頼を地に堕とすための、な……。思い知らせてやるんだ。アイツらの平穏は、俺たちの掌の上にあるってことをなぁ……！」
　見下ろされる、雄英の宿泊施設。果たして彼らは何をしようとしているのか？一体何のためにそのようなことを企てたのか？今はまだ、彼ら以外にその理由を知る者はいない……。しかし、この先よくないことが起きるということは明らかである。
　皆が肝試しをしている中出久は出番が来るまで待機していが
「（なんだ⁉？この嫌な気配…まさか）［ドォォォォォォォォン］森から煙⁉？」
　出久は森から煙が上がった事に驚いていた
「どうなってるんだ⁉？」
　出久は気の探知を始めた
「（な⁉？この辺りに大量の邪悪な気があるまさか…敵⁉？）」
「どうした？緑谷」
「虎さんマンダレイ、ピクシーボブ此処に敵が来ました」
「「な⁉？／え⁉？」」
「なんでヴィランが⁉？」
「そうだわ！さっきから洸汰が居ないの‼？」
「マンダレイ！俺は洸汰君の居場所を知ってます」
「そうなの？」

「はい、瞬間移動で連れてきます。ですが既にヴィランと遭遇してる可能性があります」
「分かったわ洸汰を連れてきて！出来るだけ戦わないようにして」
「善処します」
　出久は洸汰の居場所を気で探り
「見つけました！では、行ってきます」
　ピシュン‼？
　瞬間移動をした

林間合宿襲撃事件！出久ＶＳマスキュラー‼？「身体もってくれ…５０倍界王拳‼？」

出久が来る数分前洸汰は施設から離れた秘密基地にいた

『洸汰！何処にいるの？ヴィランが現れたから施設へ帰ってきて‼？』

マンダレイからテレパシーがきて洸汰はその場を離れる為基地から出た時

ピシュン！

「うわぁ⁉？」

出久が目の前に現れびっくりしていた

「此処にいたんだな洸汰君」

「お前はさっきの…」

「話は後！ヴィランが現れたから瞬間移動で施設へ連れて行くからこの場を離…お？ガキが２人……。見晴らしのいい場所を探してきてみれば……１人はリストには無かった顔だな……。」

ズシン、ズシン

「⁉」

振り向いてみると、そこには趣味の悪いマスクと黒い服を身に付けた、体つきのがっしりとした巨体の男がいた。

「お！そこの小さい方のガキんちょ！いいセンスした帽子じゃねぇか。俺のこの、ダッセェマスクと交換してくれよ。新参は納期がどうのこうのってこんなの付けさせられてて困ってんだ。」

そう言って男はマスクを外してみせた。そのマスクの下の顔は、左眼が無くなっており、顔の左側には大きな傷痕が縦に走っていた。

「う、うぁ……（アイツは……！）」

その男に恐怖を覚えたのか、洸汰君は身がすくんで、その場に尻餅を突いてしまった

「う、うわぁぁ！」ササッ

洸汰君は、尻餅を突いたまま、後退りした。

「あ、オイ！」バッ！
スタッ！
「ヒィッ！」
大男は一瞬にして洸汰君の前に回り込んだ。
「景気づけに一発やらせろや！」
「（パパ…ママ…）」
そう言って、男は腕の筋肉をさらに膨らませて、攻撃の体制を取った。
「そうはさせるか！かめはめ…波っ‼？」
ドォォォォォォォン‼？
出久がかめはめ波を放ち攻撃した
「無事か？　洸汰君」
「う、うん」
「おっと…　これは緑谷じゃねえか！獲物がここに来てくれるとはなぁ…」
「な⁉？（効いてないだと‼？）」
「お前を捕らえろと言われているんだ…　でもその前に遊ぼうぜぇ!!」
「（最悪だ…なるべく戦闘をしないように言われたのに戦うしか選択はないな…なら）四身の拳‼？」
出久は四人に分身した
「お前らは俺のクラスメイトやB組がいると思われる場所へ行ってくれ」
「「おう‼？」」
分身2人はクラスメイトやB組が居る場所へ向かった
「お前は洸汰君を連れて施設へ行って相澤先生に伝えてくれ」
「任せろ」
「あんたはどうすんだよ⁉？」
「奴と戦う」
「そんなの無理だよ！逃げようよ‼？」
「奴は見逃すと思うか？狙いは俺だしな」

「無視すんなやあぁぁぁぁ!!?」
「(月が出てるから明るいな…) 太陽拳!!?」
ピカァ!!?
「ぐぁぁ!?目がぁぁ!!?」
「今のうちだ!!?」
「おう!!?」
ピシュン!!?
分身は洸汰君を連れて施設へ瞬間移動した
「さて、やるか界王拳!!?」
ギュィィィィィン!!?
界王拳を発動した出久はマスキュラーと戦闘を開始した
ーーー

「はぁぁぁぁぁぁ!!?」
ドガガガガガガガガガガガ!!?
出久はマスキュラーへ接近して打撃を叩き込み
「ギャリック…砲!!?」
ドオオオオオオン!!?
「なんだ?その攻撃は効かねなぁ」
「な!?(20倍界王拳で威力を上げたギャリック砲だぞ!普通の敵なら倒せる威力なのにピンピンしてやがる!!?)」
「じゃあ本気の目でやるからそれでやろうぜ!!?」
マスキュラーは義眼を付け替えた
「(今まで本気でやってなかったのか!!?どうすれば良いんだ!?)考え事をしている場合か?」しまった!!?」
考え事をしていた出久はマスキュラーが目の前に接近していた事に気づかなかった
「おらぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!?」
「ぐぁぁぁぁぁぁぁ!?」
ドガァァァァァァァァァァァン!!?
出久はマスキュラーに筋肉増強した腕で殴り飛ばされ岩に叩きつけられてしまった
「ぐぅ…(身体が痛え!20倍界王拳の反動か…)」
出久は20倍界王拳を使った事により身体が悲鳴を上げるかのように激痛があった
「動かなくなったのか?くたばれぇぇぇぇぇ!!?」
再びマスキュラーが筋肉増強した腕で殴ろうとしていた
「(仕方がねぇ…身体がぶっ壊れるかもしれないがもってくれよ)界王拳… 50倍だぁぁぁぁぁぁぁ!!?」
ギュィィィィィン!!?
20倍界王拳の時より更に赤いオーラが上がった
ドガァァァァァァァァァァァン!!?
「くたばったか」
しかしその場に出久は居なかった

「な⁉？何処にいっ「こっちだウスノロ」な⁉？」
　出久はマスキュラーの背後に一瞬で移動していたのだ
「だららららららららららら⁉？」
　ドガガガガガガガガガガガガガ⁉？
「筋肉増強してんのにダメージが⁉？」
「終わりだ…　ファイナル…フラァァァァァァァァァァッシュ!!」
「ぐぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ⁉？」
ドガァァァァァァァァァァン⁉？
「」チーン
　マスキュラーは出久が放ったファイナルフラッシュにより岩に叩きつけられ気絶した
「はぁ、はぁ、ぐぅぅぅ⁉？（ヤベェな…５０倍界王拳の反動が強すぎる。気絶はさせたが目を覚ます可能性があるからこの場を早く離れるか）」
　出久はよろめきながら立ち上がりフラフラと舞空術でその場を離れた

ＶＳ開闢行動隊

「ご機嫌よろしゅう雄英高校！我ら敵連合、〝開闢行動隊〟！」
トカゲのような見た目をした男が、あらゆる刃物が束になった大剣を掲げてそう挨拶した。
「ヴィラン……!?何でここに……!?」
「外には漏れていないはずじゃあ……！」
突然のヴィラン、それも２人の来襲に生徒たちは戸惑いを隠せずにいた。
「はぁ……♡どの子から頭潰そうかしら……！」
サングラスをかけ、鉄の塊の棒のような武器を持ったオネェ口調の敵がそう口にした。
「待て待て、そう早まるなマグ姉！生殺与奪は、全てがステインの意志に
沿っているか否か……！それで決める！」
「ステインにあてられた者か……！」
「何でも良いが貴様ら……！お前らが今、攻撃しようとした女……ピクシーボブは！最近婚期を気にし始めいてなぁ……何としてでも女としての幸せを掴もうっていい歳こいて頑張ってきてたんだよ！そんな女の顔、傷モノにしようとしていたヤツが偉そうに語ってんじゃないよ！」
虎が睨みを利かせて敵たちに対して凄んだ。
「虎……。」
「ヒーローが……人並みの幸せを夢見るか！」
ズゥゥゥゥン
突如起きた地響きと共に、ヴィラン対ヒーローの戦いの火蓋が今、切られた。
「思っていたより重いパンチ……♡」
「鍛え方が、違うわぁ！」
ヴィランとヒーローとの戦闘が始まり、虎は、ヴィランの内の１人と肉弾戦を行なっていた。

「（こやつ……我のキャットコンバットの動きを読んで応戦している……！かなりの手練れという訳か……！）」
「あーん！もー近いッ！アイテム拾わせてっ！」
虎とマグネは距離を詰めて激しい攻防を繰り広げる。
「ラグドール……！逃げて……！」
ピクシーボブは脳無に襲われているラグドールを土魔獣を生成することで
サポートしていた。ラグドールの通信機は破損していたため通話はできないがゴーグル越しにピクシーボブから姿が見えていたため一応防戦できている、といった状況だ。
「しつこっ……！」
「しつこいのはお前だ！ニセモノが！早く粛清されｒ［ボォォォン‼？］ぐぁっ!?」
突如空から気弾が降ってきてスピナーの大剣が蹴り飛ばされ大きく弾かれた。
「大丈夫か⁉？皆‼？」
「緑谷君‼？」
スピナーの大剣を気弾で弾いたのは緑谷（分身）だった
「み、皆！ラグドールが……

助かってる！脳無が機能停止しているわ！」
「ええ!?」
「な、脳無が!?」
「土魔獣でどうこうできる代物じゃないはずだぞ!?」
「一体何が……まさかあの子が!?」
「皆……！」ガサッ
茂みからラグドールが顔を出した。耳の通信機は破損して、あちこち負傷しているものの、無事なようだ。
「ラグドール！無事だったのね！」
「うん！さっき……！いた！あの子があちきを助けてくれたんだ！」

「さっき振りだな。あ、そうだマンダレイ。相澤せ……イレイザーヘッドから伝言があるそうです。これを」シュッ
パシッ
「……これは？」
「無線機だ。それでイレイザーヘッドから指示を聞いて、貴方の個性、テレパスで全員にその指示を伝えてください。あと、貴方の甥っ子の洸汰君は保護しておいた……宿泊施設まで送ったのでもう大丈夫だ」

「洸汰を助けてくれてありがとう！イレイザー！」
ガガッ
ザー
『こちらイレイザーヘッド。緑谷はそこに居るな？』
「ええ。いるわ」
『よし……早速、テレパスで生徒全員に俺の名前で個性の使用を許可するよう伝えるんだ。しかし、必要最低限に、だ。あと敵の狙いは緑谷らしい……』
「ああ……身を守るにはそれで十分だろう……お願いする」
「分かったわ……。」スッ
『A組B組総員！プロヒーロー、イレイザーヘッドの名において、戦闘を許可する！ただし、不必要な戦闘は控えること！ちなみに敵の狙いは緑谷君の模様！』
マンダレイの個性、「テレパス」により生徒全員にその連絡が行き渡った。
「伝えたわ……これでよかったかしら？」
『十分だ……では、気を付けてくれ』
ガチャ
「緑谷君が狙われてるのか⁉？」
「マスキュラーがそう言ったからな俺はクラスメイト達の助けに向かう
「貴方は狙われてるのよ？安全な場所である施設へ行って！」
「施設に行っても敵が来る可能性もあるそれと油断が出来ないし施設

にいるクラスメイト達が危険だ」
「分かったわ無理はしないでね」
「ああ、飯田この事をクラスメイト達に伝えてくれ。俺は舞空術で空捜索する」
「……分かった」ブォン！
飯田はエンジンを使い他の生徒たちの安否を確認しに行った。
「（あの子は……リストに、死柄木から連れてくるよう言われていた……緑谷出久とか言う子ね。彼は何を考えているのかしら？……。）」
マグネは思考を巡らせた。
「（……さっきの地響きに私たちの思惑を知っているかのような言動……きっとマスキュラーね……彼なら色々とペラペラと喋っちゃいそうだから……。待って……マスキュラーとの通信が完全に切れたのはあの地響きが起きた時……ってことはあれがパワー負けしたってこと!?ありえない……強いとは聞いていたけどマスキュラーを倒すなんて……！）」
「（……ここは弱っているであろう今、連れ帰るどうこうよりも始末しておくべきね！）」ダッ！
自分の中で結論を出したマグネは出久に襲い掛かろうと飛び出した。
「……！止まれマグ姉！」シュッ！
スピナーはナイフを投げて、飛び出したマグネを制した。
「「「「!?」」」」
スピナーのその行動に、彼以外の全員が驚いた。マグネを援助するためにナイフを投げたのならまだ分かる。だが、彼は「止まれ」と彼女（マグネ）を制するために投げたのだ。自分の敵であるはずの相手を助けるために行動するというのは実戦では中々見られない。それも、内通ではなく、本当の敵同士では……
「っ！何すんのよスピナー！危ないじゃないの！優先殺害リストとは別に死柄木直々に、連れて来れれば連れて来いって命令が出てるのよ!?」
ナイフを目の前に投げられたマグネは怒ってそう捲し立てた。

「彼はあのステインが認めた真のヒーローの素質がある者……！俺は、そんな彼の邪魔をしたくない……！」
「良いのか？そんなことして。そっちの上に怒られたりしないのか？」
「……そんなこと構わん。俺は、ステインと……彼が認めたお前の意思を尊重したいだけだ。さぁ、進め！お前が行くであろう道に！」
「スピナー……。」
「分かったお望みどおり、行かせてもらう……お前のような信者のことはステインもそう悪く思っていないと思うぞ」
　出久は舞空術で浮かび、その場を後にした
「……悪かったな、マグ姉。」
「本ッ当よ！……でも、あくまで貴方はステインの意思を尊重しようとしたのね……。今回の件は私たちの秘密にしておきましょう……。でも流石にそろそろ退散した方がいいわね。行くわよ！」バッ！
「……ありがたい。感謝する。」バッ！
「あ、待て！」
「今回はスピナーの信仰心に助けられたわね……でも、次会うときは……ま、次なんて多分無いでしょうけど。」
　マグネたちはそう言って森の中へ消えていった。
「緑谷君…狙われているのにクラスメイト達の心配をしてるのね」
「出来ることと言えば、あの少年の無事を祈ることぐらいだろう……。」
「……そうね。さ、行きましょう。他の生徒の安全を確認しないと……。彼が洸汰を守ってくれたんだから私たちも生徒たちを守んないと！」
ーーーーーーーーー
ーーーー
ーーー
ー
「聞いた!?戦闘の許可が出た……つまり個性が使えるってことだよ！
　茨！出番だよ！」

「……分かりました。私から見て、西の３２。……２００ｍほど先で、ガスの発生源を確認……。周りに負傷者は見受けられないので、多分大丈夫でしょう……。」
塩崎の個性、「ツル」で森に充満する毒ガスの発生源を突き止めた拳藤、塩崎、鉄哲の３人。彼らは八百万が創造したガスマスクを付け、毒ガスの発生源を叩こうとしていた。
「おし！じゃあそいつを叩きに……。」
「そうだけど、闇雲に行ってもやられるだけ。慎重に行こう」
彼らは進むにつれて、ガスの濃くなって行く道へと入っていった。
「ここら辺から急激にガスが濃くなってきてる……。マスクのフィルターもそろそろ持たないかも……。」
「お。３人発見～！」ガァン！
「ッ！塩崎！拳藤！」ザッ！
ガキガキン！
鉄哲が、個性「スティール」を利用し、銃撃から２人を庇った。しかし、２発撃たれた弾丸の内の１つが彼のガスマスクを破壊してしまった。
「ッむぐぅ……！」
咄嗟に口元を覆ったが、それにも限界がある。
「「鉄哲（さん）！」」
鉄哲が睨む先には、ガスを発生させているのであろうヴィランが拳銃を彼らの方に向けていた。
「お～。今の防ぐか～。さっすがエリート！」
背丈は中学生位だろうか。学ランに、ガスマスクを装着しているヴィランだった。
「ま、何発も食らえばさすがに持たないでしょ。」ガァンガァン！
「っぐ……！」
スティール化しており、銃弾を防げてはいるものの、受けたところから血が出てきた。
「あれ？もう終わり？だったら次はあの女どもでやるか……。」チャキ……

「……っ！」
「……！（させてたまるか……！クソ……鉄分が足りねぇ……。でも拳藤と塩崎が……！）」
　口元に流れ込んでくるガスと、銃弾を何発も受けたことにより、かなりのダメージを受けた鉄哲。だがこのままでは、拳藤と塩崎が射ち殺されてしまう……。その時だった
　ボボボボボボボボ！ボォォォン‼？
「なんだ⁉？」
　突如大量の気弾がヴィランの足元に着弾してヴィランの注意がそれた
「拳藤！　鉄哲！今のうちだ‼？」
「今の声は緑谷⁉？」
「ですが今がチャンスです拳藤さん！鉄哲さん‼？」
「了解っ！」ブォン！
「なっ⁉？」
「……！」ズガシャア……！
　拳藤の大拳で風を出して毒ガスが薄くなった瞬間、鉄哲が鋼鉄化した腕でガスマスクの敵の顔面に強烈な一撃を入れた。ガスマスクは割れて、その素顔があらわになった。
「……っはぁはぁ……！」
「大丈夫ですか⁉鉄哲さん！」
「ああ……お前の個性で、あのガキ拘束しといてくれ……」
　先ほどのストレートで、ガスを放っていた敵は気絶したようだ。
「分かりました。」シュルシュル
　シュタ
「なんとか援護が間に合ったか」
「緑谷！どうして此処に？」
「俺は本体じゃなく分身だけどな…ヴィランと戦っているお前らがいたから手助けしたんだ」
「助かった…あのままだとやられていたぜ」
「ありがとな緑谷」

「助かりました」
「俺の本体はマスキュラーって奴と戦ったから疲労とダメージが多い…そろそろ消える」
そう言った後分身の出久は消えた
「それだけダメージがあるのか…緑谷は無事なのか？」
「そうだね…無事だといいけど」
ーーー
「ガスが止まったようだな（分身2が消えた…本体に何かあったんだな）」
「そうみたいだな」
出久（分身3と4）は他のクラスメイト達を探していた
「な……！八百万さん！」
「あれは脳無⁉？」
視線の先には八百万を担ぎ、脳無から逃げている泡瀬溶雪というB組の生徒がいた。
「まずは脳無を……かめはめ波ぁぁぁぁぁぁぁ⁉？」
「うお！何だ⁉？」
ドオオオオオオオン⁉？
「ギョオオ……！」
疲労により威力が半減してしまい、決定打には至らなかったが、一瞬怯ませることはできた。
「く……早く逃げろ！俺達が時間を稼ぐ⁉？」
「え？あ、ああ！」
泡瀬は八百万を背負ってその場を離れた
「さて、本体に何かあった可能性があるから俺達もいつ消えるか分からねぇ…」
「それでもやるしかないな」
分身3と4は脳無と戦闘を開始した
「だらららららら⁉？」
ドガガガガガガガ！
「ファイナル・フラァァァァァァァァァッシュ⁉？」

ドオオオオオオン‼?

「ガ…ァァ」

「ふぅ…」

「思ったより苦戦したな」

「大丈夫か⁉?って緑谷が2人⁉?」

「無事でしたか?緑谷さん」

心配した泡瀬と気絶から目を覚ました八百万が駆け寄ってきた

「泡瀬君に八百万さんか」

「苦戦したが大丈夫だ」

「それは良かったです」

「だがこいつは行動不能にしたが直ぐに回復する可能性がある」

「マジか⁉?」

「だから八百万さん此奴に発信機をつけられる?」

「それなら任せてください」

八百万は脳無（行動不能中）に発信機を設置した

「よし、この場から離れよう」

泡瀬達は脳無が回復する前にその場を離れ草むらに隠れた。暫くすると脳無は起き上がり獲物を見失ったのか森の奥へと退散していった。その後分身3と4は施設へ行こうとする八百万と泡瀬を先に行かせた後消えたのだった

「…!ガスが消えた‼?」

「轟!ガスが消えた今のうちに一旦撤退するぞ‼?」

「肉……!肉面!にくぅうううめぇえええん!

僕の、獲物、肉、肉、肉ぅぅ!」

体が、口以外全て拘束服で覆われたヴィランが、歯を刃物に変えて襲いかかって来ている最中だった。

「クソ……!（見るからにヒョロヒョロの男だが……地形と個性の活用の仕方がうめぇ……相当場数を踏んできてる……。）」

ズドォォォン……!

「!?何だ!?」

「グァァァァァァ!」

「轟、心操！どちらでもいい！早く……光を！常闇が暴走した！」
複製腕を使い、障子がそう言った。どうやら一緒に行動していたようだが、何かの拍子にダークシャドウが解き放たれたようだ。
「暴レタリンゾォォォォ！」
「だ、駄目だ……！その子らの肉面を見るのは僕だ……！僕の仕事……邪魔、するなぁぁぁ！」ジャキン！
「ぐっ！おい！心操……！」
「待て！」
ムーンフィッシュが歯刀をダークシャドウに突き刺したーーーーと思われたが、歯刀はダークシャドウを貫通し、ダークシャドウによりムーンフィッシュは木をへし折りながら叩きつけられた。その衝撃により歯は一本残らず折れ、ムーンフィッシュは伸びてしまった。
「あれは痛いな…」
その様を見た心操はダークシャドウの力を見てそう呟いた。
「ガァァァァ！暴レ、暴レタリナイゾ！」
バシュッ！
「ひゃん！」
轟の個性による光に怯んだダークシャドウは常闇の体へと収縮していった。
「ハァ……！ハァ……！助かった……！」
「大丈夫か？常闇」
「俺達が防戦一方の相手を一瞬で……」
「障子、心操、轟……悪かったな。複製腕が切り飛ばされた瞬間…怒りに任せダークシャドウを解き放ってしまった。闇の深さ…そして俺の怒りが影響されダークシャドウの狂暴性に拍車をかけた…結果、収容もできない程に膨張し、障子や……皆を傷つけてしまった。」
「そう言うのは後だ。ヴィランは常闇が倒したし、一旦宿舎に戻るぞ」
「ああ……そうだな」
途中で、麗日たちと合流した轟たち。だが、彼らはあることに気付いた。

心操、常闇がいなくなってることに。
「彼らなら、俺のマジックでいただいたよ！常闇君はアドリブさ。ムーンフィッシュはあれでも死刑判決控訴棄却されるような生粋の殺人鬼だ。それを倒す彼も良いと判断したのさ」
「心操達を返せ‼？」
「返せ？妙な話だなぁ。彼は彼自身のもの。誰のものでもないぜ。このエゴイストめ！」
「戦闘中にお喋りとは……随分と余裕だな」ガキィィン！
轟が最大威力の氷塊を放つが、それも機敏な動きで避けられた。
「悪いね……俺ぁ逃げ足と欺くことだけが取り柄でよ！ヒーロー候補生なんかと戦ってたまるか！」
２人を閉じ込めているのであろうビー玉を握り締め、通信機を入れた。
「開闢行動隊！目標通り〝餌〟の回収は達成だ！短い間だったがこれにて幕引き!!予定道りこの通信の数分以内に〝回収地点〟へと向かえ！」
開闢行動隊全員に通信が行き渡った。颯爽と逃げ去っていくＭｒ．コンプレス。この時の彼はまさか誰かに先回りされているだなんて微塵も思っていなかっただろう…

敗北と林間合宿の終わり

その頃出久は舞空術で空から敵を探していた
「（体力はだいぶ回復したがまだ身体中が痛え…ん？あれは）」
出久は地面に降りた後木に隠れて話を聞いていた
「ふー……撒くのオジさん結構キツかった～」
「おーＭｒ。お疲れさん。ちゃんとゲットしたんだな？」
「おう！バッチリよ。もう１人だけアドリブで頂いてきたけど。」
「？もう１人？」
「常闇君って言ってさ。あのムーンフィッシュを秒殺したんだよ。今日の収穫は最高だ……！」
「私も血ィ２人分取れましたー！」
「やったなッ！少なッ！」
「２人分かよ……。」
「仕方ないでしょう！２人相手だったんです！」
「まぁ良いよ。さァて、帰ると「帰す訳にはいかねぇぞ‼？」ううぉっ⁉お前！いつからいたんだ⁉？」
緑谷がすぐ後ろから近づいてきた。
「２人を返してもらうぞ」
「へへへ……ちょっち驚いたが早速エサに釣られた魚がいたな！わざわざそっちから来てくれるんなら、嬉しいぜ！」
コンプレスが個性で圧縮しようとするが
「遅え‼？」
ドゴォ‼？
一足先に前に回り込み、後ろ回し蹴りを腹に入れた。
「ぐふぅ……！」
「返してくれないと困るんだよ」
そう言いコンプレスに近寄っていく。
「ちぃっ……。」ゴオオオ……
「やめときな。その炎、自分も焼くんだろ？（此奴の口から常闇と心操の気を感じるな）おらぁ‼？」

出久はコンプレスが口の中にビー玉を隠している事を察して腹を殴った
「ごほぉ！」
コンプレスは口からビー玉を吐き出した
「回収完了」
「緑谷！」
コンプレス達を追いかけていた轟が駆けつけてきた
「轟！この中に常闇と心操が‼？」ブンッ！
パシッ
「受け取ったぜ緑谷」
「さて、心操と常闇を解放してもらおうか」
「……分かったよ。」バチン！
「ぐぅっ……みど、りや……助かった」
「悪りぃ…油断した」
「だが、手ぶらで帰るわけには行かないからな」
「隙ありですよ」
ブワッ
「な⁉？」
いつのまにか出久の背後に黒霧がワープゲートを開いていたので出久は判断が遅れてしまった
「目的の物は手に入れた。帰るぞ」
死柄木達はワープゲートに入ろうとしていた
「「緑谷‼？」」
「すまねぇ…後は頼む」
轟と心操が追いかけようとしたが間に合わず出久はワープゲートに消えてしまったこうして、楽しい思い出となるはずだった林間合宿は最悪なものとなった。
襲撃に来たヴィラン（マスキュラーやマスタード、脳無）は駆けつけた警察やヒーローが捕まえたが重軽傷者多数…行方不明者一名という結果を残して……。
「……俺は。緑谷に救われた」

「俺もだ。戦闘訓練で緑谷に心を救われた…手が届かなかった」
「クソ…」
「常闇さん……」
「轟……」
「心操…」
　ある病院にてA組B組ともに合宿の後、入院していた。雄英は学園閉鎖状態となり今は療養に専念しているといった様子だ。
「……俺は、緑谷を連れ戻そうと思う」
「な!?正気か切島!?」
「正気だ！俺は本当にそう思っているし、例え1人でもやる気だ！」
「無茶だ……！委員長としてそれは許すことができないっ……！」
「俺もだ。確かに緑谷を連れ戻しに行きたいという気持ちはよく分かる。だが早まる必要はないはずだ。」
「……俺は行くぜ。」
「心操……。」
「俺もだ緑谷を連れ戻したい」
「……くっ！危ないと思ったら引く……この約束を守るなら、俺も行ってやる！」
「……夜、明日の夜だ。行くってやつは病院前に集まってくれ。無理に来る必要はない。」
　ヒーロー科の間に、確かな亀裂が生まれた瞬間だった。
ーーー

は助けず蔑んで、苦しんだんだろ?ヒーローもそんなことを思って助けたりはしない」
「…」
「ヒーローは助けられてないのに、ヘラヘラしてさ… 恨まないのか?」
「恨むことはあったさ…なんで自分がと思ったこともある」
「なら」
「だけど、俺がなりたいのは最高のヒーローになる事だ。無個性だろうがそんな個性差別は間違っていることを伝えたい。お前に何を言われようが俺は”希望のヒーロー”になるからな」
「間違いを伝える… ?バカか出来るわけないだろ」
「出来ないと思うのは誰も出来たことがないからだ。だから俺が最初にそれを伝える」
「はぁ… 心もヒーローかよ… なんで蔑すまれたのに夢見んだよ… あーそうか、分かった」
「… ?」
「全部オールマイトのせいだ」
「… は?(何言ってんだ此奴)」
「あいつが助けられてないものを無視して、夢を無駄に見せようとしているあいつがいるから、こんな奴が出てくるんだ」
「それはお前の勝手な思い込みだ‼?」
「何だよ… 消すぞ?」
『やめるんだ弔。彼に下手なことをしたら君は一瞬で倒されよ』
「お前は… !(此奴がオールフォーワンか)」
「先生…」
『やあ緑谷君。君は駒として扱わないで正式に仲間として向かい入れたいね。無個性でも強い力は僕も素晴らしいと思うよ』
「敵に褒められても嬉しくないね…仲間になる気はないぞ」
『そうかい』
「(さて、どうやって此処から脱出するか…オールマイト達がなんとかしてくれると良いけどな)」

出久はどうやって脱出するか死柄木達に悟られないように考え始めた

ｖｓオールフォーワン戦
雄英謝罪会見、奪還作戦開始‼？

　出久がどうやって脱出するか思考をしている頃雄英では、緊急会議が開かれていた。
「敵との戦闘に備えるための林間合宿での襲撃……。恥を承知の上でのたまおう。『敵活性化の恐れ』という我々の認識が甘すぎたんだ。彼らは既に戦争を始めていたのさ。ヒーロー社会を壊す戦争をさ！」
「認識していたとしても防げていたかどうか……。これほど執拗で矢継ぎ早な展開……『オールマイト』以降、組織立った犯罪はほぼ淘汰されてきましたからね……」
「要は知らず知らずの内に平和ボケしてたんだな。俺らは。備える時間があるっつー認識だった時点でよ……」
　プレゼント・マイクが悔しそうに言う。
「己の不甲斐なさに心底腹が立つ……。彼らが……緑谷少年が必死で戦っていた頃、私は、半身浴に興じていた……っ！」
（（（（いや、何やってんだよってか半身浴って……））））
「襲撃の直後に体育祭を行う等…今までの『屈さぬ姿勢』はもう取れません。雄英最大の失態だ。奴らは我々ヒーローへの信頼を
　奪ったんだ。」
「現にメディアは雄英の非難でもちきりさ！緑谷君の件でも、ね。彼まで敵になってしまったら教育機関としての雄英はおしまいなのさ」
「信頼うんぬんってことでこの際言わしてもらうがよ……今回で決定的になったぜ。

　いるんだろ……内通者が。」
　プレゼント・マイクの内通者という言葉にその場の空気が凍る。
「合宿先は教師陣とプッシーキャッツしか知らなかったはずだ！ヴィラン連合がきてたんだ！怪しいのはこれだけじゃねぇ！携帯の位置

情報なり使えば生徒にだって……！」
　マイクが興奮した様子で捲し立てる。
「マイク……やめてよ。」
「やめられるか！この際徹底的に洗っちまおうぜ！」
「やめるんだ、マイク。それにお前は自分が１００％シロだと証明できるのか？ここの者をシロだと断定できるか？お互い疑心暗鬼となり、内側から崩壊していってしまう。内通者がいるかどうかは焦って行うべきじゃない。」
「Ｕｍｍ・・・・！」
　スナイプが制すると、プレゼント・マイクは
　反論はおろか、確固とした証拠も
　無いので黙った。
「……少なくとも私は君たちを信頼してる。その私がシロだとも証明しきれないワケだが……とりあえず学校として行わなければならないのは生徒の安全保障、メンタルケアさ。内通者の件もふまえ……かねてより考えていたことがあるんだ。それは……『でーんーわーがー来たー!!』」
　……オールマイト。」
「すいません……電話が……すっかり忘れてた……。」
「会議中ッスよ！電源切っといてくださいよ！せめてマナーモードに！」
「（着信音ダサ……。）」
　オールマイトはゆっくりとドアを開け、席を外した。
「はぁ……（……何が平和の象徴だ……！何がヒーローだ……！彼は……傷だらけになりながら生徒たちを守ってくれた……！その身を賭してまで……それなのに……私はっ！）」
　電話に出て、携帯を耳に当て、オールマイトは電話の主と話始めた。
「ーーー遅れてすまない。用事って何だい？塚内君。」
「ああ。忙しいところ悪いね。俊典。聞いてくれ。さっき、イレイザーヘッドとブラドキングの２人から調書を取っていたんだが思わぬ進展があったんだ！

……敵連合の居場所が……！突き止められるかもしれない！」
思わず言葉を失うオールマイト。そして塚内が話し終えたところで再び話し始めた。
「私は……素晴らしい友を持った……。
奴らに会ったら……こう言ってやるのさ……

我々が来た……！

ってね……！そして……緑谷少年も……探しに行く！彼を……救うために！」
「……来たな。」
病院の前には、切島、上鳴、轟、飯田、心操
、八百万が集まっていた
「何度も言うが、危なくなったら引くからな。」
「ああ……分かってる。」
「俺緑谷の場所知ってるかもしれねぇ」
「ええ!?マジか!?」
「緑谷が八百万にたのんで脳無に発信機を付けたんだ」
「泡瀬も来るとは意外だな」
「俺は緑谷に救われたからな。借りを返さないと」
「緑谷を……絶対に助け出してみせる！」
「「絶対助け出すぞー!!」」

ーーー

「着きましたわ……。」
「……ここに、緑谷君が」

「間違いありません。反応があります」
「でもよ……俺ら顔割れてるんだぜ？どうバレないように行けば良いんだ？」
「問題はそこだな……。」
「でしたら……私に良い考えがありますわ！」
八百万の考えとは？
ーーー

に不安を与えた事、謹んでお詫び申し上げます。誠に申し訳ございませんでした。』
　そう述べた後、映っている3人は深々と頭を下げた。眩しいほどに、カメラのストロボが光っていた。
「メディア嫌いの相澤先生が…」
　普段はテレビ等のメディアに決して顔を出さないはずの相澤が出ているのを見て全員が驚きを隠せないでいた。
『ＮＨＡです。雄英高校は今年に入って2回も生徒が敵と接触しています。今回、生徒に被害が出るまで各ご家庭にはどのような説明をされていたのか、また、具体的にどのような対策を行ってきたのかお聞かせ下さい。』
「体育祭開催の件から雄英の基本姿勢は知られてるはずなのに…！」
「わざわざ言わせるかよ……！」
「こっちが悪者みてぇだな……。」
『周辺地域の警備強化、校内の防犯システム再検討、強い姿勢で生徒の安全を保証する…と説明しておりました。』
　根津がそう述べると、その言葉に反応を示す者たちがいた。
「は？」
「守れてねぇっつってんじゃん。」
「何言ってんだこいつら。」
「一体何やってんだか……。」
　そう。結果が全てなのだ。周りの空気が淀んでいく……。
「生徒の安全……と仰いましたね。イレイザーヘッドさん。事件の最中、生徒に戦闘を促したらしいですねぇ……。その意図について是非、お聞かせ下さい。」
　先ほどの記者が質問を続けていた。
「私どもが状況を把握しきれなかった為、最悪の事態を避けるべくそう指示いたしました。」
「最悪の事態とは？多数の被害者とは最悪では無いと仰るので？」
　粘着するように、質問を続ける記者。
「……私が考えた最悪の事態とは……生徒たちが成す術もなく殺され

てしまうことでした……。」
「……。」
「被害の大半を占めたガス攻撃……これについては、判明しており、敵の個性によるもの。催眠ガスの類だったそうです。生徒たちの迅速かつ適切な判断により、全員、命に別状はなく、また生徒達のメンタルケアも行っておりますが、深刻な心的外傷などは今のところ見受けられません。」
根津が相澤の発言を繋ぐようにそう述べた。
「……不幸中の幸いだとでも？」
「未来を侵されることが一番の最悪だと考えております。」
「……緑谷出久君についても同じことが言えますか？」
緑谷出久の名前が出た途端、場の空気は一気に変わった。
「彼は雄英へ入学するまで〝無個性〟だと言われて虐められいたと言われてました。しかし無個性のままで雄英へ入学して体育祭では優勝、職場体験では数々の活躍をしていました。今回の合宿においても〝血狂い〟マスキュラーを倒したとも、聞いています。彼の行動には大きなヒーロー性が感じられます。もう一度お尋ねします。彼についても、同じことが言えますか？」
「（分かってはいたが攻撃的だ……！ストレスをかけて、粗野な発言を引き出そうとしている……！これはマズいぞ……恐らくイレイザーのメディア嫌いを知っての挑発か……!?ダメだイレイザー！乗ってはいかん！）」
相澤の言動を気にするブラド……
しかし……
「……行動については私の不徳の致すところです。」
綺麗に頭を下げる相澤…なんとか気持ちを抑えていることを確認し、
ブラドが安堵するも……。

「……私は、ある仮説を立てております。もしや彼は、ヴィラン連合側の内通者だったのでは？無個性として雄英のイメージダウンを図っていたのでは？合宿の際クラスメイト達を助けその場の敵達に生徒たちの個性を知らせ、有利に進めて行くためでは？敵との繋がりも無いわけではないかと……。これが、私の立てた仮説です。」

ザワ……

自信ありげに話し終えるマスコミ。周囲は大きくざわめいた。確かに、その仮説も成り立たなくは無い。しかし……相澤とブラド、その場にいたプッシーキャッツたちは知っていた。彼は内通者でもない…ヒーローを目指す心優しい少年だと言う事を

「おい、お前……それを……本気で言っているのか……！お前には、緑谷がそんな人間と一緒に見えるのか……！緑谷出久という人間はな……緑谷は無個性でありながらも人一倍努力した人間なんだぞ‼？1人の子供の為にその身が傷だらけになってでもその子を守り抜く、そんな男だ……！お前はそんな姿を見ていないからそのような馬鹿げた仮説が言えるんだ……！そんな奴を敵如きと一緒だと思っているなら、今すぐにでも

ここから消えろ……

……目障りだ……‼」

相澤の殺意や憎悪のこもりにこもった生きる物すべてを殺めそうな視線がマスコミに向かって放たれた。

「さすがにソレは話が飛躍しすぎだ……。」

「彼が敵と一緒なんて言い過ぎよね。」

「目立ちたいが上に、口からの出任せで言ったんだろ。」

「私は実際に助けられた……彼はそんな人間なんかじゃない！」

周りのマスコミからはイレイザーヘッドの粗暴な口調については全く触れられず、かえって、そのマスコミへの批判が飛び交う結果と

なった。
「……くっ……！」
　その流れを変えるように根津校長は切り出した。
「……我々もただ手を拱いてるワケではありません。現在、警察と協力し、調査を進めております。誘拐された生徒は必ず取り戻します。」
　その頃ヒーロー陣はある作戦を立てていたーーー
「なぜ俺が雄英の尻拭いを……こちらも忙しいのだが。」
「まぁ、そう言わずに……ＯＢでしょう。」
「雄英からは今ヒーローを呼べない。対局を見てくれエンデヴァー。今回の事件はヒーロー社会崩壊のきっかけになりかねない。総力をもって解決にあたらねば。」
　その場に集結した多くのヒーローたち……その多くが名の知れた猛者ばかり。今から訪れる、事の大きさを表現しているようだった。
　Ｎｏ．２ヒーロー「エンデヴァー」
　Ｎｏ．４ヒーロー「ベストジーニスト」
　Ｎｏ．５ヒーロー「エッジショット」
　シンリンカムイにデステゴロ、Ｍｔ．レディ。
　そして
　ワイルド・ワイルド・プッシーキャッツ。
「攫われてしまった緑谷君……あの子には助けられた……この恩義、返さないとヒーローとしての名が廃るわ。」
「私たちは彼に助けられることしか出来なかった……。」
「でも今度はあちきらがあの子を救う番！」
「先生．ここまで大きく展開する事態……奴もきっと必ず動き出すことでしょう……。」
「オール・フォー・ワンか……。」
　事前に知らされたヴィラン連合のアジトに移動すると同時に指示が下される。
「今回はスピード勝負だ！敵に何もさせるな！先程の会見！敵を欺くよう校長にだけ協力要請をしておいた！さも難航中かのように装ってもらっている。あの発言を受け、その日のうちに突入されるとは思

うまい！さァ反撃のときだ！流れを覆せ！ヒーロー達よ！」

――――――――――――――――――――

「何なんだよ！あの警察の数……！」

「半端ねぇぞ！」

「さっきの会見でまだ調査中だって言ってなかったか……!?」

「まさか……あの会見はダミーで突入を悟られないために……。」

「だとしたら流石はプロとしか言い様がないですわ……。」

「ならとりあえず一安心だな」

「そうらしいな」

「それに……警察やヒーローがいるのはここだけじゃねぇみたいだ……。」

　切島は全員に端末を見せる。そこには別の場所で警察とヒーローが大勢で倉庫近くを包囲している写真とその位置のマップ。

「この場所……。」

「私の発信機のデバイスが指す位置と……同じ場所ですわ……！」

「じゃあ緑谷を助けられるのか！」

「俺たち……プロ、舐めすぎてたな！」

「緑谷……待ってろよ！」

「とにかく！今はプロヒーロー達の邪魔にならぬよう、警察の方の指示に従って動こう！」

――――――――――――――――――――

「……外がうるせぇな……。トゥワイス。ちょっと見て来てくれ」

　コンコン

「どーもー。ピザーラ神野店でーす」

「誰かピザ頼んだのか？」

「（来たな…オールマイト）」

「嫌だよ、自分でいけ！任せろ！」

　扉に向かい、外を見ようとするトゥワイス。

「おい！待て！開けるな！」

　ドゴォォォォォン……!!

　凄まじい轟音と共に壁が粉砕される。!

「どうも～ピザーラ神野店でーす」
「何だァ!?一体何が起きてんだ!?」
「っ！黒霧！ゲート！」
「……ええ！」ズズズ……
「先制必縛！ウルシ鎖牢!!」
黒霧がワープゲートを開こうとするも、シンリンカムイのウルシ鎖牢により、全員が拘束される。
「木ィ？こんなもん火で……。」
ガッ！
「おおっと。動くなよ……？大人しくしといた方が身の為だぜ」
茶毘が炎を出し、木を燃やす前に気絶させたグラントリノ。
「流石は若手実力派だ！シンリンカムイ！そして目にも止まらぬ古豪！グラントリノ！もう逃げられんぞ！敵連合！何故かって!?
我々が来た！」
壊れた屋内にオールマイトの声が響く。
「オールマイト……!?あの会見後に……
!?まさかタイミングを示し合わせて……！」
バキィ！
出久は力ずくで拘束具を引きちぎった
「無事か？緑谷少年!!?」
「ナイスタイミングですねオールマイト」
「木の奴！引っ張んなってば!!押せよ！」
「む～！い～や～!!」
「攻勢時ほど守りが疎かになるものだ……ピザーラ神野店は俺たちだけじゃない……外はエンデヴァーをはじめ手練のヒーローと警察が包囲している」
この言葉に死柄木は言い返す。
「大勢でいるのはこっちも同じだ！黒霧……！」
ドシュ！

「ぐっ……。」
黒霧はエッジショットの千枚通しにより気絶させられた。
「もうおしまいだ！さぁ、お前たちのボスの居場所を教えてもらおうか！」
覇気を纏って言い放つオールマイト。
「お前が…嫌いだ‼？」
死柄木がそう言った瞬間
ドボッ……ドボッ……
「キシャァァ!!」
突如、謎の液体と共に現れる複数の脳無。
「脳無!?何もないところから……！あの液体はなんだ!?」
「エッジショット！黒霧はーーー」
「気絶している！こいつじゃないぞ！」
「どんどん出てくるぞ！」
「エンデヴァー!!応援を……!?」
直ちに外にいるエンデヴァーに応援を求めるシンリンカムイ。だが彼らもところ構わず溢れかえる脳無に対応を追われていた。
「塚内！避難区域を広げろ!!」
「アジトは2ヶ所と捜査結果が出たハズだ！ジーニスト！そっちは制圧したんじゃないのか!?」
『[ガガッ]……奴だ……』
「……ジーニスト!?何があった!!」
『奴だ……先手はもう、打たれていたんだ……不覚……[ザァァァァ……]』
ここでジーニストとの通信は途絶えた。
そして脳無の発生を傍らで見ていた生徒たち……。
「嘘だろ……!?さっき制圧したって……。」
「あれって脳無だろ!?どうなってんだよ！」
「もうわけが分かんねぇよォ！」
「一体何が……？」

「緑谷は結局戻ってきてない……。」
「嫌な予感がする」
「とにかく……俺たちは……中継が流れている場所の映像が見れるところに出よう」
「皆！急ごう！」
「おええ……」
トガの口からの脳無が発生した時に出た液体が出てくる。
「マズい！全員持ってかれるぞ！」
「緑谷少年‼？」
「オールｍ［ゴボォ！］」
「ＮＯＯＯ‼？」

テンポよく全員が１人１人と黒い液体に飲み込まれていき、その場から姿を消した。
「すみません！皆様！」
シンリンカムイが謝罪する。
「お前の手落ちではない……俺たちにも干渉できなかった。黒霧の『空間に道を開く』ワープではなく、『対象のみを転送する』類と見た！」
「俊典ィ！」
複数の脳無がオールマイトにまとわりつく
「オクラホマ……

ＳＭＡＨ！」
脳無を一気に全方位に蹴散らすオールマイト。
「ジーニストらと連絡がつかない！恐らく失敗したと思われる！」
「グダグダじゃないか全く！」
「エンデヴァー！」
オールマイトは建物の上からエンデヴァーたちに声をかけた。

「大丈夫かー!?」
「どこを見たらそんか疑問が出てくる!?流石のトップも老眼が始まったか!?行くならとっとと行くが行け!」
「……ああ!任せた!」
　建物を大きく蹴って飛んでいくオールマイト……。
「ごほ!がは!」
「ゴホッ…此処は違う場所みたいだな」
「その思考率はいいね」
「オールフォーワン‼?」
「さて弔、失敗したね。でも大丈夫ぼくがいる・・・　さあ次を頑張ろう。今はヒーローが来ると面倒だ。彼を連れて帰ろう」
「いく訳ないだろ‼?」
　バックステップで出久はオールフォーワンから離れた
「オールフォーワン‼?」
「やぁ……よく来たね。オールマイト。また、僕を殺しに来たのかい?」
「無事で良かった緑谷少年。避難しなさい」
「逃すわけにはいかないよ?僕とドクターが改造したあれと戦ってもらわなきゃ」
「”あれ”?（何を考えてんだ）」
　出久はオールフォーワンが言った”あれ”について疑問を持った
「（考えてる暇はないか…危険だが戦うしかない）手助けしますオールマイト」
「だが、君は狙われてるんだぞ‼?」
「奴の隙をついてこの場から離れます。出来る可能性は低いですが…」
「仕方がない…無理はしないでくれよ!」
「了解です」
　最終決戦の開始だ

変わり果てた姿!!?・出久ｖｓ爆豪！・前編

「かめはめ…波ぁぁぁぁ!!?」
『バリア』
「くそっ！防ぎやがったか」
「スマァァァァァァッシュ!!?」
「無駄だよ」
『衝撃吸収』
「くっ!!?」
「なら…はぁぁぁぁぁ!!?」
　出久は両手にエネルギーを溜めた
「魔空包囲弾!!?」
　ババババババババ!!?
「何処を狙ってるのかな？」
「お前…アホか？」
「な!!?」
　オールフォーワンの周りには大量の気弾があった
「逃げ場はないぞ！はぁぁぁぁぁ!!?」
ドガガガガガガガ!!?ガァァァァァァァァン!!?
　大量の気弾をぶつけたが
「やったか？」
「いや、オールフォーワンは防いだみたいです」
「バレたか」
　オールフォーワンはまたしても自分の個性で防いでいた
『み、見てください！緑谷君とオールマイトがオールフォーワンと戦ってます!!?』
　ヘリに乗っているリポーターが中継を流していた
「み、緑谷がオールフォーワンと戦っている!!?」
「見ろ！やっぱりあの記者が言ってた事はでたらめだったんだ!!?」
「緑谷ぁぁぁ負けるなぁぁぁぁぁぁ!!?」
「僕らに出来る事は緑谷君が勝つ事を祈るだけだ」

「気円斬‼?」
「『鋼鉄化』」
ガキィィィン‼?
「またか…」
オールフォーワンは身体を鋼鉄化させて防いだ
「俊典‼?」
「遅いです。先生‼?」
「お前が速すぎるんだ‼?」
グラントリノが参戦しにきたのだ
「俊典…そこにいる小僧は?」
「彼の名は緑谷少年。私の”意志”を継ぐ者です」
「彼はどんな個性を持っとるんだ?」
「いえ、彼は”無個性”です」
「無個性だと⁉?」
「本当ですよ」
「お前は逃げろと言いたいが逃げられそうにないみたいだな」
「はい、オールフォーワンは何か切り札があるみたいです」
「そうなのか?警戒をしろよ小僧」
「はい」
「はぁぁぁぁ‼?」
「スマァァァァ!」
「『転送』」
オールフォーワンはグラントリノを自身の前に転送したが
「させるかぁ!3倍界王拳‼?」
ギュン‼?
「ご無事ですか?」
「助かったわい小僧」
「何⁉?」「アァァァッシュ‼?」がはぁ⁉?」
出久が3倍界王拳でグラントリノを救ったのでオールマイトは一撃を入れる事ができたのだ
「恩師を殴ろうとした君は愚かだね…緑谷君が遅ければ君は恩師を

殴っていたよ。そして君の師匠は弱かった」
「貴様ぁぁぁぁぁぁぁ‼?」
激情したオールマイトはオールフォーワンに殴りかかったが
「『衝撃反転』」
「ぐぁぁぁぁぁ⁉?」
衝撃反転で吹っ飛ばされてしまった
「俊典‼?」
吹っ飛ばされたオールマイトをグラントリノがなんとか受け止めた
「奴の挑発に乗るな！耳を傾けるな‼?お前はそれに油断して重症になった！腹に風穴を開けられた！」
「すみません…先生」
「そろそろ止めといこうか…」
オールフォーワンの右腕が異音を立てながら変形していく。
「筋骨バネ化、瞬発力×4、筋力増強×3、槍骨、エアウォーク、増殖、肥大化、鋲……！今、考えうる最高、最適の、組み合わせられる限りの個性たちで……

君を殴る‼?」
「不味い…避けろ！俊典‼?」
「避けていいのかな?」
「っ‼?」
オールマイトの背後には瓦礫に挟まった女性がいた
「させるかぁ‼?」
ピシュン‼?
出久は一瞬で女性の元へ行き
「うぉぉぉぉ‼?」
ガゴン
瓦礫を持ち上げた
「よくやった緑谷君」
「虎さん⁉」

「彼女は任せろ」
「はい」
ピシュン‼?
出久は虎に女性を預けると再び瞬間移動した
その頃オールフォーワンは原型を留めないほどに変形し、自らに背丈をも超えた右腕をオールマイトに振り下ろそうとしたが…
ピシュン‼?
瞬間移動した出久が現れ
「ファイナル…フラァァァァァァァァッシュ‼?」
ファイナルフラッシュを放った
ドォォォォォォォン‼?
「ぐぁぁぁぁぁぁ⁉?」
ファイナルフラッシュでオールフォーワンの右腕は消し飛ばされた
「なんとか間に合いましたね」
「助かったよ緑谷少年」
「ナイスだ小僧」
「やるね緑谷君」
オールフォーワンは消し飛ばされた右腕を超再生で再生させた
「ここまで僕を追い詰めるとは感心したよ」
「褒められても嬉しくないね」
「だけど”切り札”を使う時がきたようだ」
”切り札”?」
「(何を考えてるだ…オールフォーワン)」
「(油断はするなよ)」
「出てきて良いよ爆豪君」
「「な⁉?」」
「デクゥゥゥゥ!やっとテメェを殺せるぜぇ!!」
出てきたのは額に”M”が浮かんでいて筋肉が膨れ上がった爆豪の姿だった
「ば、爆豪君⁉?その姿は…」

「この子に”吸収”の個性を与えて洗脳した後に警察に捕まったマスキュラーとマスタードを吸収させてパワーアップさせたんだよ」
「この力で無個性のテメェをぶっ殺してやる‼?」
「だから姿がマスキュラーみたいなのか」
「緑谷少年…あの少年は?」
「奴は爆豪勝己俺を虐めていた元幼馴染です」
「オールフォーワンに利用されたのか」
「彼奴は任せて下さい…元幼馴染でも止めないといけないので」
「分かった!無理はしないでくれよ緑谷少年‼?」
「オールフォーワンはわしらに任せろ」
「ありがとうございます」
　出久はオールフォーワンをグラントリノとオールマイトに任せて爆豪と対峙した
「いくぞぉ!はぁぁぁぁぁ‼?」
ドオオオオオオン
　気を解放した出久はアルティメットに変身した
「さぁ、こいよ爆豪…」
　最終決戦は近い

変わり果てた姿出久対爆豪！後編‼？「これが新たな姿…アルティメット界王拳だ‼？」

オールフォーワンをグラントリノとオールマイトに任せた後出久は洗脳され改造された爆豪と戦う為アルティメット究極形態に変身した。

「死ねぇぇぇぇぇぇぇ!!」

爆豪は筋肉増強した腕で爆破をしようとしたが

「遅えよ‼？」

ドゴォ‼？

「がはぁ!?」

出久は一瞬で爆豪の背後に移動して背中を蹴り付けた

「かめはめ…波ぁぁぁぁぁぁ‼？」

ドゴォォォォォン‼？

「効くわけないだろクソデク!!」

爆豪は筋肉増強した腕と身体で防いでいた

「やっぱり効かねえか…」

「これでもくらいやがれ!!」

ボシュウウウウウ‼？

「っ⁉？」

爆豪は毒ガスを周囲に撒いたが危険を察知した出久は間一髪で避けた

「マスタードの毒ガスか…接近戦は下手にできねぇな」

「避けんじゃねぇよ!!」

「攻撃されたら避けるのは当たり前だ…そんな事も分かんねぇのか？」

避けるなと叫ぶ爆豪に出久は呆れていた

「デクが指図すんじゃねぇ!!」

再び爆豪は筋肉増強した腕で殴りかかったが

「ファイナル…フラァァァァァァァァァッシュ‼？」

「ウガァァァァァァ!?腕がぁぁぁぁぁぁ!!」

ファイナルフラッシュで爆豪の右腕を消し飛ばした
「お前の癖は”右手の大振り”対処すれば見切れるぞ。これで右腕は使えなくなったな」
「まだだ！おい、オールフォーワン!!」
「⁉？（こいつ…何をする気だ？」
『なんだい？爆豪君今僕はオールマイトと戦ってるよ』
『超回復を持つ脳無を寄越せ!!』
『それならお安い御用さ』
《ｆｏｎｔ：９１》キシャァァ!!
「な‼？脳無⁉？」
「こいつらを吸収しててめぇをぶっ殺す!!」
　爆破はオールフォーワンによって呼び出された脳無を吸収した
「ウガァァァァァァァ!!」
　超回復の個性により出久が消し飛ばした爆豪の右腕は再生した
「理性は吹っ飛びやがったか…なら俺も新しい姿になるか。界王拳‼？」
　出久はアルティメット状態に界王を発動した
「これが俺が編み出した新たな姿…　アルティメット界王拳だ‼？

　出久はアルティメット状態に界王を発動した姿”アルティメット界王拳に強化変身した
「ガァァァァァァァァ!!」
　シュン‼？
「ガ？」
「こっちだ…ウスノロ‼？」
「⁉？」
「ビックバン・アタァァァァァック‼？」
　ドガァァァァァァァァァァァン
「ウギャァァァァァァァァァ⁉」
「（光己おばさんや勝さんには悪いけどもう此奴は救えねぇ…）これで終わりにしてやる‼？かめはめ…　波ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ‼？」

その時だった
シュン！
「な⁉？」
突如爆豪が何処へ転送されたのだ
「まさか転送したのはオールフォーワンか⁉？オールマイトの所へ急がねぇと⁉？」
ピシュン⁉？
出久はオールマイトの所へ瞬間移動した
ーーー

「俊典は一旦此処を離れろ！まだお前は終わる訳にはいかねぇからな」
「すみません先生」
「俺に任せるんだなオールマイト」
「あたしらが彼奴を蹴っ飛ばしてやるからな」
「少し休んで下さいオールマイト」
「助かるよ緑谷少年。でも、無茶はしないでくれよ」
「了解です」
　オールマイトは一旦戦線離脱した
「さて、いっちょやるかぁ！はぁぁぁぁぁぁ!!?」
　出久は再びアルティメット界王拳に変身した
「行くぞ!!?」
「「「おう!!?」」」

これが最大の技…「俺に元気を分けてくれ‼?」その名は元気玉‼?

脳無を吸収した改造爆豪を吸収したオールフォーワンは先代ワンフォオール後継者が付けた傷を全て治し巨大化してしまった。オールマイトはグラントリノに連れられて一時撤退をし(グラントリノ曰く「わしは歳だし足手まといになる可能性が高いからお前さん達に任せた」と言っていた)出久、エンデヴァー、ミルコは巨大化したオールフォーワンと対峙していた

「合わせろ緑谷」

「了解です。エンデヴァー」

エンデヴァーと出久はそれぞれの技の構えをした

「かめはめ…」

「ジェット…」

「「波ぁぁぁぁぁ‼?／バーン‼?」」

出久のかめはめ波とエンデヴァーのジェットバーンがオールフォーワンに放たれた

ドガァァァァァァァァァァァン　‼?

「どうだ?」

「いえ…効いてませんね」

「フフフフフ…効かないねぇ」

オールフォーワンは無傷だった

「これならどうだ!踵月輪(ルナリング)‼?」

「『衝撃吸収』」

ドゴォ

「っち!防ぎやがったか」

「今度は僕の番だよ」

「っ!ミルコさん避けて‼?」

「『衝撃波』」

「っとお!…危ねぇ」

オールフォーワンが衝撃波を放ったが出久が危機をミルコに伝えたおかげで間一髪で避けられた
シュタ
「助かったぜカカロット」
「無事で何よりです。ってカカロット？」
「ヒーロー名だろ？」
「今この場で言います⁉？」
「良いじゃねぇか」
「お前のヒーロー名なのか？」
「はい…そうですけど？」
「この場では俺もそう呼ぶ」
「エンデヴァーまで⁉？はぁ…分かりました」
ミルコにヒーロー名であるカカロット呼びされ更にエンデヴァーまでカカロット呼びされた出久であった
ーーーーーーーーー
ーーーーーーー
ーーー
ー
その後も何度か攻撃を続けていた出久達だがオールフォーワンには全く通じず徐々に追い詰められてしまっていた
「はぁ、はぁ」
「全く効かねえな」
「くそっ‼？」
「緑谷少年！エンデヴァー！ミルコ‼？」
ズドン
「オ、オールマイト⁉？」
「何しに来た？」
「私も加勢する‼？」
「それはありがてぇな」
「オールマイトも来たのか…しかし君が参戦したって無駄だよ」
「オールマイト元気玉を使います」

「元気玉？」
「善のエネルギーが集まったものです」
「それなら奴を倒せるんだな？」
「はい」
「時間稼ぎは任せな‼？」
「お前は元気玉とやらを作れ」
「ありがとうございますエンデヴァーにミルコさん」
「礼はいらん」
「この地球に生きる全て生き物達や近くの星に居る生命達よよ！少しずつで良い…俺に元気を分けてくれぇぇぇぇ‼？」
　空中に浮かび両手を上げた出久はエネルギーを溜め始めた
「緑谷少年が元気玉を作るまで引きつけるぞ！」
「貴様に言われなくてもやるわ‼？」
「行くぜぇ‼？」
　オールマイト、エンデヴァー、ミルコは出久が元気玉を放つまで時間加勢をする為オールフォーワンに向かった

「緑谷は何をしてるんだ？」
「両手を上げてるけど…」
「緑谷は元気玉を放つのか！」
「元気玉？」
「それはなんだよ心操」
「善のエネルギーを集めて放つ技だ。疲労がでるかもしれないが両手を上げるをんだ」
　心操は両手を上げた
「よし、俺達もやるぞ！」
「「「おう！／うん！」」」
　飯田達も両手を上げた
「くっ！確かに疲労が出るな」
「緑谷がオールフォーワンを倒すんだ。この疲労はどうって事ない‼？」

飯田達が元気を分けている中側に居た人達も次々と両手を上げ始めた
「カロライナ…スマァァァァァァァァッシュ‼?」
「ジェットバーン‼?」
「衝撃吸収＋バリア」
「くっ！」
「また防いだか…」
「カカロット！まだか⁉?」
「まだだ…だいぶ溜まったがこの大きさじゃ倒せない」
元気玉は放てる大きさになったが出久はまだ溜めないと倒せないと言った
「オールマイト！貴様が中継で見てる奴らに言うんだ‼?」
「あんたなら大丈夫だ」
「分かった…中継で見てる人達よ！オールフォーワンを倒すために緑谷少年に元気を分けてくれ‼?」
すると元気玉にどんどん気が溜まっていき…
「き、きたぁぁぁぁぁぁぁぁぁ‼?」
超巨大な元気玉が完成した
「オールマイト！エンデヴァー！ミルコ！離れてくれ‼?」
出久に言われたオールマイト達はその場から離れた
「く ら い や が れ！ オー ル フォー ワ ン ‼?
はぁぁぁぁぁぁぁぁぁ

「オールマイト、エンデヴァー‼?俺も疲労があるんだ。技を元気玉に当ててくれ！元気玉はそのくらいでは壊れない！」
「分かった緑谷少年！行くぞエンデヴァー‼?」
「お前と一緒に奴を倒す日が来るとはな」
　オールマイトはオールフォーワンに向かって走り出しエンデヴァーは技の構えをした
「プロミネンスバーン‼?」
　エンデヴァーのプロミネンスバーンが元気玉にぶつかりオールフォーワンは更に元気玉に抑えられた
「さらばだ！オールフォーワン‼?　ユナイテッド・ステイツ・オブ・スマァァァァァァァァッシュ‼?
ドゴオオオオオオオオオオオオオオオン‼?
「グァァァァァァァァ!?」
　エンデヴァーとオールマイトの技が決まりオールフォーワンは元気玉に呑み込まれた
「はぁ、はぁ」
「奴は?」
　煙が晴れると吸収が解けたオールフォーワンと爆豪がそれぞれ離れた場所で倒れていた
『今ヴィランが倒れました！オールマイト達の勝利です‼?』
「へへっ」
　フラッ
「緑谷少年⁉?」
　気絶して落下した出久をオールマイトがなんとか受け止めた
「こいつは攫われて更に戦ったからな」
「疲労が出たんだろうな」
「ゆっくり休んでくれ緑谷少年」
　倒されたオールフォーワン、爆豪は警察やヒーローに拘束されタロタロスに送られた

復活のF編
F襲来前の穏やかな日々

この話は出久が悟空達の世界にまだ滞在していた時の話である…。出久は最強の地球人！復活のF

ビルス様が地球に来日して悟空と戦ってから数ヶ月が過ぎていた。しかし生き残っているフリーザ軍がドラゴンボールを集めフリーザをあの世から甦らせ培養液でフリーザが復活してしまった！フリーザは憎き悟空とサイヤ人を殺す為初めてトレーニングをするのだった。その頃地球では

「だらららら！」

「はぁぁぁぁぁ!!?」

ドガガガガガガガ!!?

地球にあるとある平原で悟空似の道着を着た少年と紫色の道着を着た少年が戦っていた。その様子を1人のナメック星人がみていたのだ。2人は距離を取り

「かめはめ…」

「魔閃…」

「波ぁぁぁぁぁぁぁぁ!!?」

「光ーーーーーーー!!?」

ドゴオオオオオオン!!?

二つの技がぶつかり大爆発した

「はぁ、はぁ…」

「ぜぇ、ぜぇ…」

「そこまでだ！出久に悟飯!!?引き分けだ」

勝負は引き分けで終わったのだ

ーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーー

ーーーーーーー

ーーー

「審判ありがとうございますピッコロさん」
「ピッコロさんから見て僕達の勝負はどうでしたか？」
　出久と同い年くらいの少年悟飯がピッコロと呼ばれたナメック星人に勝負の感想を聞いていた。
「出久は問題なかったが悟飯…お前は動きが鈍っていたぞ？修行はどうしたんだ」
「すみません…学会が忙しくて修行をする暇がないんです」
「悟飯は学者になるのが夢だから忙しいのは仕方がないよ」
「それでもいざというときに動きが鈍いと対処できないぞ」
「僕も学会から出たレポート等を手伝うよ。分析は得意だから」
「ありがとう出久」
　ピリリリ
「ん？電話が鳴ってるぞー悟飯」
「あ、ビーデルさんからですね［ｐｉ］もしもビーデルさんどうしたの？」
『悟飯君！パンが泣き止まないの‼？』
「ええ‼？」
『何度もあやしてるんだけど泣き止まないの！』
「困ったなぁ…」
『出久君はいる？』
「一緒に修行していたからいるけど？」
『いたら連れてきてくれる？』
「うん、分かった。今から帰るね』
『待ってるよ』
　［ｐｉ］
「ビーデルさんから？」
「うん、パンが泣き止まないんだって。出久を連れてきてと言われたんだけど一緒に来てくれる？」
「勿論行くよ」
「パンは何故か出久がいると泣き止むからな…」
「それは言わないで下さいピッコロさん…父親として自信がなくなり

ますから」（泣）
　娘であるパンは出久に懐いていてしかも出久がいたら泣き止むので悟飯は父親としての自信がなくなるのだ
「なんかごめんね…悟飯」
「気にしてないよ。じゃあ失礼しますピッコロさん」
「ああ、早く帰ってやれ」
「分かりました。行こうか出久」
「うん、ピッコロさんまた修行をつけて下さい」
「ああ…」
　出久と悟飯は舞空術で悟飯の自宅へ向かった。
〔おーいピッコロよ～〕
〔界王様？〕
〔大変な事が発生したんじゃ～!!?〕
　出久と悟飯が去った後テレパシーでピッコロに北の界王から連絡が来たのだ
〔何かありました？〕
〔フリーザが復活して地球に向かって来てるんじゃ～!!?〕
〔な!!?〕
　北の界王から悟空と未来トランクスが倒したフリーザが復活したと聞いてピッコロは驚愕の表情になった。
〔どのくらいで地球に来ますか？〕
〔早くて2ヶ月後じゃ！〕
〔分かった。孫とベジータはビルス様の所へ行っているから居ないがブルマに伝えておく〕
〔頼んだぞ～〕
「フリーザが復活…!!?亀仙人様にも伝えに行くか」
　ピッコロは一番近いカメハウスへ向かった
ーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーー

場所は変わって悟飯の自宅
「うぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇん！」
「パンちゃんお願いだから泣き止んで…」
「びぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇん」
「ビーデルさん！」
「お待たせしました」
「悟飯君！出久君！」
「パンちゃんパパだよ～泣き止んで」
「うぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇん」
悟飯はビーデルから娘のパンを受け取りあやしたが泣き止まない
「やっぱり出久なのかな？」
「やってみます」
悟飯があやしても泣き続けているパンなので出久があやす事にした
「パンちゃんパパとママを困らせたらだめだよ～」
「スゥ…スゥ」
出久があやすとパンはピタリと泣き止みぐっすりと眠った
「パンは出久君に懐いてるんだね」
「出久に任せて良かったよ」
「でも僕はいつまでもこの世界にいる訳じゃないから対策を考えないとね」
出久はいつかは元の世界へ帰るので対策を考える事にした。そんな時ブルマ（ベジータの妻）からフリーザが復活したと連絡がきたのだった…